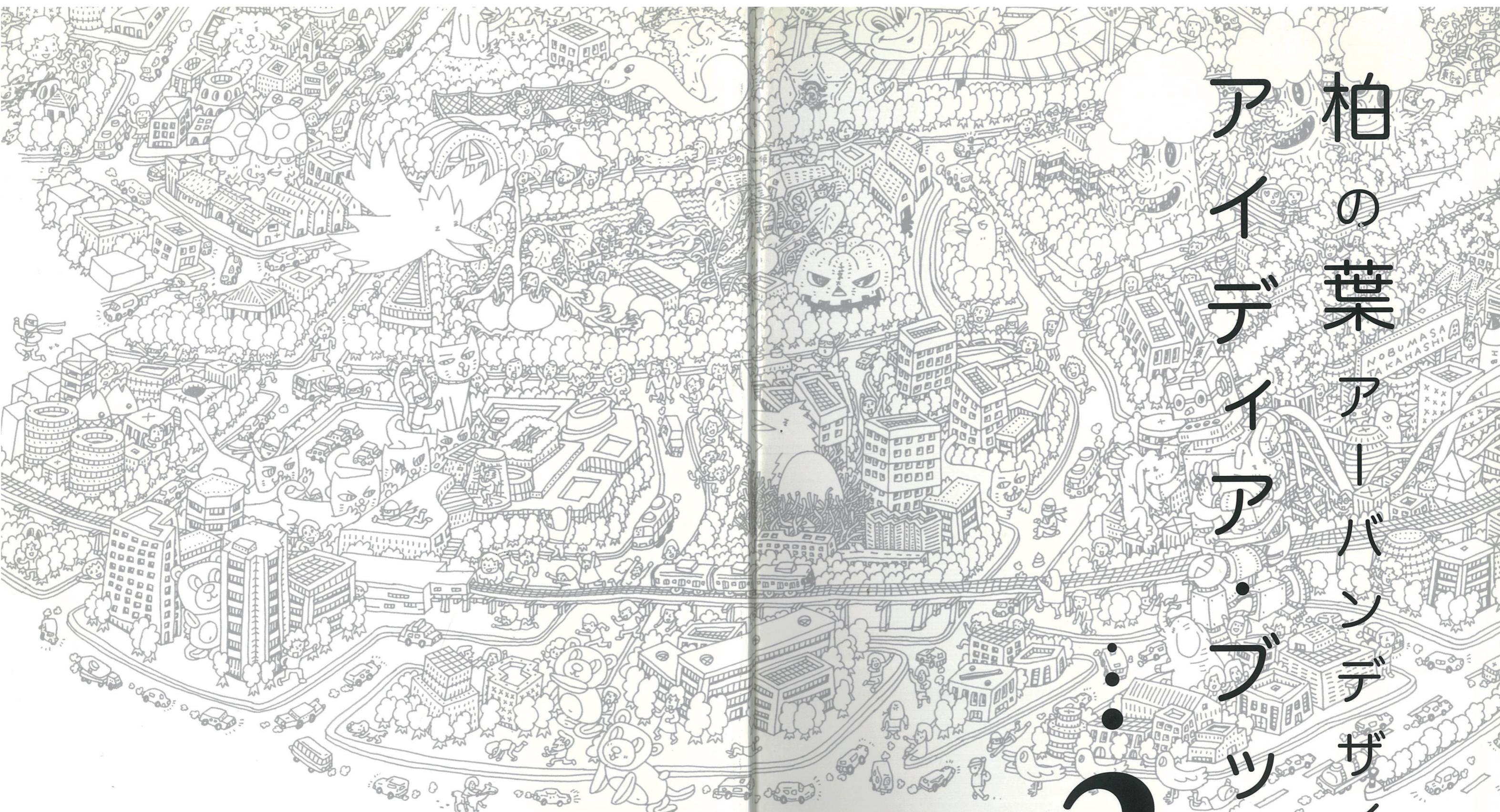


# アーバンデザイン 柏の葉アイデイアブリックン

2



柏の葉  
アーバン  
デザイン  
センター

# UDCK

Urban Design Center Kashiwa-no-ha

IEDP環境デザイン統合教育プログラム・都市デザインスタジオ2007

東京大学COE『都市空間の持続的再生学の創出』 東京大学大学院新領域創成科学研究科環境学系

柏  
の葉  
ア  
イ  
デ  
イ  
ア  
・  
ブ  
ック  
2

IEDP環境デザイン統合教育プログラム・都市デザインスタジオ2007  
東京大学COE『都市空間の持続的再生学の創出』 東京大学大学院新領域創成科学研究科環境学系

目次

1章 柏の葉	05
2章 プロセス	11
3章 提案	17
グループAーぶらっとフォーム -TX高架下を活用したまちづくり施設-	19
グループBー大学門前町 -千葉大学とまちの中間領域-	29
グループCーセルフデザイン工房 -柏の葉ライフスタイルの実験所-	39
グループDーかしわのはっぱみち -新しい境界のデザイン-	49
グループEーサイクリングプロジェクト -自転車シティ柏の葉-	59
グループFーまちなか小学校 -まちにとけこむ分散型小学校-	69
4章 講評	79

## 柏の葉アーバンデザイン・アイディアブック(その2)の発刊にあたって 柏の葉地域のアーバンデザイン－新しい公共空間を構想する－

東京大学「環境デザイン統合教育プログラム」は、新領域創成科学研究所環境学系を中心に6つのスタジオがあります。フィールドから学び、多様な課題に対する「統合的創造的な思考とデザイン」の力を高めるプログラムです。また、東京大学21世紀COE『都市空間の持続的再生学の創出』の教育プログラムとして工学系研究科の大学院生が参加し、千葉大学と東京理科大学との大学院演習との共同プログラムでもあり、異なる分野の学生や教員、専門家がスタジオ集まり、充実したプログラムとなりました。

### フィールド

都市デザインスタジオは2006年度より東大柏キャンパスの周辺『柏の葉地域』をフィールドとしています。つくばエクスプレス柏の葉キャンパス駅を含む約1300haが対象地です。豊かな自然と新しい開発が混在する「都市と田園の接点」ですが、このような「都市の周縁地域」は、首都圏の圧倒的な面積を占めており、「柏の葉地域」を考えることは首都圏の将来を考えることにもつながります。

柏の葉地域には、大学や研究機関、工業団地、大規模公園や優良農地など特異な資源があり、新しい町としての可能性があります。縮小型社会において、大都市の周縁地域では、多くの問題が起こると予測される一方で、豊かな自然などの資源を残しており、空間や活動にも大きな可能性を残しています。

現在、『柏の葉国際キャンパスマウン構想』が、柏市と千葉県、千葉大学と東京大学の共同研究として策定が進められています。都市デザインスタジオでの調査や議論、成果も活用されています。

### 新しい公共空間

スタジオのデザインテーマは『新しい公共空間を構想すること』です。物理的な空間を捉えたものから、社会空間におけるものまで広く対象となります。一方で、自治体経営が厳しい状況にあり、公共空間の整備や管理にも大きな課題があります。しかし、現在の都市を見ると、多様な活動に対して公共空間は内容も運営も発展途上にあります。

「公共空間」とは人々が自由に利用できるものです。ホテルのロビーなど私有空間だが自由に入出できる公共空間もあります。多くの人が使い交渉する公共空間があり、それぞれに感性豊かな空間で、人が生き生きと輝く空間であって欲しいものです。特に、戸外の生活空間ができるだけ豊かにあって欲しいと思います。広場や通り、路地、公園、川辺に海辺、草むらや田畠、里山や林間、やはり「オープンスペース」から構想をすべきでしょう。構想のヒントは日本の伝統空間にもあります。公と共の空間がうまく重なり、路や道、辻や橋詰などの公有空間でも、使い方は多種多様がありました。町内の共同運営であったが故に、許された自由ということでしょう。江戸の通りは、朝は市場となり、昼間は往来と談笑の場となり、夕方は娯楽と休息の場となつた。催事があれば、仕事、私事にも使う。京都の川床は、室町時代の川辺空間に始まった勧進や田楽が展開し、いつしか納涼は町衆文化の象徴になつたのでした。公共空間は文化を生み出す場でもあります。オープンスペースの最初の日本語訳は「自由空地」で、囲いなく開かれ自由な活動が認められる空間をイメージしたものと思います。その原点を考え、また、空間を多様に多層に使いこなす伝統を再考しながら、新しい公共空間を構想しようという狙いです。

### スタジオの進行

- 第1段階 『多くの人が使える小さな公共空間』の設計
- 第2段階 『実現のために主体や仕組みとしての公共』の計画
- 第3段階 『新しい公共空間が展開する地域』の構想

まず、柏の葉キャンパス駅から東京大学に至る通りに沿って、6つのサイトに「小さな公共空間」を企画設計しました。駅前にはアーバンデザインセンターを発展させた「まちづくりの起点」となる空間、千葉大学の入り口には大学施設を生かした「緑の起点」、駅近くの民有地には新しい住民の「生活の起点」、高等学校隣接地には、大学や高校と地域住民の「交流の起点」、柏の葉公園には、来訪者や生活者の多様な「活動の起点」、こんぶくろ池公園近くに「知の起点」となる空間を、企画し設計することとしました。面積が50m<sup>2</sup>から最大でも500m<sup>2</sup>程度の小さな公共空間です。次に企画設計した公共空間の周辺整備や公共空間の連続やネットワークなどを構想計画しました。また、実現していくための主体や仕組みを検討しました。そのため、周辺を分析し、また利用者や管理者をヒアリングして公共空間の課題を把握しました。また、ワークショップを開催し議論を深めたグループもありました。

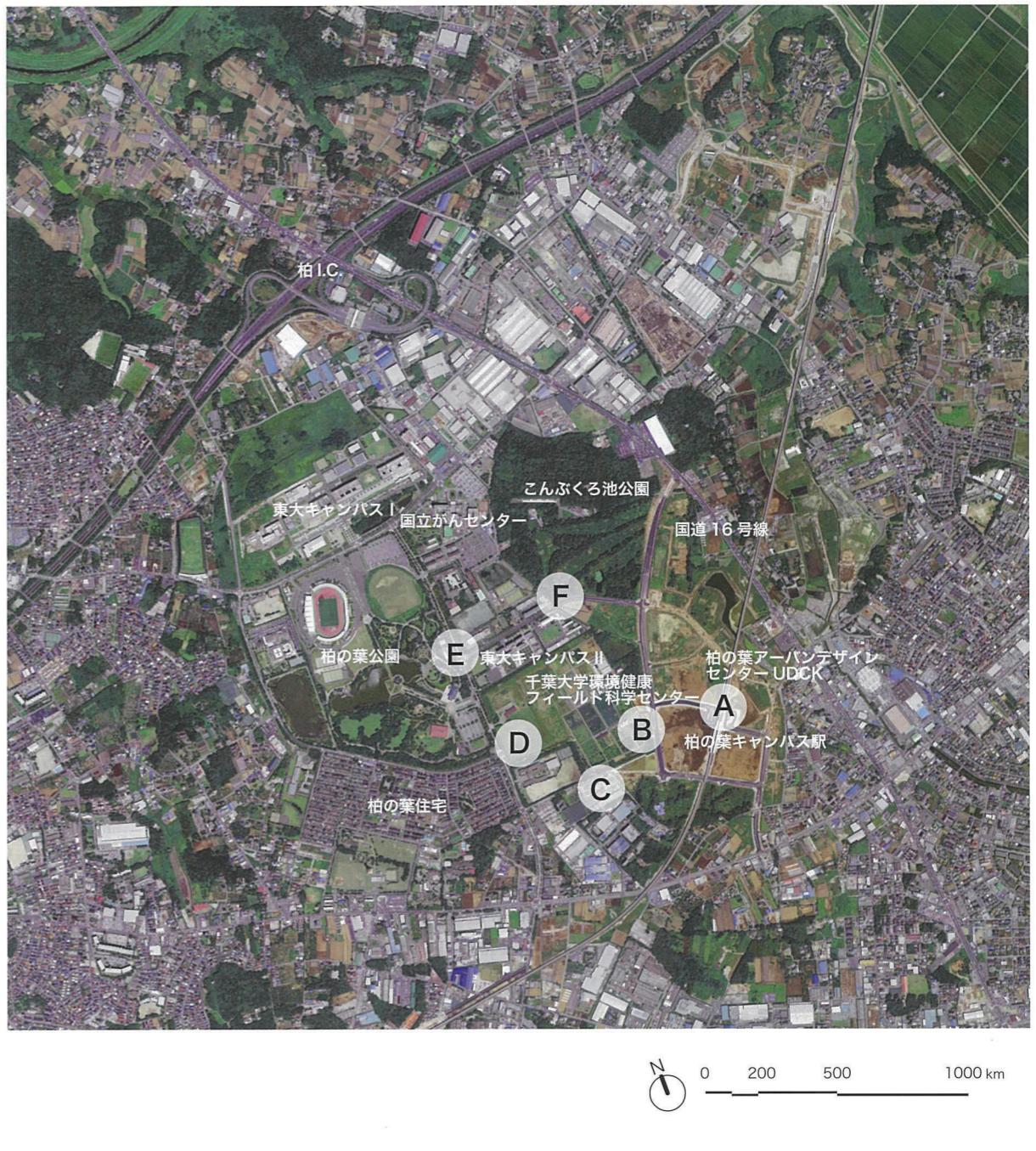
### 多くの参加

都市デザインスタジオには、柏市と千葉県、柏商工会議所の職員の方々、地元市民の方、柏の葉高等学校の先生と生徒の皆さんと、開発事業の関係者の方と、大変多くの方に参加をいただき、貴重な意見やアドバイスをもらいました。講評会には、本多晃柏市市長を始め、多くの専門家や市民の方にも参加いただきました。また、スタジオの運営は、UDCK柏の葉アーバンデザインセンターで行われ、スタッフの協力がありました。

このように多くの方や関係機関に都市デザインスタジオへの賛同と協力いただきましたことが、都市デザインスタジオの特徴でもあります。成果であると思います。指導にあっていただいた講師の皆様からも理念として、実践としての空間に多くの示唆を与えていただきました。

参加いただいた皆様に深く感謝申し上げます。また、熱意をもって、調査や構想計画、設計に取り組んできた学生諸君の努力、新しい発想やデザインの成果を高く評価したいと思います。

2007年7月25日  
スタジオコーディネーター：東京大学大学院教授  
北沢 猛



site. A 一 TX 柏の葉キャンパス駅周辺高架下  
site. B 一千葉大学駅側校門  
site. C 一民有地

site. D 一千葉大学敷地内通路  
site. E 一柏の葉公園 T字路  
site. F 一公有地

スタジオ課題対象エリア(3.6km×3.6km)と課題対象地

## 東大+千葉大+理科大+柏市+千葉県+柏商工会議所+三井不動産ほか 各分野の専門家、教員からなる充実のスタッフ

(1)常勤教員:全体進行、きめ細かな指導と分かりやすい講義をします。

- 北沢 猛 (空間計画学・新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻教授・工学系研究科都市工学専攻)  
清家 剛 (建築構法学・新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻准教授・工学系研究科建築学専攻)  
清水 亮 (環境社会学・新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻准教授)  
日高 仁 (建築家・新領域創成科学研究科特任助教・国際キャンパス担当)  
  
宮脇 勝 (景観計画・千葉大学工学部都市環境システム学科准教授)  
伊藤 香織 (都市計画・東京理科大理工学部建築学科専任講師)

(2)外部講師・スタジオ・アドバイザー:スキルアップのための指導と講義をします。

- 團 紀彦 (建築家・團紀彦建築設計事務所主宰・柏の葉駅前街区アーバンデザイン担当)  
上野 武 (建築計画・千葉大学工学部デザイン工学科キャンパス整備企画室准教授)  
前田 英寿 (アーバンデザイナー・UDCK副センター長)  
野原 卓 (都市デザイン・東京大学工学系研究科・COE特任助教)  
中島 直人 (都市デザイン・東京大学工学系研究科都市工学専攻助教)  
栗原 謙樹 (建築都市デザイン・竹中工務店設計部)  
三牧 浩也 (都市プラン・都市総合研究所研究員)  
志村 真紀 (横浜国立大学VBL講師)  
丹羽 由佳理(建築都市デザイン・UDCKディレクター)  
  
松永 安光 (建築家・近代建築研究所主宰)  
:ミニ講演会『パーミアブルなまちづくり』

(3)東大他研究科の特別講師:テーマを深めるための理論を教えます。

- 大方 潤一郎(都市計画・東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻教授)  
:ミニ講演会『都市縮小と周縁地域-東京圏の人口動態分析-』  
  
原田 昇 (交通計画・東京大学工学系研究科都市工学専攻教授)  
大西 隆 (都市計画・東京大学工学系研究科都市工学専攻教授)

(4)協力する自治体や団体、企業等:地域の視点をもとに議論を深めます。

柏市役所・柏市都市振興公社・千葉県・柏商工会議所・田中地域ふるさと協議会・柏の葉地域の企業や市民  
三井不動産・スパイラル・都市環境研究所・UG都市建築研究所

### スタジオ参加学生

□東京大学大学院

新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻 上田 恵莉 柏原 沙織 佐古 奈々美 長澤 恵 松尾 真子 平林 直  
市村 駿 小野寺 史明 松田 耕 石田 拓己 石野 正規 上猶 優美  
近藤 宗俊  
新領域創成科学研究科国際協力学専攻 田村 康一郎  
新領域創成科学研究科自然環境学専攻 米谷 法子  
工学系研究科都市工学専攻 脊灰谷 愛 矢原 有理 山田 渚 平岡 惟 パンノイ ナッタポン 亀長 尚尋  
大道 亮 鎌形 敬人 伊藤 雅人

□千葉大学大学院

工学研究科建築・都市科学専攻 白金 友明 姜 作然 山室 裕之

□東京理工大学大学院

理工学研究科建築学専攻 平川 聰 尾上 永晃 竹川 征 篠田 尚紀 仲村 明代 上野 良子



# 1章 柏の葉

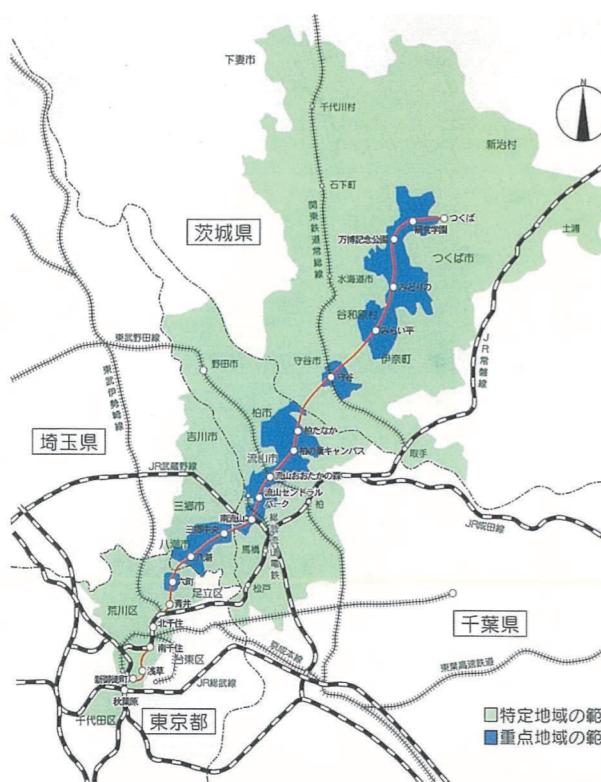
## 柏の葉の現況

### 大規模な開発が進むTX沿線地区

スタジオの課題対象地である柏の葉キャンパス周辺地区は東京駅から北西に28kmの場所に位置し、これから大規模な開発が予定されている郊外型都市である。昭和63年以降、つくばエクスプレス（以下TX）とその沿線開発の一連の事業が進められてきた。沿線開発は東京都、千葉県、埼玉県、茨城県内20地区で進んでおり、面積約3000ha、計画人口約24万人に達する、現在国内最大級の開発となっている。

TX柏の葉キャンパス駅周辺もそれによって整備が進む地区である。平成12年から事業主体の千葉県によって鉄道の建設と沿線の基盤整備を一体化して行う「柏北部中央地区一体型特定地区区画整理事業」が進められている。事業規模は約272.9ha、計画人口は26,000人である。平成17年8月にはTXが開通し、本格的なまちづくりが急速に進みつつある。

TXが計画された後に起こったバブル崩壊は、従来型の郊外開発の需要の低下をもたらし、沿線開発の需要見通しは厳しくなった。新時代に対応した新しいライフスタイルを提案するまちづくりが望まれている。

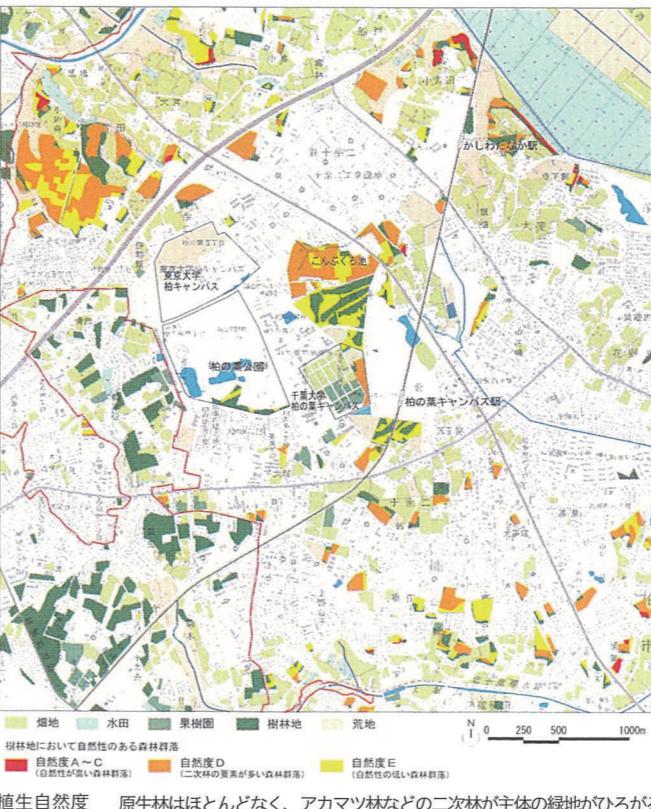
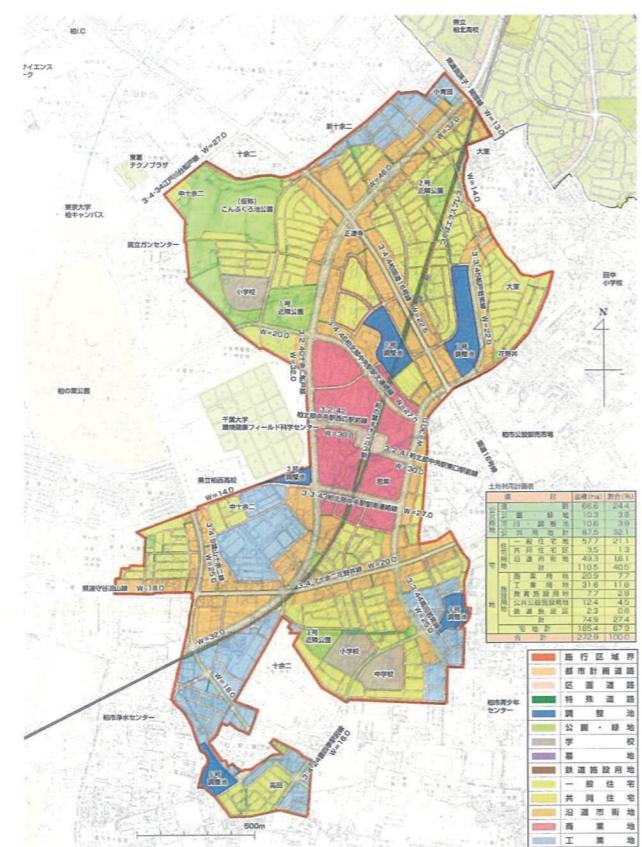


### 豊かな自然環境

キャンパス駅周辺の地域には、柏の葉公園、こんぶくろ池公園など豊かな自然環境が存在している。また、台地の斜面には線状の斜面林が存在し、台地上は畠地として利根川沿いの平地は水田が広がっている。また、こんぶくろ池公園をはじめとして地域の歴史を伝える「野馬土手」が多く残っている。これは江戸時代にこの地が小金牧と呼ばれる将軍直轄の軍馬の育成地であり放牧地と村落、農地を隔てるために造られたものであり、歴史的な記憶の点からも重要な資源となっている。

駅から離れた正連寺地区や大青田地区、大室の集落などには貴重な農村風景も広がっている。鎮守の社としての神社や屋敷林などのが残っていて郊外の豊かな表情がある。こんぶくろ池を中心に各地に点在する湧水も柏の葉の自然環境の豊かさを物語っている。

戦後、市街化が進展し畠地、水田、樹木林は著しく減少してきた。周辺は、台地と枝状に入り組んだ急傾斜地が存在し、台地上には畠地、樹木林、低地には水田が広がってきた。区画整理事業が進む中、このような地域の特色のある自然環境を積極的に評価し、保存していく取り組みが必要とされている。



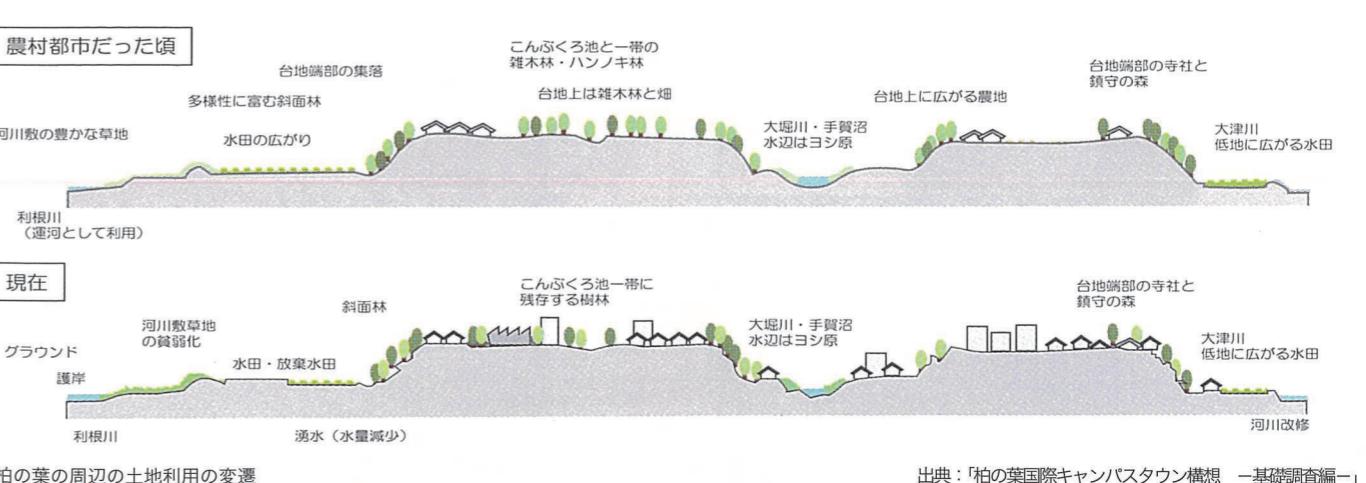
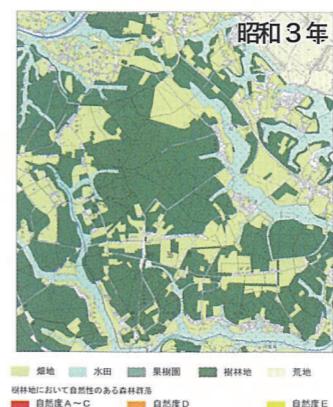
### 産学連携をすすめる研究都市

柏の葉周辺には、高度な研究や産業が集積している。大学の最先端の研究施設として東京大学柏の葉キャンパス、千葉大学環境健康フィールド科学センターがあり、この地域の大きな性格となっている。東京大学には職員と大学院生を合わせ約2500名が研究活動を展開しており、これからは外国人研究者の増加も見込まれている。

またその周辺には東葛テクノプラザ、東大柏ベンチャープラザなどの産学連携施設があり中小企業の産業促進が進められている。国立がんセンター東病院といった高度な医療施設、警察庁科学警察研究所、関税中央分析所などの官庁の施設もあり、高度な研究都市としての性格をより強いものにしている。

さらに常磐自動車道柏IC周辺には十余二工業団地がひろがり、産業が盛んな地域でもある。都心直結の知的産業拠点、産官学の密なる連携から、新たなビジネスを創出する場所としてさらなる連携や新産業の創出が計画されている。

またTXを軸として展開している筑波研究学園都市、TXの始発駅であり、近年IT拠点として企業や研究機関、大学の集積が進む秋葉原との連携も期待されている。また現在の柏駅周辺、他のTX新設駅の新市街地周辺と共に広域交流拠点の業務集積地区としての期待もある。



出典：「柏の葉国際キャンパスマップ構想 基礎調査編一」

## 柏の葉のまちづくりの取り組み

柏の葉エリアでは、さまざまなまちづくり構想が同時に進行している。2005年8月、TX沿線地域（東葛地域）において「国際学術研究都市構想」が採択された。柏・流山・野田の三市にまたがるTX沿線地域は「環境・健康・創造・交流」の国際学術研究都市として、新しいライフスタイルを創造する“キャンパス・タウン”として位置づけられた。

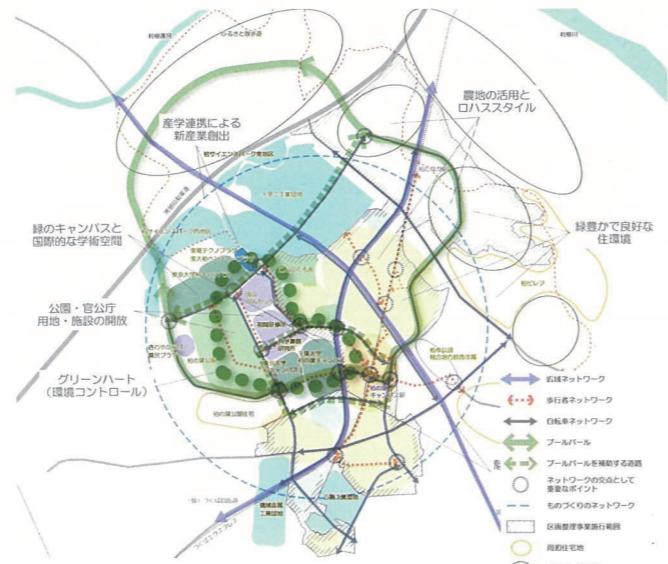
柏の葉では大学が産官民と連携し街づくりの中心を担っていることがこの地域の大きな特徴である。柏市では東京大学、千葉大学を始め近隣地域にある複数の大学の連携を呼びかけ、NPO、企業も参加して「大学コンソーシアム柏」として活動を開始している。大学間や、地域の垣根を越えた知のネットワークで生涯学習や、自然保護、産業の振興、市民の健康づくり、国際化、新しいライフスタイルなどの創造をテーマに大学と地域が共に発展できる未来像を描いている。

### 柏の葉キャンパスタウン構想

柏の葉地域では、「環境・健康・創造・交流の街」をコンセプトに、国や千葉県、柏市をはじめとする自治体、東京大学や千葉大学などの学術機関、都市再生機構、柏商工会議所など関係機関と連携して、まちづくりを進めている。

柏の葉キャンパスタウン構想では、これまでの計画や検討結果を踏まえつつ、少子高齢化や環境問題、更なる情報化社会、コミュニティ再生、安全・安心で美しい住環境など、長期的な課題に対応し、かつ持続的な発展が可能な新しい都市像を明確化していくために、調査研究を行っている。

地域の関係者である県、市、民間企業、市民・NPO等と連携・協働による調査研究として2ヵ年（2006年～2007年）で実施することとしている。



柏の葉キャンパスタウン構想図

### 柏の葉国際キャンパスタウンの位置づけと方向性

#### サステナブル・ディベロップメント

- ・地域の自然との共生
- ・地域資源の活用
- ・エコシステムの導入
- ・スマートグロースー適正容量と適正な成長
- ・複合用途と多様な居住者層
- ・ケミレスタウン
- ・低負荷型開発や交通システム

#### 広域連携による新産業創出拠点形成

- ・つくばや秋葉原とのTXを軸として連携した軸頭連携拠点
- ・産官学連携の学術就業の拠点（特にインキュベーションによる創業・起業）
- ・柏サイエンスパーク

#### 国際キャンパスという個性

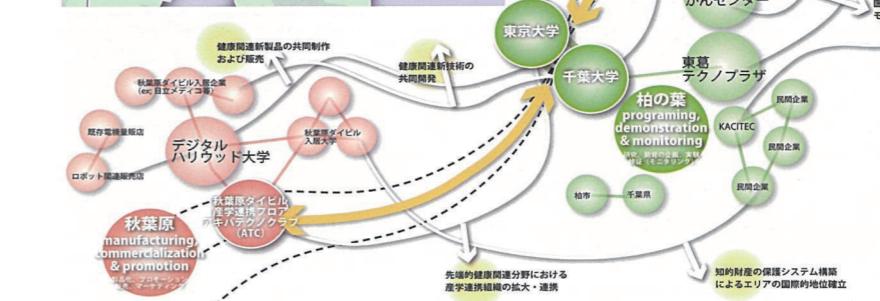
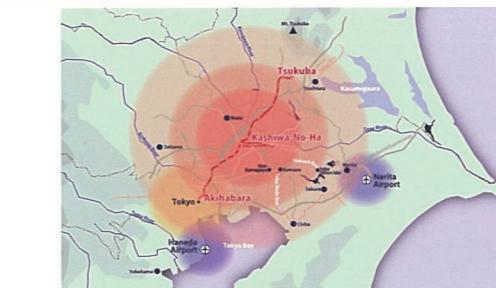
- ・大学と連携したまちづくり
- ・国際キャンパスタウンのイメージづくり
- ・産業創出型キャンパスタウン
- ・国際性的ティストの創出
- ・外国人居住・定住への対応
- ・多様な教育環境の形成

#### 新郊外型ライフスタイルの創出

- ・首都圏外周部の新郊外開発（交流型）
- ・健康で持続可能なライフスタイル（LOHAS）
- ・多様な居住者層、多様なライフスタイル対応住宅供給
- ・ソフト・ハード両面の安全・安心確保
- ・スマートフォンも選択可能な生活環境
- ・自然や都市型農地と調和した新郊外型生活文化の創造
- ・コミュニティの充実と生活・環境の向上

#### 水準の高いアーバンデザインと地域活力の創出

- ・適度のスケール
- ・水準の高い地域経営と管理
- ・質の高い公共空間や民有空間のデザイン
- ・交流と文化の創造のためのプロモート
- ・環境モニタリングによるまちづくりのスマートアップ



柏の葉とつくばエクスプレス沿線地域との連携

### 理念と方針

#### 自然環境と共生する都市像

- 環境共生を実感できる空間を構成し、良好な開発を誘導するグリーンネットワーク戦略を推進する

#### 新しい産業空間と就業環境

- 海外やTX沿線と連携し、高度な研究施設や基幹産業を活かして新産業を創出する

#### 国際的な学術空間

- エリア全体を研究フィールドとし、国際的な学術交流を多発的に展開できる舞台を用意する

#### 交通の総合的計画と管理

- 人を優先し、マルチモーダル（複数の交通手段）を確保する

#### 新しいライフスタイルとコミュニティの形成

- 多様なニーズに対応し、新しいライフスタイルを提案する柏の葉スタイルを実現する

#### デザインマネジメント

- 新しいマネジメントスタイルのあり方を検証する

### 戦略的なプロジェクト(短期・中期)の候補

#### 施策案

- グリーンハート環境コントロール ————— 短期～中期
- 環境、生態系の現状と変化のデータ表示 ————— 短期
- グリーンネットワーク ————— 短期
- 基幹産業の連携強化と新産業創出 ————— 短期～中期
- 産官公のネットワーク型産業クラスターの形成 ————— 短期
- 柏の葉キャンパスタウンITコンソーシアムの研究開発・実用化の推進 ————— 短期
- 多様なベンチャー・オフィスや支援プラットフォームの整備 ————— 短期
- 起業家が定住できる住宅供給 ————— 短期
- インターナショナルスクール・保育園の誘致 ————— 短期～中期
- 外国人研究者や留学生向け賃貸住宅 ————— 短期
- 国際会議場・ホールの整備 ————— 中期
- 創造的文化事業の推進 ————— 短期～中期
- 産学・地域連携施設の整備 ————— 短期～中期
- 国際的研究フィールドとしてのハード・ソフト ————— 短期～中期
- オンデマンドバス・低負荷型バスの導入 ————— 短期
- 自転車ネットワーク整備と沿道の魅力化 ————— 短期
- 共同自転車システムとポイントシステムの整備 ————— 短期
- 新たな歩行者ネットワーク整備 ————— 短期
- BDF等地球に優しいエネルギーの活用 ————— 中期
- 市民農園・共有農地によるスローライフ ————— 短期～中期
- ロバスプロジェクト・健康ストリートの推進 ————— 短期
- ケミレスタウン®の実証実験と展開事業 ————— 短期～中期
- グリーンマーケットの開催 ————— 短期
- 多様な住戸タイプの供給と緑豊かな居住環境 ————— 短期～中期
- 公的機関の運動施設の開放や公園敷地の活用 ————— 短期～中期
- UDCKの設置—研究計画、情報発信、教育学習 ————— 短期
- タウンマネジメント組織の確立 ————— 短期
- 環境モニタリング事業(産学・学々連携) ————— 短期～中期
- 住民・NPO・行政・研究機関の協働事業 ————— 短期

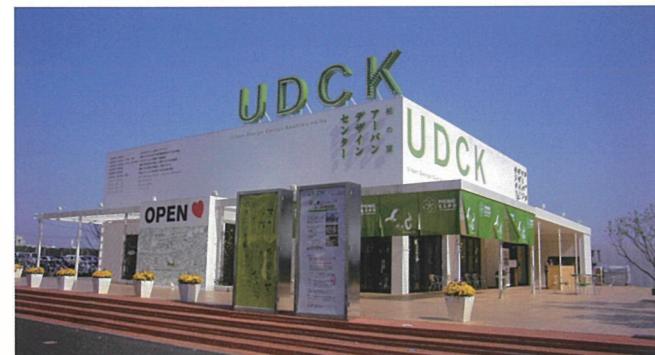
出典：「柏の葉国際キャンパスタウン構想 基礎調査編一」

# 2章 プロセス

## UDCKの取り組み

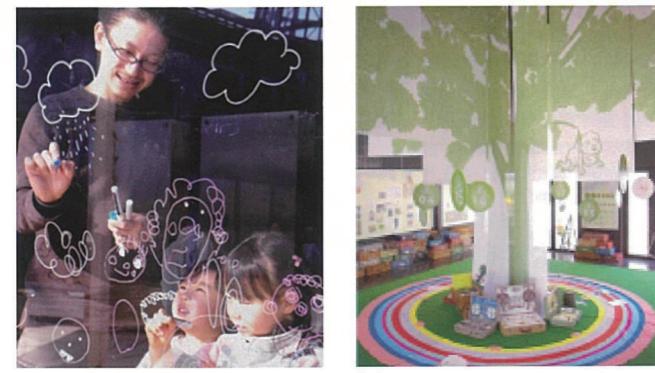
2006年11月、柏の葉キャンパス駅前に誕生した柏の葉アーバンデザインセンター(UDCK)は、東京大学、千葉大学、柏市、三井不動産、商工会議所などが中心となり運営している街づくりの情報拠点である。大学間、大学と行政、行政と市民など、街づくりに関わる人々が景観や、デザイン、コミュニケーションのあり方を多角的に考え、意見交換する場である。

具体的な活動としては、UDCK まちづくりスクールなどの実践的なまちづくりの担い手を育成していく教育活動、オンラインデマンドバスなどの街づくりに関わる戦線的な社会実験を行う実験活動、世界の最先端の街づくりを紹介する展示活動、エリアにおける「環境・健康」を意識した都市や生活像を模索する環境活動、K サロンなどの異なるフィールドの人々の連携を促す交流活動を行う。



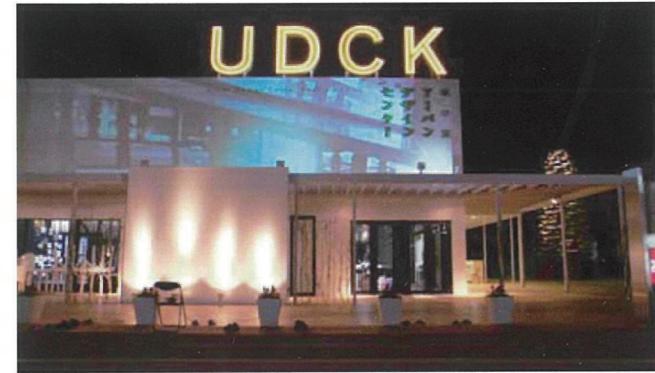
UDCK外観

2006年11月オープン以来、常に各種の展示やイベントが開催され、まちづくりに関わる人だけでなく、一般市民にも開放されている



らくがきワークショップ

「ピクニック月間」の展示風景



森脇裕之氏によるメディアアート作品(2006年12月「未来観測」イベント)

## 多角的に展開する各種プロジェクト

\*柏・流山地域で提案されている産業・都市づくりを支える「21のアクションプラン」より  
柏の葉近辺で展開されるものを抜粋

### ■環境プロジェクト

- ・緑のネットワーク、二重の八重桜並木
- ・エリア省エネ・マネジメントシステム
- ・健康ストリート
- ・資源循環型農業の推進
- ・大学と連携した自然活用

### ■健康プロジェクト

- ・柏の葉予防医学プロジェクト
- ・ケミレスタウン・プロジェクト
- ・ユニバーサル健康サービス産業創造コンソーシアムの推進
- ・がん患者・家族総合支援センター
- ・コミュニティスポーツ・プログラム

### ■創造プロジェクト

- ・東京大学駅前研究センター
- ・柏の葉キャンパスシティ IT コンソーシアムの研究開発・実用化の推進
- ・健康なIRTメカトロ住環境プロジェクト
- ・ゲノム新領域観光科学構想の推進

### ■交流プロジェクト

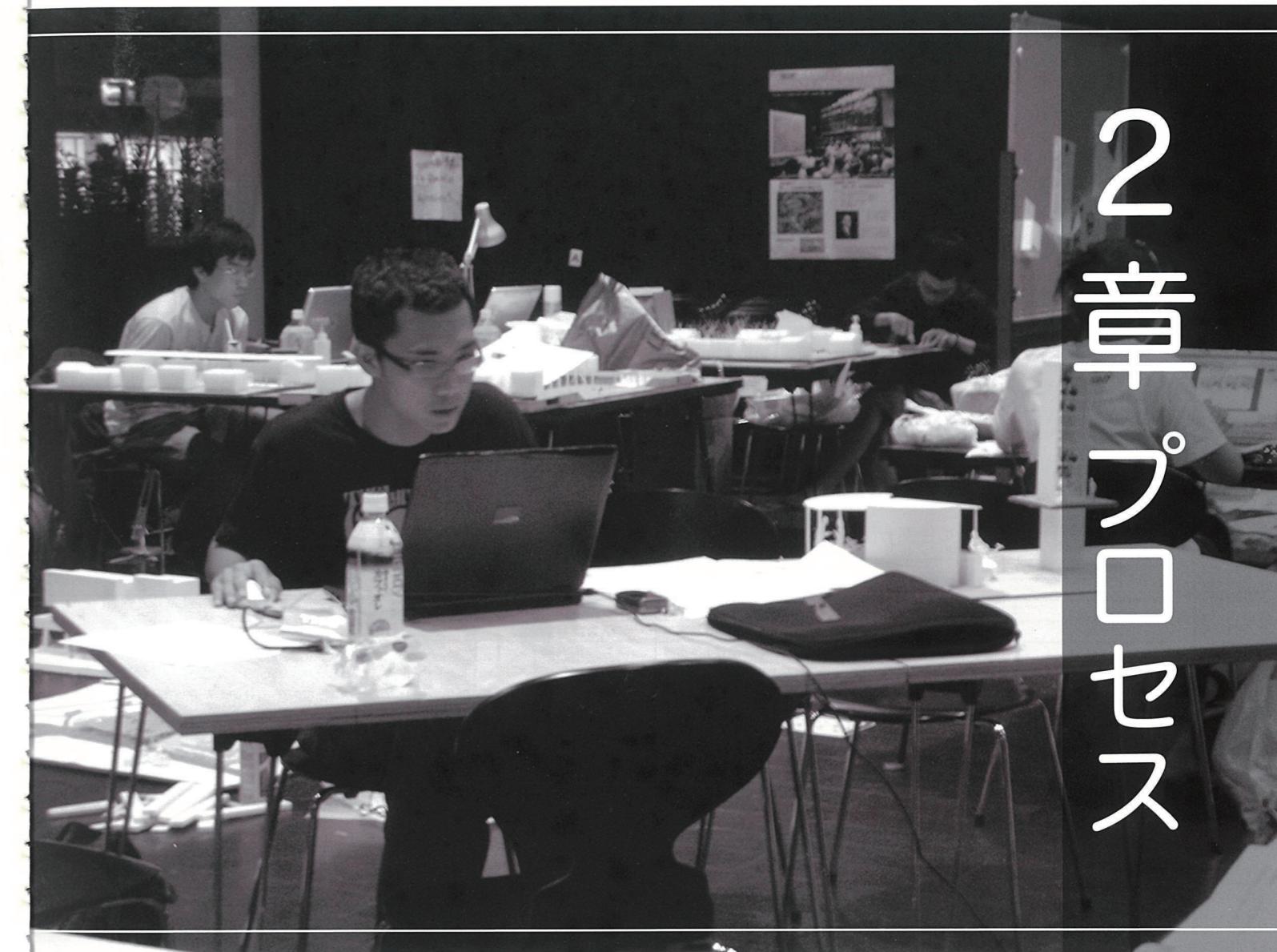
- ・外国人研究者・留学生向け賃貸住宅の整備
- ・インターナショナルスクールの誘致
- ・グリーンマーケット
- ・「環境・健康を創り支援する街」としての情報共有化



桜並木協議会の構想による二重の八重桜並木イメージ



千葉大ケミレスタウンプロジェクト模型



04.13

## ガイダンス

今学期も始まりました、都市デザインスタジオ 2007。東大、千葉大、理科大の学生が初めて顔合わせしたこの日、北沢先生から都市を考えるポイントや前回スタジオの様子等がスライドで紹介され、学生+講師総勢 50 人程の自己紹介で幕開けしました。新領域創成科学研究科環境学研究系の共通科目のため、都市建築以外のバックグラウンドを持つ学生も見られ、この授業の面白さを一層増す一つの要因ともなっています。



昨年の成果を紹介する北沢先生。

04.14

## まち歩き

A～Fへのグループ分けが行われました。



ガイダンスの翌日には早速自転車でスタジオ対象地である柏の葉地域のまち歩きを決行しました。総勢 25 人が自転車に乗って大移動する様子は圧巻でした（笑）。UDCK で日高東大特任助教より地区の特徴が紹介された後、千葉大学敷地内に建設されているケミレスタウン住宅を見学に行きました。鈴木千葉大准教授からそのプロジェクト主旨が紹介され、この地域が目指す環境健康都市像の一例を目の当たりにし、学生からは建築的工夫がどの様な点かなど質問が飛び交いました。対象地を 6 か所を巡るだけでも 3 時間程かかりました。その後各自興味を持った対象地ごとにグループが作られ、集まった仲間達で今後の予定や作業の進め方等実作業について初めて話し合が行われました。



A - TX 柏の葉キャンパス駅周辺高架下  
B - 千葉大学駅側校門 C - 一民有地  
D - 千葉大学敷地内通路 E - 柏の葉公園 T 字路 F - 公有地



ケミレスタウンについてアツク語る鈴木先生。



レンタサイクル大盛況（笑）

春の日差しに赤くなった腕や顔が印象的でした。

柏の葉キャンパス駅前街区のマスター・アーキテクト：團紀彦先生もスタジオ講師の1人です。本日は講師をされている電機大の学生達も参加し、先生のこれまでの建築作品や修士論文、キャンパス駅前の開発構想を多くのスライドを用いて紹介していただきました。團先生の修士論文の着眼点は「都市の様々な秩序が交わる境界にこそ都市の面白さや特徴が見られる」というものでした。土地利用区分がはっきりしている柏の葉地区を対象とするスタジオのため、非常に興味が惹かれました。普段何気なく見ている駅前の将来像を、デザインされている方から直接伺えた貴重な機会でした。



團先生の授業風景@東大柏キャンパス

班	お名前	所属
A	原晃一さん	柏市都市計画部北部整備課
	千田和男さん	千葉県土整備部都市整備課TX沿線整備推進室
B	染谷均さん	柏市都市計画部建築指導課建築行政相談室
C	飯代道成さん	柏市都市計画部都市計画課
	宇野秀信さん	千葉県東葛飾地域整備センター 柏区画整理事務所 換地課長
D	寺崎寛さん	柏市都市計画部都市計画課
	斎藤威さん	千葉県土整備部都市整備課TX沿線整備推進室
E	岩崎克康さん	柏市都市計画部北部整備課
	岡本辰夫さん	千葉県土整備部公園緑地課県立公園室長
F	坂井勉さん	柏市都市緑政部公園政策課都市緑地担当室
	松井健さん	三井不動産(株)柏の葉キャンパスシティプロジェクト推進部事業グループ統括



中間ミニ講評会の様子。各班すでに個性が出てきている。

この日各グループに入ってアドバイスをして頂いた皆さま。ありがとうございました。

5月の連休開けに、現時点での提案を全体に発表する機会が設けられました。当日は対象地に関係の深い方々が行政と企業から忙しい中駆けつけてくださいました。現時点で形がはっきりしているグループ、まだ方向性が定まっていないグループなど進度はまちまち。会場から時間帯による空間的印象の違いや注意点は考慮しているのか、グループ作業の利点を生かしきれていないのではないか、着目点はいいが内容をもっと詰めるべき等厳しい指摘が飛びかいました。

その後各グループに1～2人の敷地関係者が入り、議論を深めました。自分たちの提案に関係者が本気で応えてくれる機会というのは案外無かったりするものです。各班の提案が加速度を増して深いモノになってきたきっかけの日となりました。



中間ミニ講評会目前の授業の様子。先生方に提案のエスキスをしてもらう。



対象地関係者が輪に入って関係者ならではの土地情報をアドバイス。

05.11

## 中間プレゼン

05.16

## 財務省関税中央分析所+科学警察研究所へ訪問取材



柏市さんのご協力により、財務省税関中央研究所と科学警察研究所へヒアリングを行うことができました。キャンパス駅と東大までの道程で荘厳な存在感を放ち、その全容は謎めいている印象がある2施設。とても貴重な機会となりました。

バス本数や食事の場等私達と共に問題意識をお持ちのこと、運動施設が充実していること、双方で共同研究される場合があること、機会があれば科学の専門家がいることで何か地域貢献していきたいという姿をお持ちであること等が新に知りました。知財が集積していることによる「知のネットワーク」の可能性を感じ、私たちとの繋がりが生まれる予感がしました。

05.25

## 発表準備に追われるUDCKでのアツイ夜。

発表を明日に控えた授業でプレ・プレゼンが行われ、先生方からppt資料の注意点や話のうまい順序の他、提案の弱い点を指摘され、学生達は内心半泣きで徹夜で作業に没頭していました。UDCKではB班だけでしたが、東大柏・本郷、理科大と4か所でアツイ夜が繰り広げられました。



みんなで楽しく細かい模型作業を進める午前2時過ぎ。作業合間の束の間の休息。ほんとに15分睡眠です。



悩める学生の輪にそっと入り、提案の道順を示してくれる北沢先生。

05.26

## 中間公開講評会

第1の山場となる、中間講評会がUDCKで行われました。当日は柏市主催のまちづくりスクールの入学式も同時に行われました。今回は本多晃柏市長と都市計画をご専門とされている大方潤一郎東大教授が講演され、盛り上がりを見せました。

本多市長のお話の中で印象的だったことは「共助」という言葉です。互いに支え助け合うという意味で、不特定多数に対しても、みんなの手を提供し合うことです。その心意気を繋げどう活かしていくかがこれからの中でも大切ではないかと投げかけられました。市長が掲げている「市民



柏のまちづくりについての想いを  
丁寧に講演される本多晃柏市長

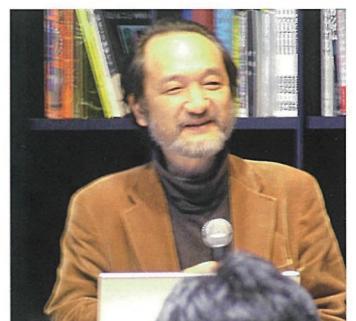
当日のスクール内容 <http://www.udck.jp/event/?id=29>

との共働」の原点がここにあると感じました。環境、治安、防災等今注目を浴びている分野は特に公民の中間領域に位置するとと思われます。官民の、長期滞在の外国人同士の、専門家と一般市民の繋がりを生み、活かしていくことがまちをより良い空間にしていく時の大きな原動力の元となる大切なモノだと柔らかいながらはっきりとした物腰で語られていらっしゃいました。

大方教授の講演テーマは『東京の郊外地域  
まちづくりの歴史と展望』でした。東京の郊外は戦後鉄道網の発達により急速に発達し、現在首都圏の一都三県の人口は3300万人と世界最大規模の都市圏です。20世紀の郊外型住宅はサラリーマン世代の子育ての場でしたがライフスタイルや人口減少による世帯数の減少などまちに間が入った様になっていくことが考えられま

す。その様なまちの穴が治安の悪さを生み、環境の悪い中途半端な郊外となり不人気な都市になっていきます。そうならないようなまちの魅力をどう作っていくのか重要な点になります。例えば高齢化と若年労働力の低下が同時に進行している昨今ではリタイア組の働き口や集える場の創出が必要です。また子育て中の女性や高齢者が安心して住めるまちの仕組みを考えていく視点の重要性を語られました。

郊外で、様々な特徴的な土地利用がされている柏の葉地域。果たして5年後、10年後、30年後と普通のまちで終わるか、それとも普通っぽいけど自慢したくなるようなまちになっているかは、私達含め現在から将来的にこの地に関わる人達が土地を想い、行動することが大切なんだとお二人のお話から再認識致しました。



江戸から現在までの日本の都市形成の特徴を独特の語り口でお話しされる大方先生。

## 「共助のまちづくり」×「魅力的な郊外都市」



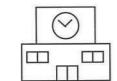
スタジオ講評会にも多くの方が残り、学生達から繰り出される提案に「面白い!」「実現可能なのか?」「住民の意見を聞いて提案しているのか」等様々な気持ちが参加者の表情やアンケートを見てとれました。奇抜ではないが的確な分析と講評もあり、大学院生の底力を發揮。それから最終提案までどの点を重点的に詰めるかの糸口となりました。



講評会終了後の打ち上げ中も模型に集まり、世代を超えた都市議論が行われた。  
この後大方先生が模型を解体。

# 想いを形にする第3段階 5.27 ~ 6.30

## ヒアリング



### 教育施設

#### 千葉大学環境健康都市園芸フィールド科学教育センター

05.18 (グループDの土地所有者である千葉大学の意向を知るため)  
06.28 (グループBの提案する大学門前町における千葉大学の利点を知るため)

#### 千葉大学工学部准教授 上野武先生、宮脇勝先生

06.14 (千葉大学が柏の葉キャンパスで行おうとしていることの計画や構想を知るため)

#### 千葉県立柏の葉高校

06.05 (今行っている活動や今後の方針を知るため)  
06.17 (UDCKにおいて高校生と先生方とワークショップ)

#### 東京大学生涯スポーツ健康科学研究センター

06.27 (十坪ジム開設に鑑みて経済市場へ大学が進出する利点を確認するため)



### 企業・店舗

#### 柏の葉ドッグラン

06.16 (柏の葉に関する他の意見を知るため)

#### ららぽーと内 Importy Bicycle Factory

06.25 (柏の葉地域の自転車販売状況や自転車シティについての考え方を知るため)

#### 日立メディコ(株)

06.26 (グループBの提案する大学門前町における企業利益を知るため)

#### 三協フロンティア(株)

06.27 (グループBの提案する大学門前町における企業利益を知るため)



### 地域の団体 住民

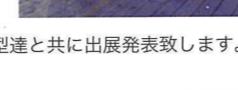
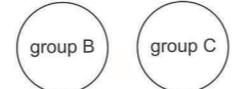
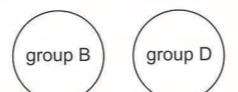
#### 柏の葉2丁目住宅住民

06.12 (柏の葉地域と敷地Dの印象を伺うため)

#### 桜並木協議会

06.11 (グループDの対象地に通る予定の桜並木について活動を知るため)

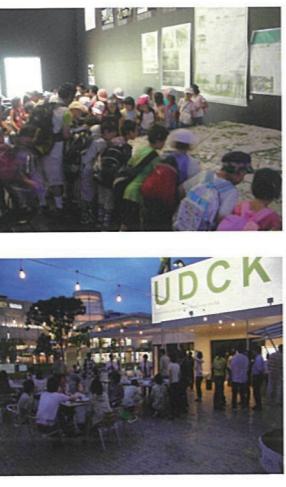
06.22 (協議会へ出席。提案を発表)



06.29

## 最終公開講評会にむけて

最終講評会の前日は例のごとくプレ発表会があり、最後の詰めの作業を確認し、最後の日を迎えました。(左) そんな緊迫したUDCK内が突然かわいい声で満たされました。近くの小学生が課外授業で来館したのです。初めて見るであろう1/1000模型や院生たちの作業を前に興味津々。こんな風にこの場が活用され交流することは非常に理想的です。(中上) \*講評会の模様はp79から特集。講評会後の打上げでは会の途中に学生1人1人、スタジオの感想を言う機会もあり、今だから言える先生への訴えもあり、またサブライズ誕生日会もあり、笑いの絶えない会でした。(中下、右)



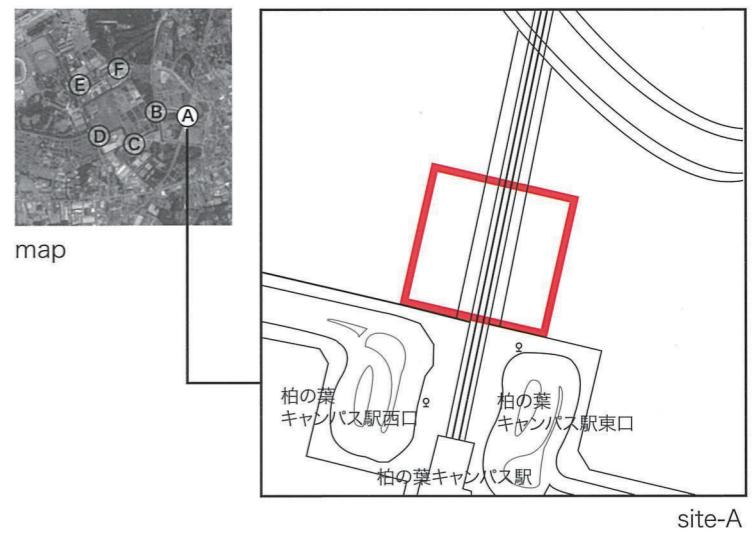
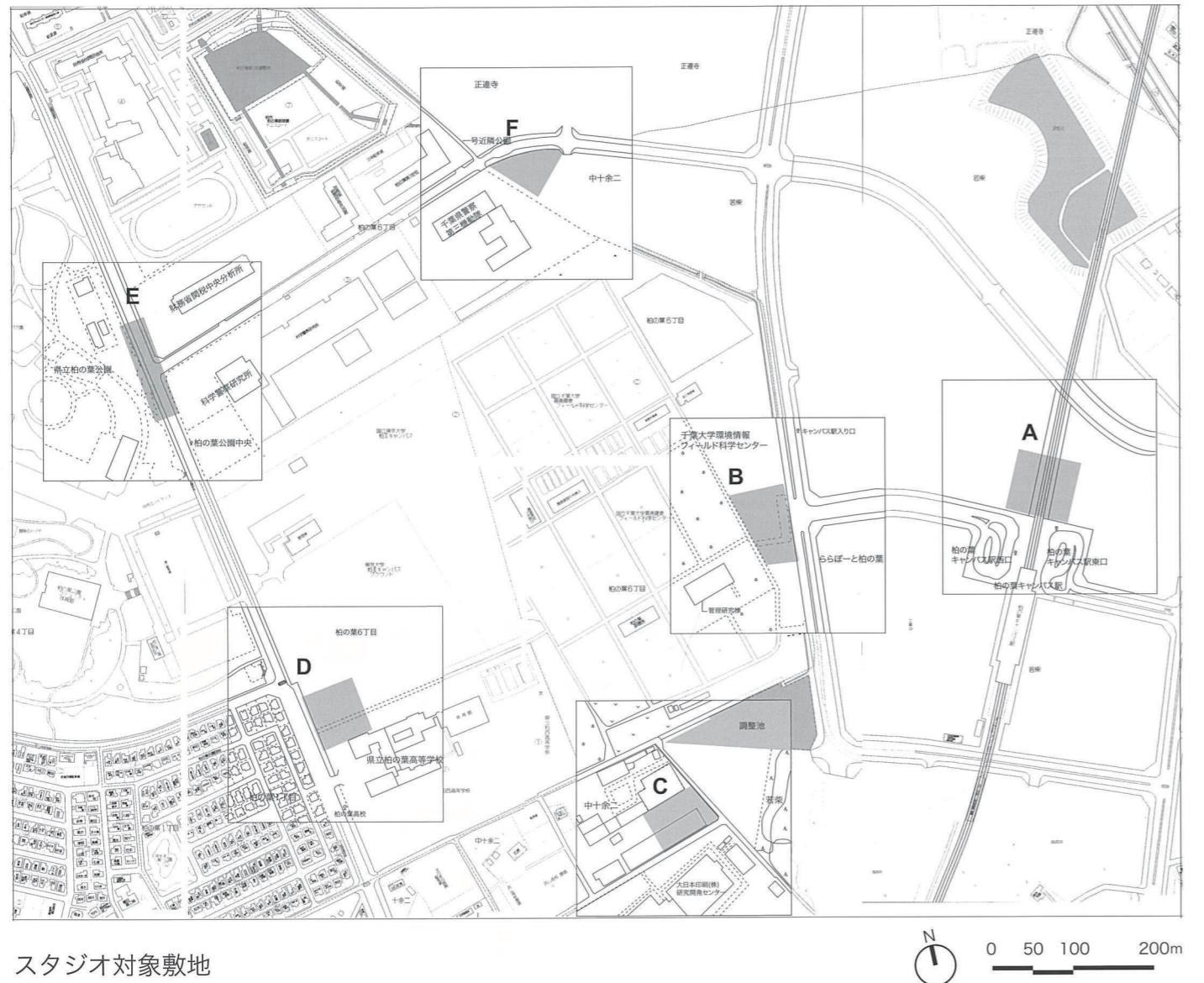
スタジオは成果をブックレット作りへ。一方グループDは提案実行WSを07.13に行い、07.28-29はスタジオ全体が柏工業祭に模型達と共に出展発表致します。

# 3章 提案



# ぷらっとフォーム A

-TX高架下を活用したまちづくり施設-



## STUDENT



松尾 真子(東京大学) 佐古 奈々美(東京大学) 山田 渚(東京大学)



嵜灰谷 愛(東京大学) 白銀 友明(千葉大学)

## STAFF



前田 英寿(UDCK) 栗原 謙樹(竹中工務店)

# ぷらっとフォーム

-TX高架下を活用したまちづくり施設-



## 1. 対象地と課題

私たちグループAの提案は、つくばエクスプレス（TX）柏の葉キャンパス駅前に、まちづくりの起点となる施設を、従来型の箱物でない新しい公共空間として企画・設計したもの。

## 2. 目標の設定

当駅は柏の葉地区の中心に位置し、大規模商業施設（ららぽーと）が近接、高層住宅が建設、計画中です。その一画に柏市、東京大学、千葉大学、民間企業、地元団体によって「柏の葉アーバンデザインセンター（UDCK）」が設けられ、公民学連携のまちづくりが進められています。このUDCKの取り組みを展開することと、今は交通広場にすぎない駅前の再編を絡めて、「柏の葉地区の核」「街の顔」を形成することが、私たちのねらいです。

## 3. 企画

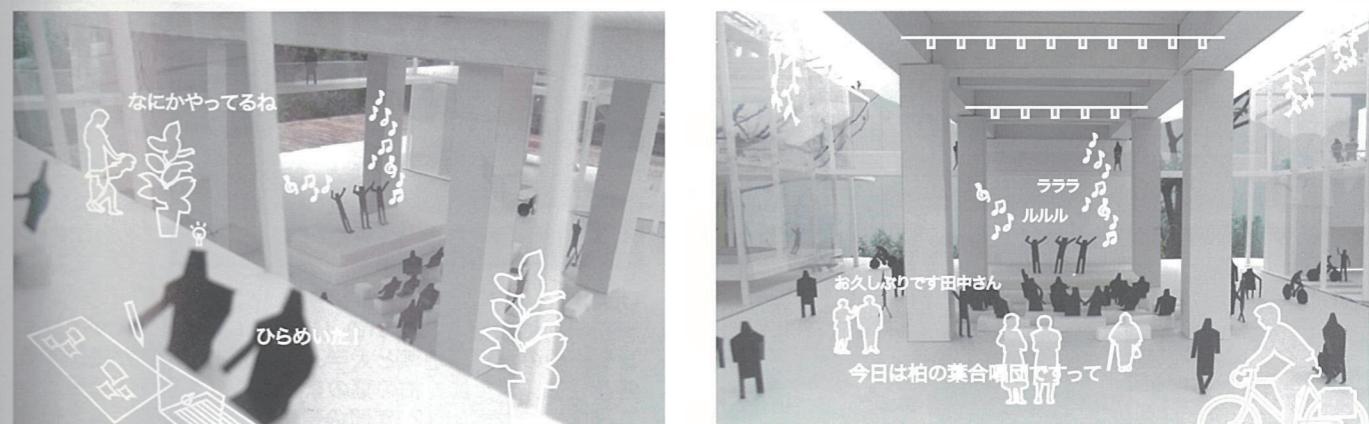
そもそも柏の葉地区にはTX開通前から十余二工業団地、東京大学、千葉大学、柏の葉住宅、柏の葉公園、国機関が立地していましたし、今後も区画整理区域を中心に開発が進みます。私たちは、住民や関係者が気軽に立ち寄って交流し、活動が融合する、街のちょっとした場所がまちづくりを起動すると考え、「ぷらっとフォーム」と名付けて設計しました。

## 4. 設計

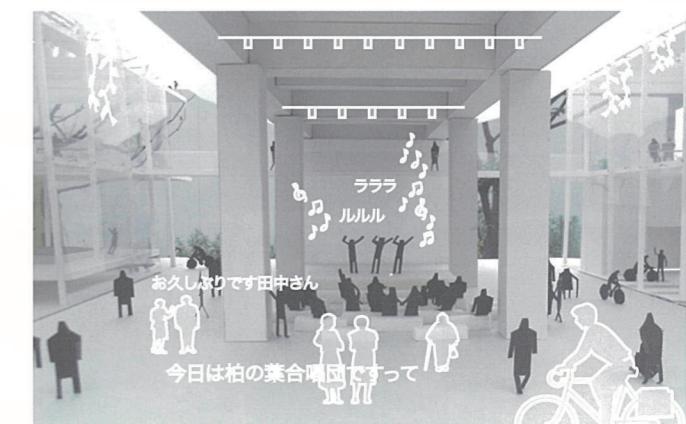
今回の提案では、現在のUDCK用地と高架下を抜けた反対側を設計対象としました。高架下を半屋外の多目的広場とし、それをペアの3階建て施設ではさむ構成としました。地上階はホールとカフェ、2階はワークスペースと図書室、3階は事務室とサロン。地上に近いほど公開の度合いは高いです。駅前広場側の正面壁は緑化し、市民自身が植物の世話ができるよう、地上と屋外階段でつなぎ屋上テラスへ辿りつけます。建築と自然が融合した立体広場のような空間です。

## 5. 展開

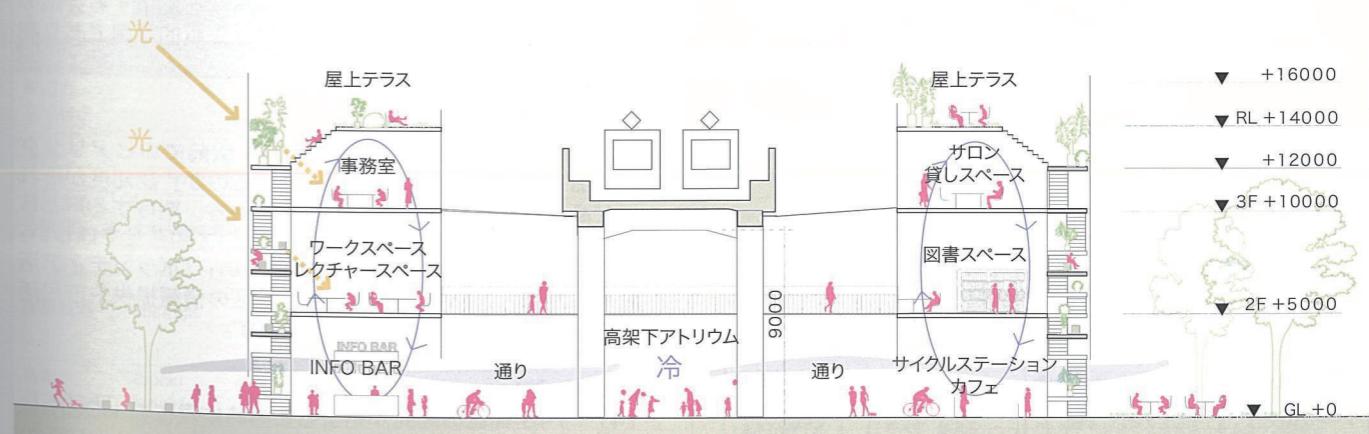
設計対象のうち1棟分の床面積は現UDCKの2倍弱にすぎません。このような小振りの公共空間を、既存施設の増築や開発待機地の先行整備の中で布石し、駅前空間を徐々に形成していく、というのが中長期的な展開です。通りや広場に溶け込み、小さくても周囲の施設と連携することで力を発揮し、まちの成長やニーズに合わせて機能を変化させていくイメージです。各街区の空間計画の道標となることも意図しています。



2Fワークスペースより高架下アトリウムを望む



高架下アトリウムでのイベント



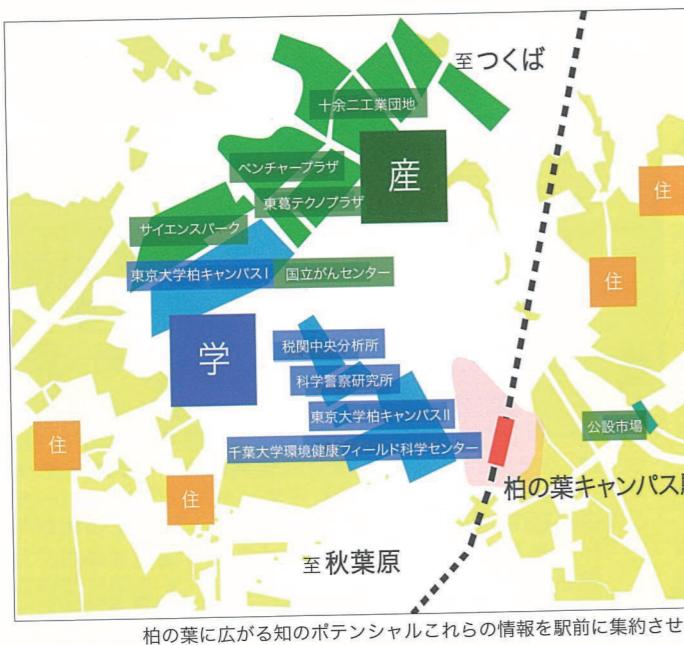
## 敷地分析

TX 柏の葉キャンパス駅の高架下にまたがる 500 m<sup>2</sup>の土地が対象敷地です。駅はつくば駅・秋葉原駅の中間に位置する立地で、周辺は開発中です。駅を降りると高架下沿いに TX アベニュー(商業店舗など)が続き、その先に敷地があります。駅は周辺住民が都心へ向かう通勤や駅周辺に広がる様々な研究機関への通勤・通学で利用され、十余二工業団地へ往復する企業バスも停留します。現在の敷地には駐輪場があり、東側には高層マンションが建設中です。西側は大規模商業施設と UDCK、これから開発が行われる空き地が広がっています。数年のうちに、空き地にはホテル・オフィス・商業店舗・集合住宅・商業施設等がまとまって建設されます。今後、駅前が柏の葉地区の中心地となっていくことが予想されます。

**[課題]**  
現状では高架下に建設された建物によって東西の視界は断たれ分断されています。もっとオープンに高架下を利用したいという市民からのニーズや、高架柱を程よく隠しながら東側広場をデザインすることをクリアし、従来の高架下の使い方にとらわれない新しい高架下の利用法を考えなければなりません。



## 現状と市民の声



### UDCK とは？

現在駅前に設置されている UDCK (アーバンデザインセンター柏の葉) は地域と大学、民間企業、市民が協働する場として、また広く柏の葉のまちづくりを啓発する場として設立されました (2年間の暫定施設)。UDCK には柏の葉に関する資料や展示、学生の演習の場、一般向けのまちづくりスクール、地区周辺の計画・事業を協議する会議の実場として使用されています。日本では先駆的な例であり実験的な試みです。

### 【市民の声】

UDCK を訪れた来場者アンケート・駅前でのヒアリングによると、「UDCK が何をやっているのか」認知度がそれほど高くないことが分かりました。一方、期待する声として「まちの歴史や未来像 (計画) について知らせてほしい」「市民交流の場、集いの場にしてほしい」「ボランティア活動をしたい」といった声があり、地区の情報提供や市民活動の場の提供などが求められています。

### UDCKへの声 (駅前ヒアリング調査、来場者アンケート)

何かやっているけど、何をやっているかわからない。	意味はありますけど、知らない。	市の施設??	市民交流の場、集いの場にしてほしい。
子どもの遊びスペースがあればなあ。	ボランティア活動したい!	入りづらいの? わからなかつた。	まちの未来像、開発の計画を知りたい。

### 【これから】

147・148 街区の開発が始まると同時に現在の UDCK は建替移転が予定されています。この際に現在の UDCK の発展型となる機能と建物が必要とされます。

## コンセプト

### I : 3つのデザインでまちをプロデュース

私たちの提案 “ぶらっとフォーム” にはまちづくり啓発を行う UDCK (U=Urban) に加え、情報・知識を発信する IDCK (I=Intellectual)、新しいライフスタイルを提案・応援する LDCK (L=Life style) を新たにつくります。柏の葉には産官学民の様々な人々が集まるこれを生かし、多様な人々と一緒に柏の葉のまちをプロデュースしていく場を提案します。

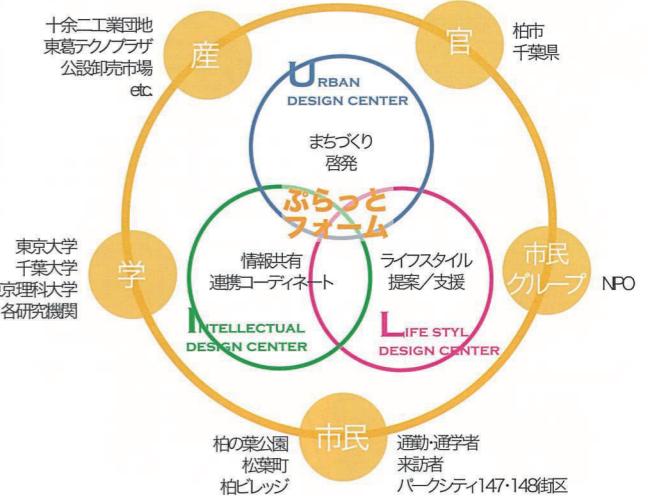
### II : 従来の公共空間から新しい公共空間へ

公共空間は全ての人に開かれた場であるべきですが、従来の公共施設は1つの建物として完結していました。これからの公共空間として、まちなかにとけ込むように小さく点在し、それぞれに核の機能がコンパクトに集約され、周辺施設と各ぶらっとフォームが相互に連携することで各機能が周辺に“にじみ出していく”ような構成を提案します。用がなくとも“気軽に立ち寄る場”となるように考えました。

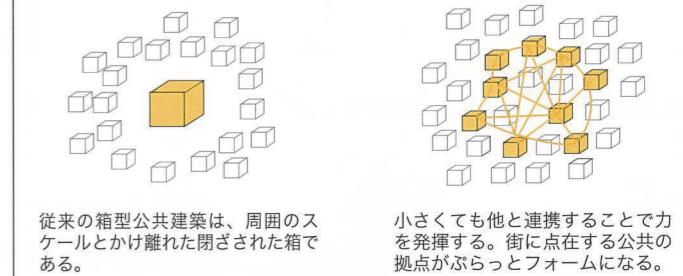
### III : 柏の葉の成長とともに

柏の葉はこれから開発が段階的に進み、街が徐々にできていく過程にあります。これに伴って住民や流入人口も段階的に増加し、時間経過に伴って人々からのニーズや直面する状況が変わってくると予想されます。まちが辿る変化の中でぶらっとフォームはニーズに応じて増殖したり、機能を変化させたり…といった即効性のある公共空間となります。

### I : 3つのデザインでまちをプロデュース



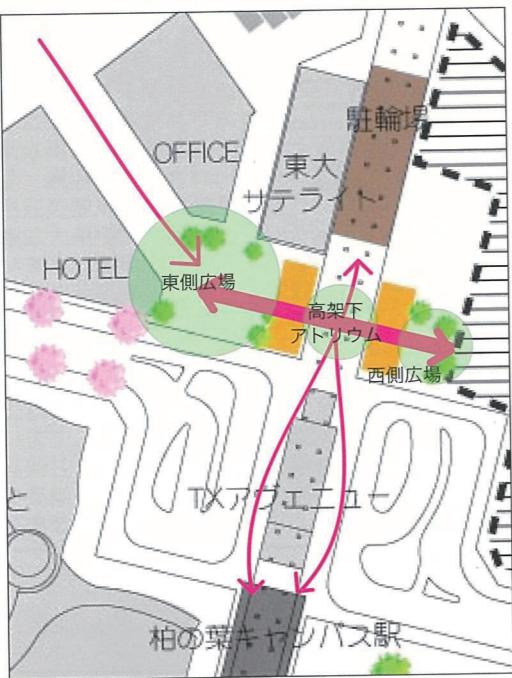
### II : 従来の公共空間から新しい公共空間へ



### III: 柏の葉の成長とともに 一時間経過にともなうアーバンデザイン

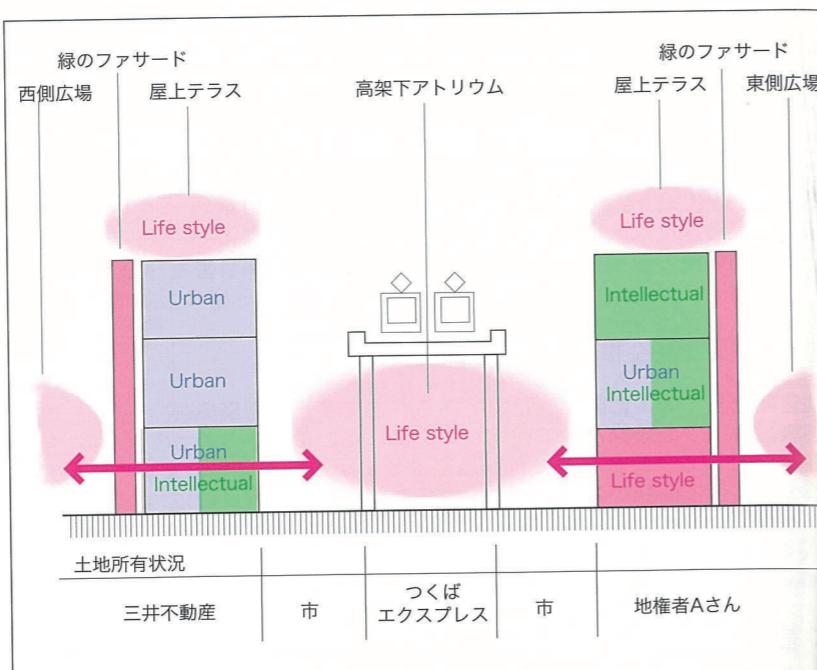
時間	街の拠点形成				駅前に滞留の場を創出	東西の緩やかな連結	駅前の一体感の創出
	周辺の立地状況	環境	期待される機能	配置戦略			
第1期：現況	ららぽーと開業	新たな街の誕生 商業施設先行参入	まちづくりへの关心喚起 主体制作の出会い <u>Urban design</u>	UDCK 開設	現 UDCD 踏跡に駅前のカオとなる広場を整備 ぶらっとホーム西棟開設 高架下にアトリウム空間を開設	駅前に滞留の場を創出	東西の緩やかな連結
第2期：～3年後	バーカシティ柏の葉完成 UDCK の移転	新住民の流入	新住民と現住民の交流 新住民への情報提供	新UDCK 開設	初代ぶらっとフォーム	駅前に滞留の場を創出	東西の緩やかな連結
第3期：～5年後	東京大学サテライトキャンパスの完成	オフィスの充実と通勤者の増大 来街者施設の充実	働き方の提案 産学の迅速なコミュニケーション	東棟の開設 東京大学サテライトキャンパスとの連携	ふらっとホーム	東西の緩やかな連結	駅前の一体感の創出
第4期：～8年後	市民の成熟と参加 学術都市としての自立	市民活動の援助	Life style design	周囲建物との連携による 駅前ぶらっとホームの展開	駅前の一体感の創出	駅前の一体感の創出	駅前の一体感の創出

## 建築



ゾーニング図

ぶらっとフォームは性格の異なる3つの広場をしきりながらつなげます。また147・148街区からの動線上に当たる見えを考慮し、「広場の顔」「公共空間の一部」として緑のファサードを計画しました。



断面用途を「まちづくり」「情報・知識」「生活」に色分けした図

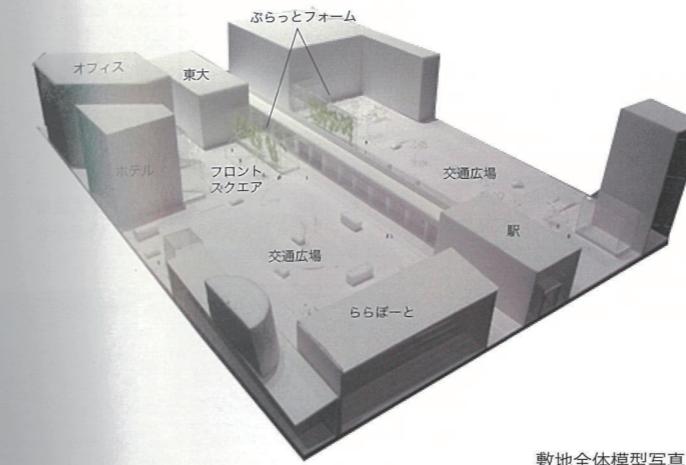
複雑な土地の所有形態となっていますが、段階的な建設計画と配置計画によって実現を可能とし、機能としても成立しています。高架下アトリウムの空間はこれら地権者の合意によってはじめて完成される空間であり、ぶらっとフォームの実現は、まさに柏の葉の異種主体間の「交流」のバローメーターとも言えるでしょう。これは合意形成過程のデザインということです。

## 空間イメージ



東側から見えるフロントスクエアとぶらっとフォーム

ファサードは、緑の豊かな柏の葉の顔として、特に、147・148街区やフロントスクエアから見たときのアイストップとして働くように、また建物自体の環境負荷軽減のため緑で覆いました。この緑は、外階段の途中に点在するプランターで構成されており、これらの緑は周囲の施設を使うオフィスワーカーや住民などが育てることもできます。この外階段はもちろん誰でも自由に出入りでき、屋上テラスにつながっているので、電車を眺めながらの休憩スペースにもなります。



敷地全体模型写真



3F貸しサロンで打ち合わせ



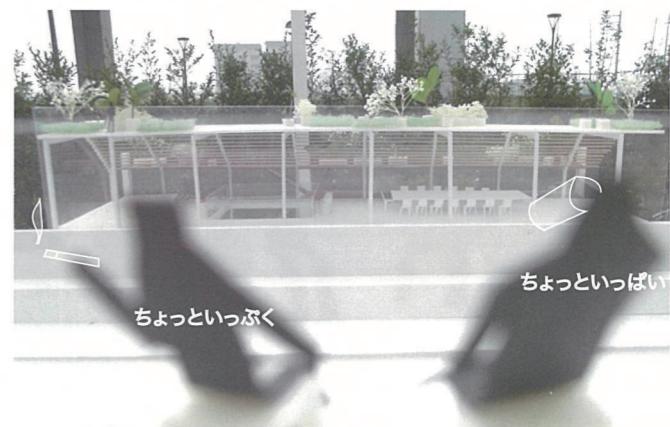
サイクルスルーカフェ



フロントスクエアと高架下アトリウムをつなぐINFO BAR



断面模型写真(外観)



屋上テラスで電車を見ながらひと休み

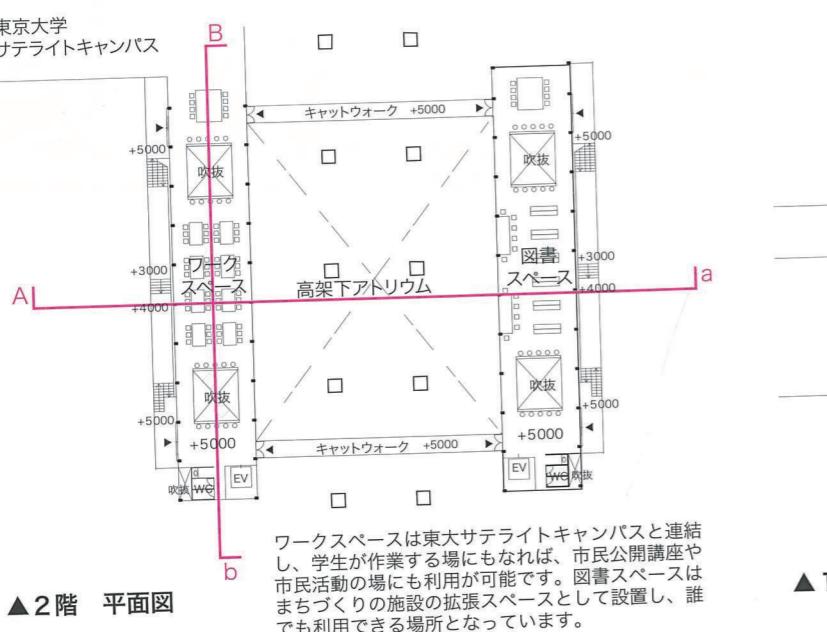
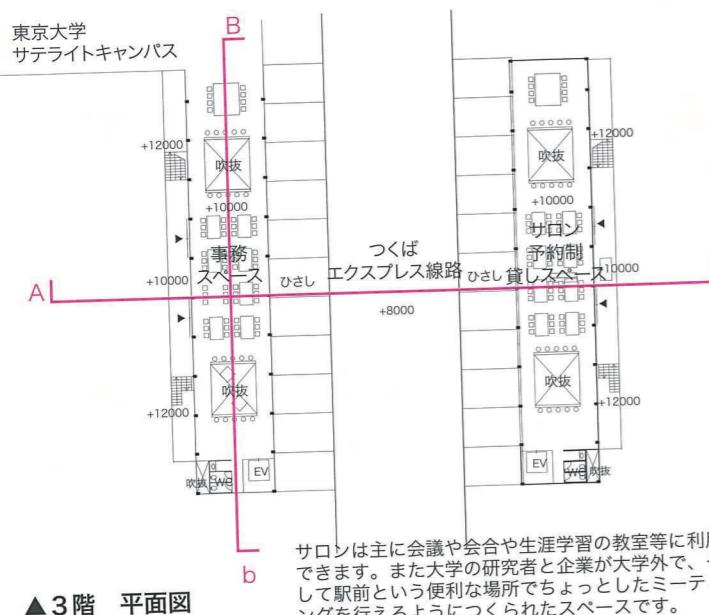


高架下アトリウムは皆のたまり場、通り道



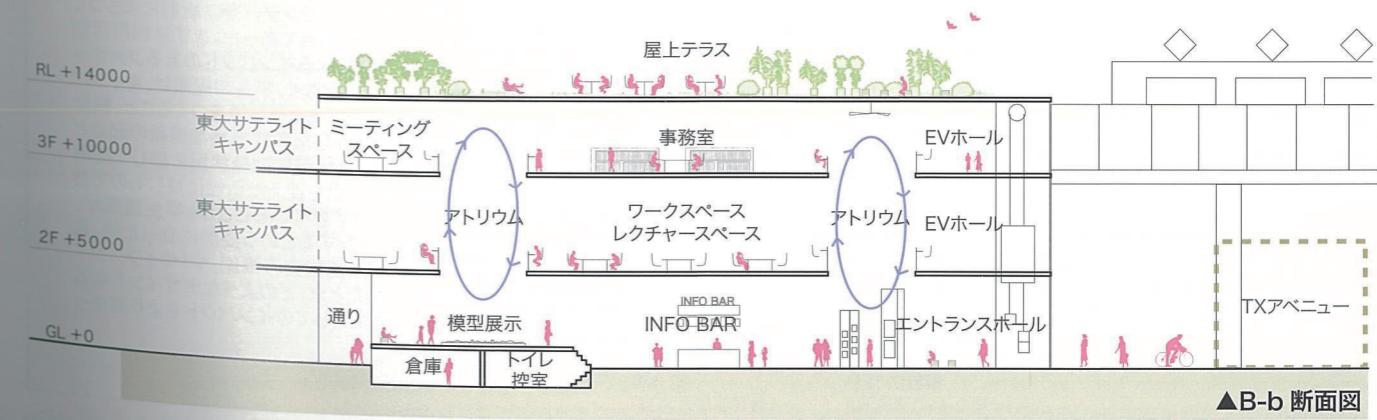
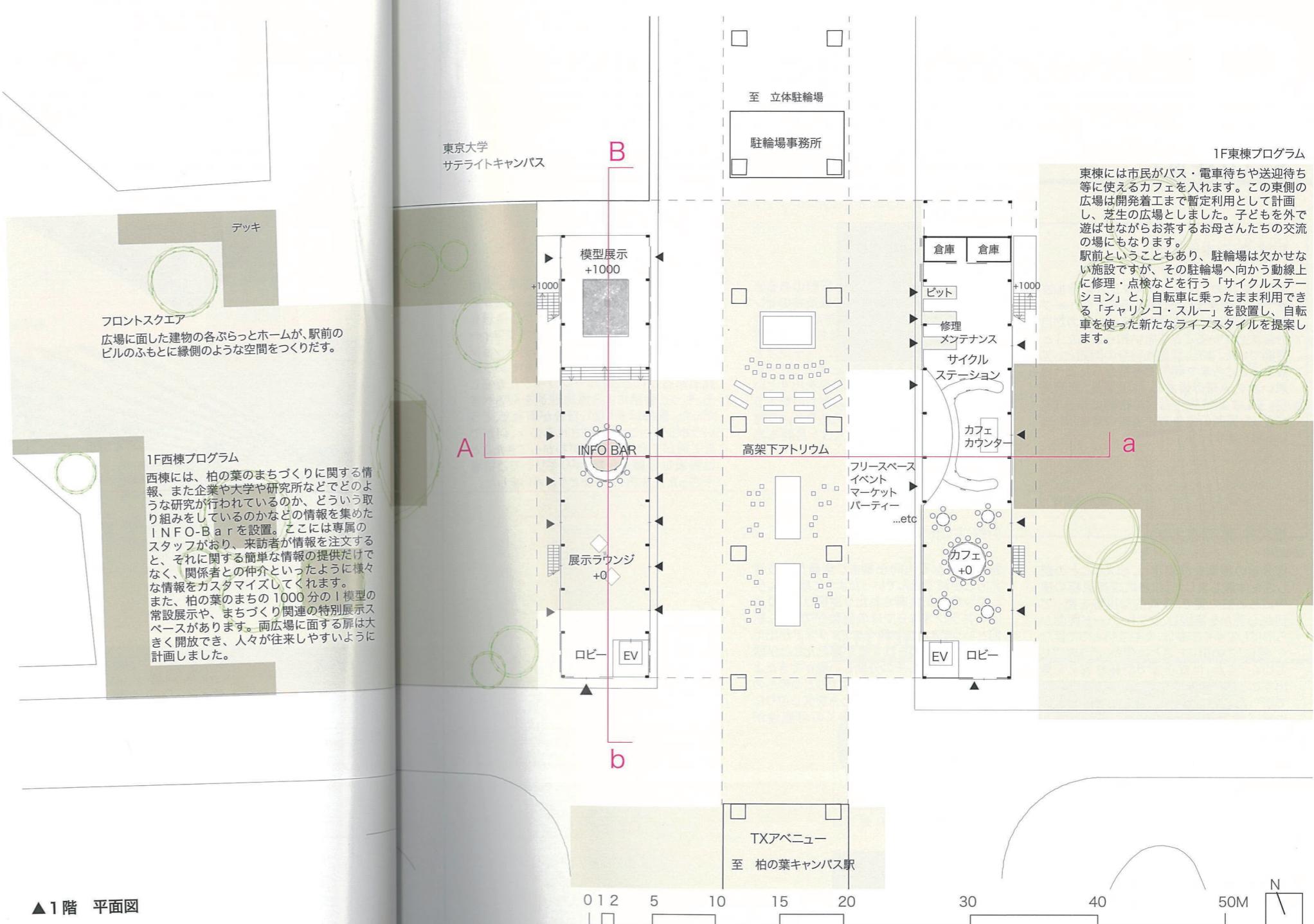
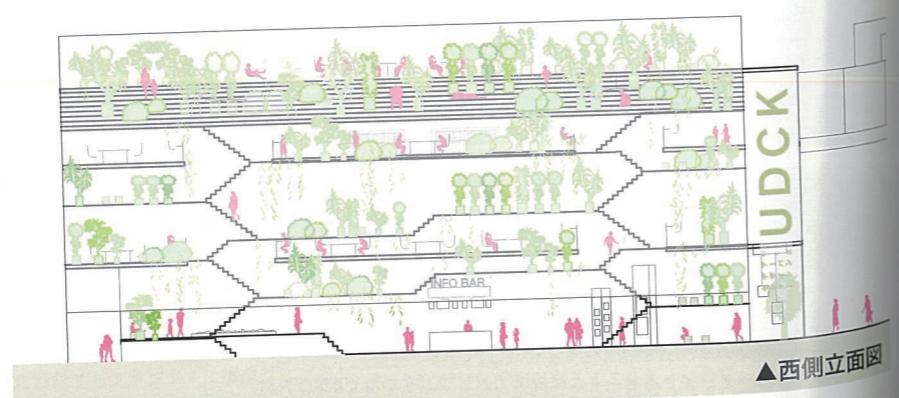
高架下アトリウムとサイクルスルーカフェ

## 建築デザイン



▲地下1階 平面図

0 1 2 5 10 15 20 30M



# グループAの感想

## STUDENT

松尾 真子(東京大学)

今回、最後の1ヶ月だけスタジオに参加させていただきました。振り返るとグループワークを通じて、まだまだいろんな能力が自分に欠けていることを思い知らされた1ヶ月間でした。また、課題を自身の問題として捉えるところまで到達できなかったように思います。A班の皆さん、前田先生、栗原先生、そして北沢先生はじめ相談に乗ってくださった周囲の先生方に感謝の意を示したいと思います。

佐古 奈々美(東京大学)

考えてみるとそのまちらしい駅前のあるまちは少なく、すぐに思いつくのは渋谷のセンター街くらいで、特に地方都市の駅前は似たような顔をしている。普段はあまりにも何気なく暮らしてしまっていたが、スタジオを通して駅前を見る目が変わったと感じる。また、短期間のスタジオで成果を出すという点からも、日常的な創造力がものを言うと痛感した。日常にこそ答えありという意識でこれから夏を迎える。3ヶ月間本当にどうもありがとうございました。

山田 渚(東京大学)

柏は困惑の連続だった。既存の都市と異なり、新しいまちの自由度への困惑。議論からよりも、高架下という空間自体から発想を求めるという手順への困惑。根ざすフィールドの異なる仲間とのコミュニケーションへの困惑。議論では何も進まないという意見もあるけれど、グループワークだからこそ、もっと会話による意思疎通を図るべきだった。後悔が多いが、自分が何者で、どういうポジションが期待されるのか、何ができるかできないのかがわかつてきたことは貴重な経験だった。ギリギリまでご指導下さった先生方、ありがとうございました。

蛎灰谷 愛(東京大学)

自分達の提案を具現化し、伝えることの難しさを体験しました。まさに成長過程の途中にある柏の葉で、長期的な視野を持って何が必要かを議論し、ソフト・ハード両面から形にしてゆく作業は、たやすいものではなく、特に「この街らしさとは何か、どう表現してゆくべきか」は最後まで明確な答えを見出せませんでした。この3ヶ月間で培った経験を活かし、今後の研究・活動に繋げていきたいと思います。

白銀 友明(千葉大学)

背景が異なる人間が集まり全員が違う考え方と手法で進んでいたように感じる。少しづつ意見が共有されたり逆戻りしたり今回のスタジオならではの経験ができた。駅前ということもあり様々なアイディアが出たがなかなか纏められず核が薄れたことが残念だった。しかしその分新しい器ができたような気もする。限られた時間でひとつのものを作り上げていくことの難しさを久しぶりに体感できた。高架下には多くの可能性が眠っている。

## STAFF

前田 英寿  
(UDCK柏の葉アーバンデザインセンター副センター長)

課題は駅直近の高架下利用とUDCKの将来展開。鉄道を挟む空間構成と公民政連携のあり方が焦点となった。条件が明確な分、途中、作業が停滞したが、中間講評を素直に取込んだ結果、一定水準の成果をあげた。まず、街の熟成を段階分けすることにより、何を誰が何時如何に実施するか、駅前の再編過程を整理した。次に、近接住宅街区の計画を調査することにより、高架下自体の活用や両側街区に対する構えなど、設計与件を自ら設定した。建築デザインについては、緑や市民の関わりの欠如を指摘され、半屋外通路の緑化や透過性など、短時間で空間化した。残念は次の3点。公民政連携を空間、生活、知識の各仕組みに整理したが、アイデアの羅列にとどまった。「ぶらっとフォーム」は用途に左右されない建築形態を標榜したはずだが、表現不足だった。駅前空間の形成について、各事業が少しづつ貢献する非面的空間計画を提案したかった。

栗原 謙樹(竹中工務店)

Aグループは、現行のアーバンデザインセンターを、「駅前にまちづくりの起点」として発展させることがお題目であった。まずは利用可能な手の届くグリーンとデッキテラスによるインパクトのあるファサードに目を奪われる。しかしそれだけではなく、学生の提案は、キャンパスマウンの顔となる駅前広場を刷新するような場をつくること、機能的には柏の葉地域の機能集積を生かした多種多様な情報の起点となること、また、戦略的には周辺開発状況に開発状況に応じて段階的に整備すること等、地域特性的一面を捉えた示唆に富むものである。惜しむらくは少々現状に囚われすぎていることか。学生諸氏が、駅前全体をもっと積極的にデザインするという姿勢に立った時、また、そのサワリだけ提案されている「情報交流機能」や「ライフスタイル提案機能」について探求を深めたとき、どのようなデザインとなるのかも見てみたい気がするし、提案としてのインパクトもより高まつたのではないかと思う。

# 大学門前町

-千葉大学とまちの中間領域-

B



site-B

## STUDENT



市村 駿 (東京大学) 長澤 恵 (東京大学) 近藤 宗俊 (東京大学)



大道 亮 (東京大学) 姜 作然 (千葉大学) 仲村 明代 (東京理科大学)

## STAFF



清水 亮 (東京大学准教授) 丹羽 由佳理 (UDCKディレクター)



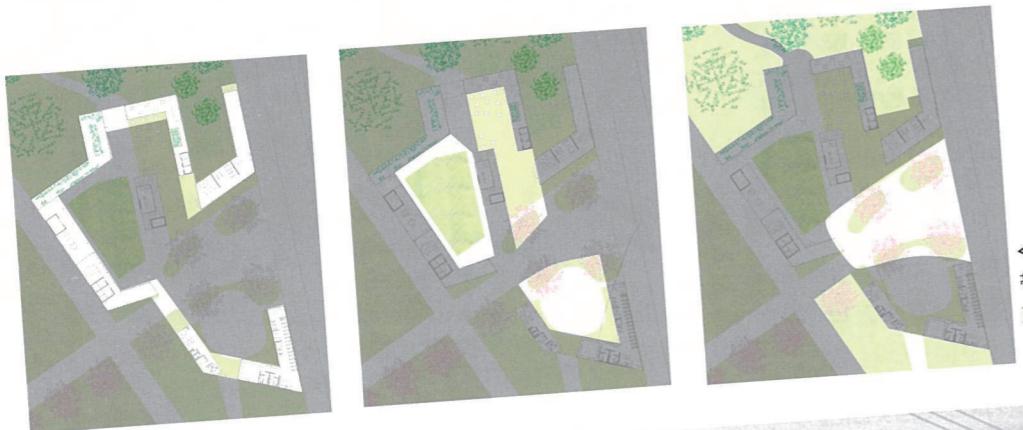
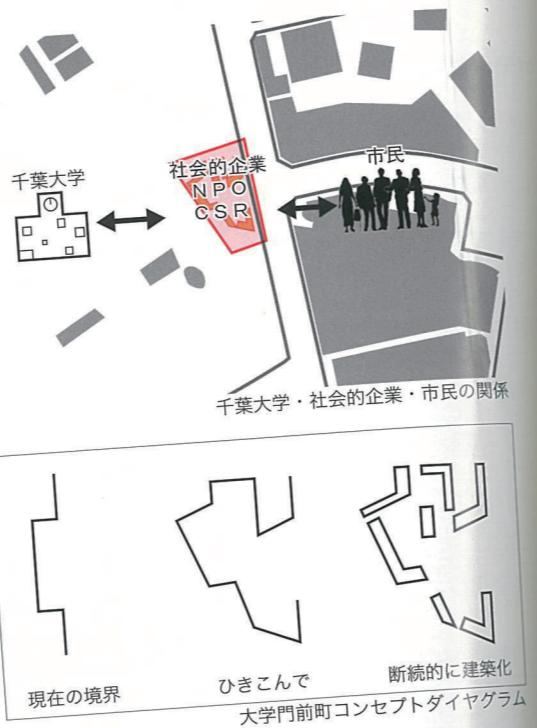
## 大学門前町 - 千葉大学とまちの中間領域 -

私たちは、千葉大学とまちの空間的な接点となるこの場所を、千葉大学の研究成果を地域に還元する場所にすることを提案する。中間提案は千葉大学を全面的にまちに開放する案であった。しかし「大学と市民が直接日常的に結びつく」というのは難しい。大学の本分は研究と教育であり、また市民にとっても直接大学に入り込んでいくのは敷居が高い。むしろ千葉大学とまちの間にある程度独立した中間領域をつくる方がスムーズに交流が図れると考えた。

そこで私たちは千葉大学とまちの境界に着目した。現在、千葉大学とまちの境界には塀と小さな門があるだけである。その境界を千葉大学の敷地内に引き込み、いくつかの小さな囲まれた空間をつくる。引き込まれた境界を断続的に建築化する。建物と建物によって囲まれた空間は、千葉大学でもまちでもない、両者の中間領域として名付けた。大学と市民の結びつく場所となる。これを「大学門前町」と名付けた。

大学門前町の運営主体だが、千葉大学が直接運営するのでは負担が大きすぎる。そこで「社会的企業」という第三者が運営することを提案する。千葉大学は知的資本を「社会的企業」に提供する。「社会的企業」はそれを生かしながら、大学門前町を管理・運営し、市民にサービスを提供する。市民から得られたデータなどは、「社会的企業」を通じて千葉大学にフィードバックされる。こうして「社会的企業」が潤滑油の役割を果たし、千葉大学とまちがつながっていく。

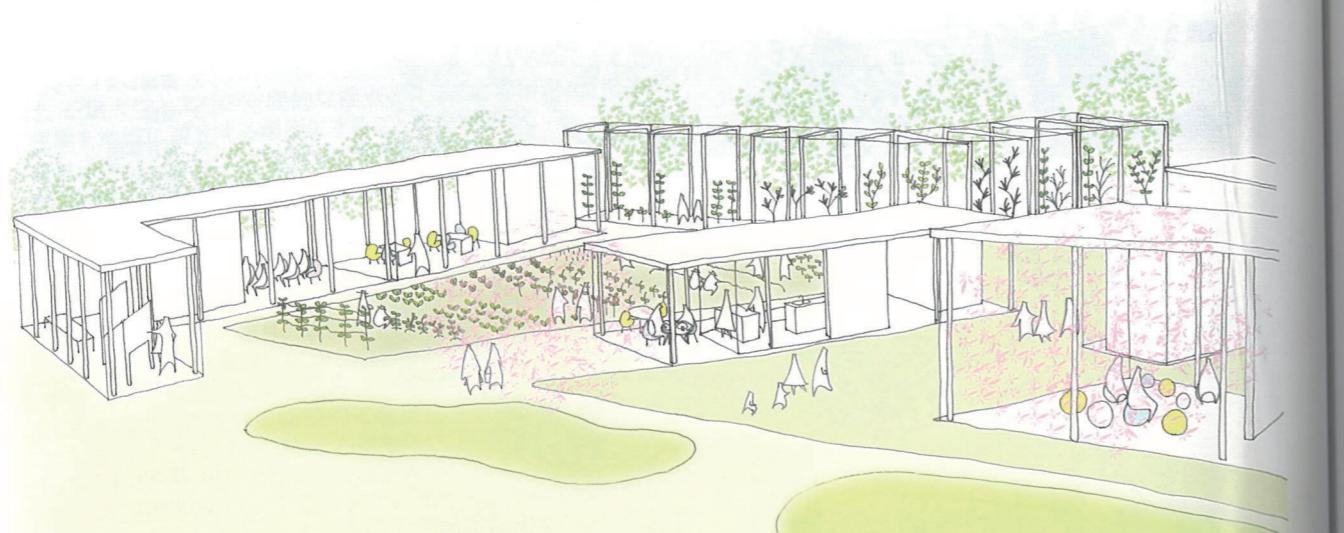
\*社会的企業:コミュニティに利益を還元していく社会性を持った事業体



<コンセプトにより生じる空間>  
帯のようにプログラムがつらなる（左図）  
建築に囲まれた特色ある空間（中図）  
外部が大学門前町に入り込んでくる（右図）



通りから見た大学門前町イメージ。通りが開けた門が、活気のある門前町に変わる。通りから活動が見えることで、次なる参加者を誘導する



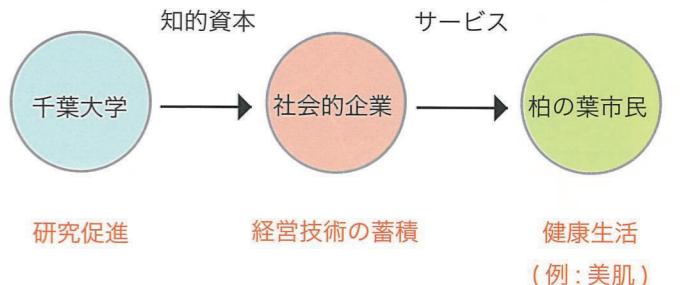
### 3つのプログラム/建物の帯がつくる屋外空間

大学門前町で最初に行う主なプログラムは、薬膳レストラン・園芸菜園・ブチジムの3つである。これらは現在千葉大学で行われている研究をベースとしながら、それを地域に還元していくことを目的としたものである。

建物は帯状に連なり、いくつかの囲われた小さな屋外空間をつくり出す。薬膳レストランと屋外テラス、園芸菜園と屋外菜園、ブチジムとアスレチックパークのように、室内と屋外の両方で活動が行われる。それらの屋外空間は分節されながらもつながっているので、他の人たちがしていることも感じることができる。

また大学門前町は、周辺で現在構想中のプランを活かして計画されている。具体的には駅前から続く桜並木、北の環境学習フィールド、ビオトープ、南のコスモス畑といった既存のプランに調和し、これに続く道を配したデザインとなっている。

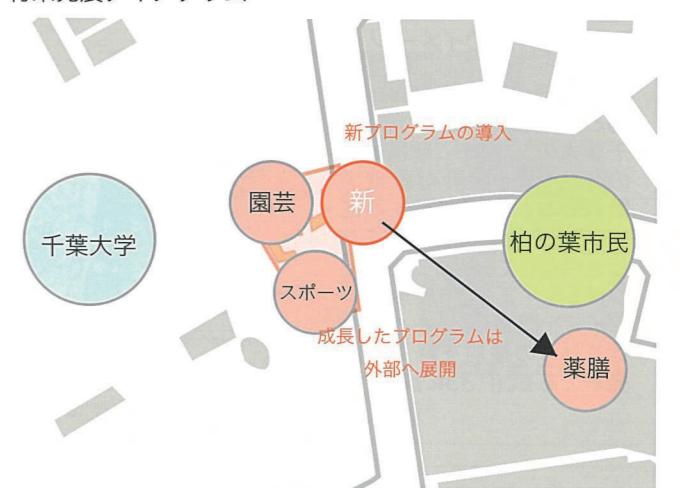
薬膳レストランでの千葉大学・社会的企業・柏の葉市民の関係



### 相互的な利益&発展 (薬膳レストランの例)

まず「千葉大学」は、「社会的企業」に土地と野菜の薬効成分といった知的資本を供与する。これを受けて「社会的企業」が、レストランの運営・管理にあたる。そして「柏の葉市民」は、質の高い薬膳料理を低料金で享受し、美肌効果や肥満解消といった効用を得ることができる。この社会的な結びつきの中で、「社会的企業」は市民のニーズを把握すると共に経営ノウハウを蓄積する。「千葉大学」は研究や高等教育にあてる時間・空間を確保しつつ、市民への健康効果などの研究データを獲得できる。そして再び「千葉大学」、「社会的企業」から、今度はより高質な知的資本・サービスが展開され、「柏の葉市民」がそれを享受する。こうして「千葉大学(研究)」、「社会的企業(経営)」、「柏の葉市民(効用)」の3者は、持続的に相互利益を得つつ発展モデルを描いてゆく。

### 将来発展ダイアグラム



### 外部への展開とプログラムの更新

「大学門前町」の各々プログラムが十分に自立できるほどに成熟し、門前町の外からも需要が見込まれる場合、それは外部へと展開し、より広域な市民・地域に貢献する。

成熟したプログラムの外部展開は、同時に、新しいプログラムを「大学門前町」に生み出す。こうしてプログラムは定期的に更新されるが、「大学門前町」は常に千葉大学と市民などを結びつける大切な接点であり続ける。

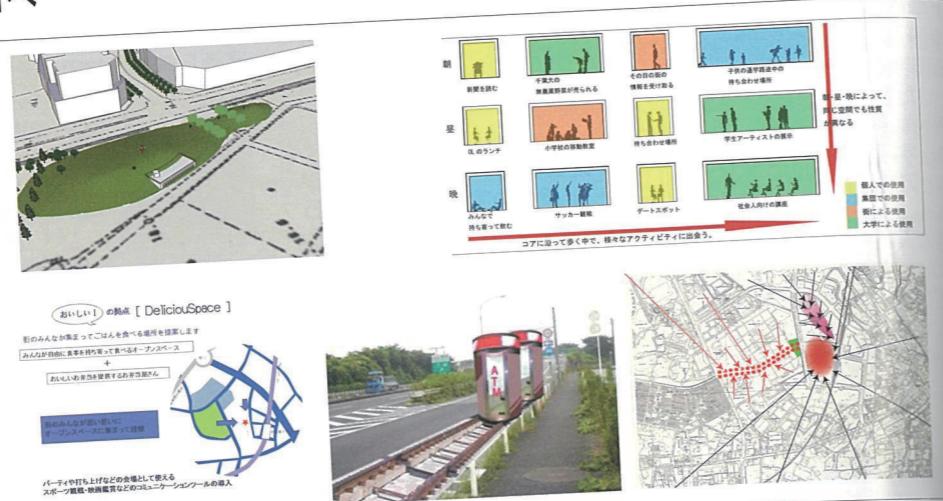


園芸菜園からアスレチックパーク側を見る

## スタディの流れ:「道」から「門」へ

### 5月11日:アイディア出し

初期アイディア出しの段階では、大きく分けて2タイプの案が出た。千葉大学の知を地域に還元する拠点としていくタイプでは、丘の中に教室を埋め込む案(左上)や、活動が入り込むハコを散りばめる案(右上)などが挙げられた。周辺に足りないものを補うタイプでは、弁当販売を組み合とオープンスペースを組み合わせる提案(左下)や動くATM(中下)、学生街(右下)などが提案された。



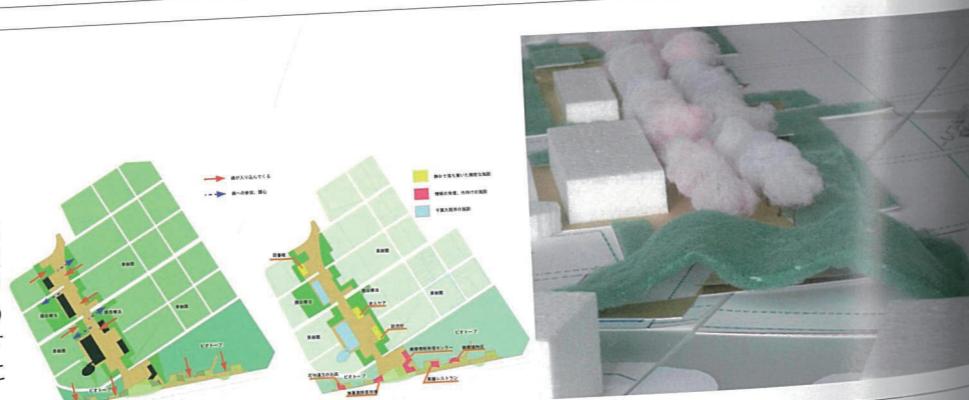
### 5月26日:道のイメージ

5月11日の学生街の提案を基として発展させていった。千葉大のグリッドと駅前通りのグリッドを設計対象地で吸収しながら空間を生み出すことを意図した初期案をたたき台として、角度で遊びをつけるタイプや、中規模建築タイプを模索した。右ページはこれらの検討を経た中間発表である。(P.33に詳細)



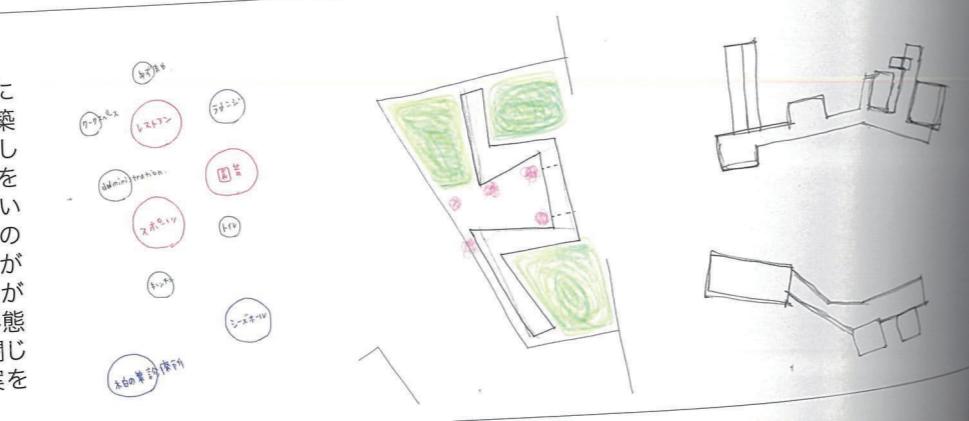
### 6月15日:T字型の展開

6月15日は、東西軸のみならず、南北軸も意識して、2本の道沿いに施設を配置する案を発表した。東西軸沿いには、託児所や老人ケア施設など、静かで落ち着いた施設を、南北軸沿いにはレストランや観葉植物店など、情報の発信・まちの賑わいに寄与する施設を挿入した。B地区には植物でゲートを作った。



### 6月30日:中間領域へ

分棟型でオープンなつくりにするのか、あるいは帯状建築で囲われた領域を作り出していくのか、といった議論を繰り返した。運営形態についても、大学が直接運営するのか、NPOや社会的企業が入ってくるかなどの議論があった。最終的には運営形態と併せて考え、ある程度閉じられた中間領域を作る案を採用した。



## 5.26中間発表案:新たな道がまちをひらく

### 問題意識 ウラを向けられているB地区/大きすぎる街区

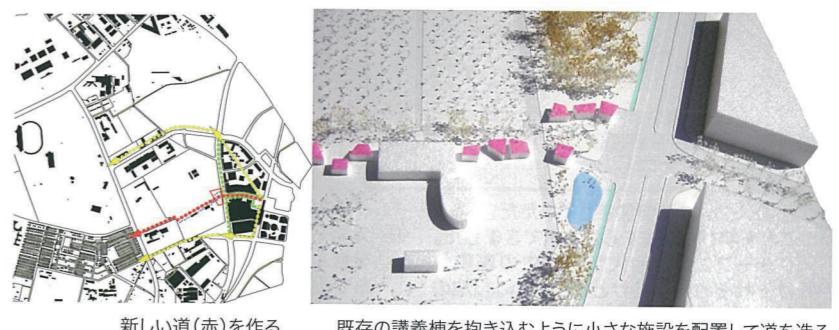
B地区に対して私たちは2つの問題意識を持った。1つ目は、B地区は駅前の目抜き通りの突き当たりにありながら、千葉大学にも、ららぽーと柏の葉にもウラを向けられていること。千葉大学内のグリッドパターンを見ると、西側道路に正対しているのが分かる。2つ目は、柏の葉の街区の大きさ。本郷・幕張などと比較すると、その大きさが際だつことに気がつく。これらのことより、柏の葉では街区ごとに生活が完結し、道路などの公共空間に賑わいが出てきにくいのではないかと考えられた。



ゲシュタルト図 1:50000  
柏の葉周辺(左)本郷周辺(右上)  
幕張ペイタウン(右下)

### コンセプト 道を通してオモテにしていく

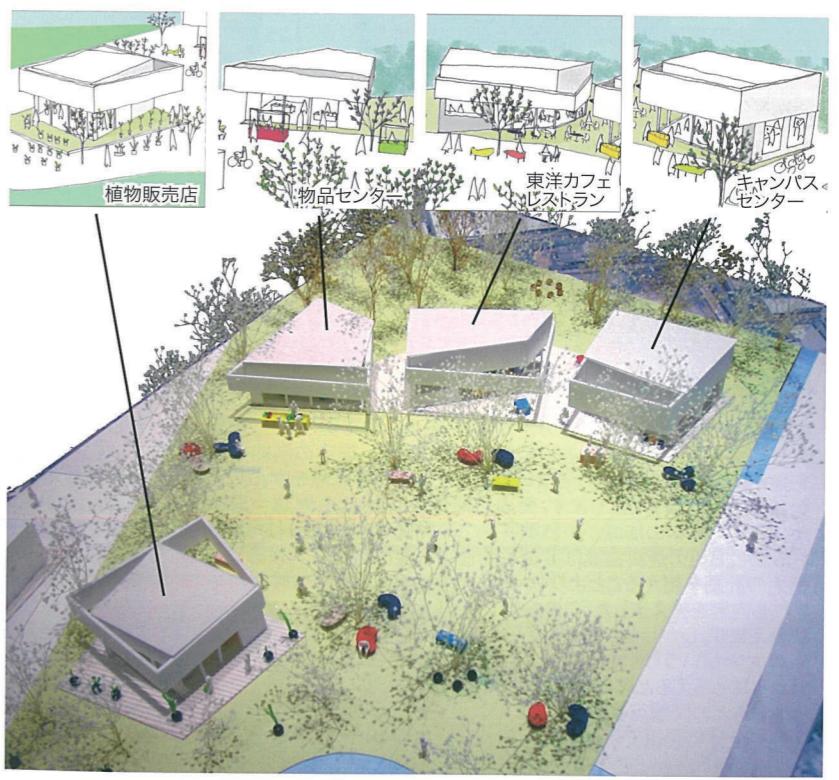
千葉大学のスーパークリアに割って入る新しい道を作り、人の流れを生み出すことで、B地区周辺を裏から表にすることを考えた。道には、既存の建物(講義棟、東洋医学診療所)を抱き込むように、スケールの小さな施設を散りばめていく。



新しい道(赤)を作る  
既存の講義棟を抱き込むように小さな施設を配置して道を造る

### 提案 新たな道がまちをひらく

B地区に、計画の第一段階として千葉大学の敷地であるという特性を活かす、4つの施設を配置する。東から、キャンパスセンター、東洋カフェレストラン、物品センター、植物販売店。これらの施設を通して、千葉大学は研究成果を地域に還元することができる。天気の良い日はそれぞれの屋内機能が、屋外デッキや道にもにじみ出してきて、まちに賑わいをもたらす。建築上層部の張り出した壁の部分には、広告物を掲示したり、プロジェクターで映し出すなど、千葉大学・地域の情報発信の場にもなる。

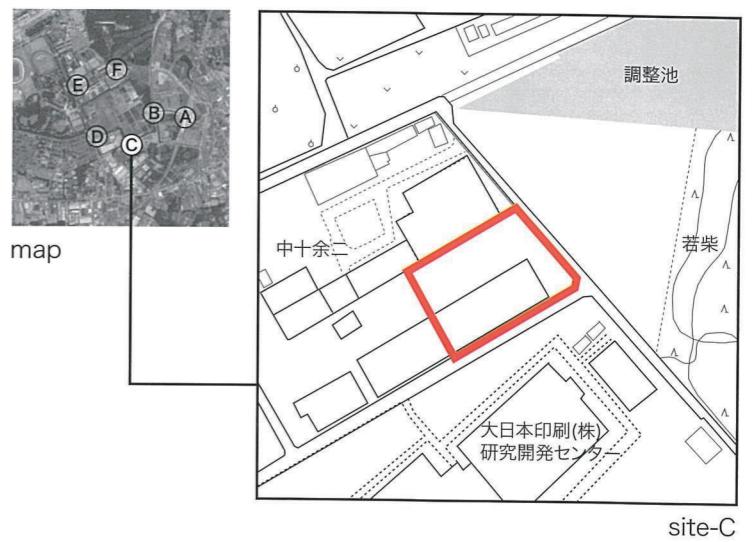


駅方向からの計画全体俯瞰図

1:100模型 計画全体俯瞰景

# C

## セルフデザイン工房 -柏の葉ライフスタイルの実験所-



### STUDENT



尾上 永晃  
(東京理科大学)  
篠田 尚紀  
(東京理科大学)  
伊藤 雅人 (東京大学)  
平岡 惟 (東京大学)

## グループBの感想

### STUDENT

#### 長沢 恵(東京大学)

僕は、都市スタジオを通じ、共同で作品を作っていくことの難しさと面白さが印象に残った。様々なバックグラウンドを持った6人が集まり、空間的な部分だけでなく、それを支える思想や仕組みについて深く考え、一つの作品として昇華させていくことができた。その過程で、今後、ますます重要度が増す、まちの中のコミュニティを生み出すような公共空間のあるべき姿についても見えてきた。最後にB班のみんな、本当にありがとうございました！

#### 大道 亮(東京大学)

「他流試合を恐れない勇気が必要だ」とは入学式での小宮山宏総長の式辞である。この言葉の持つ意味が、今になって分かった。初対面で、バックグラウンドも違って、時間もそんなに多くは共有できないメンバーでもグループ作業をする。都市建築系の小さな枠組みの中ではあるが、まさに他流試合だった。初の他流試合は消化しきれなかつたが、その難しさと意義深さは体験できた。先生方の指導もとても有難かったです。ありがとうございました◎

#### 近藤 宗俊(東京大学)

私の専門は経済と水環境です。従って本スタジオでは、本来なら会うはずのないみんなと触れるはずのないテーマに取り組むことになり、貴重な経験をさせて頂きました。プレゼン方法や模型の製作方法といった具体的な事から、提案の根拠作りの大切さ、そして建築家やグループワークの進め方、そして建築家やデザイナーを志す班員の感性といった抽象的な事まで多くの事を学びました。先生方の指導もとても有難かったです。ありがとうございました◎

#### 姜 作然(千葉大学)

今回のスタジオに参加させていただき、多くのことを学び、経験することができました。同グループにいた他大学の学生の専攻分野はそれぞれ異なるけど、柏の葉に心地の良い空間を作り出そうという同じ目標を抱え、お互い協力し合って、アイデアを振り出すことは、非常に大事な機会であったと思います。自分たちだけが満足する提案ではなく、聞く側、住民側に立って物事を考えることが重要で、また提案をいかに魅力的に分かりやすく伝えることも大事だと感じました。とても充実した怒涛の3ヶ月間でした。

#### 仲村 明代(東京理科大学)

とても貴重な経験ができました。いろんな分野の人たちと一緒にになってひとつのことを考えるとき、様々な考え方に対することはもちろん、ちがう専門の人たちの知識に触れる事ができたことはとても新鮮でしたし、自分の専門の中で当たり前になってしまっていることを改めて考え直す機会になりました。この経験を大切にして、今後はもっと視野を広げた考え方ができるよう、心がけたいと思います。ありがとうございました。

#### 市村 駿(東京大学)

このスタジオは新しいスタジオのあり方に挑戦していると感じた。複数の大学から異なる分野を専攻する学生のグループワーク、多数の先生方、実現も視野に入れていくこと。その新しさゆえ、グループ全員が集まる時間がなど取り組むまでの難しさにも直面したが、それも経験になったと思う。何度も終電まで熱血指導をしてくださった清水先生、ハッピーターンで癒してくださった丹羽先生には感謝の気持ちで一杯だ。

### STAFF

#### 清水 亮(東京大学准教授)

B班の設計対象地は千葉大の土地です。頑張って立案しても、千葉大が首肯しなければ日目を見ることはできません。現実の制約条件を強く意識すれば、新しい都市のあり方を表現する思想を学んだ大膽な提案はしづらくなります。実現可能性か、それとも理想=思想か。このバランスの加減が最終講評会での評価を大きく分けたと感じました。B班の最終提案は実現可能性を考慮しており、現在ある千葉大の計画を超えることよりも、それに合わせつつ新たな展開が生まれる内容を考えました。このため、一見すると思想性に欠けた提案に見えます。しかしながら、提案を深く読み込んでいただければ、從来の大学が「地域貢献」を超える新展開も含めていることがあります。しかし、ひとつのアイデアを深く掘り下げるための時間が不足していましたが、3ヶ月という限られた時間を考慮すれば十分に評価できる提案ができたと思います。

#### 丹羽 由佳理(UDCKディレクター)

苦しんでいるみんなの顔が、印象に残っています。ものをつくりあげていくプロセスでは、苦しい時期もありますが、それを乗り越えれば何とも言えない楽しさがあると思います。みんながどれほど苦しんで、楽しい時間を共有できたか分かりませんが、ひとりひとり真剣に考えていました。大学院生として豊かな発想を示すためには、深い知識だけではなく、実地調査や将来予測などさまざまな角度から考察する必要があります。B班では、足で稼いだ情報や複数回のインタビューによって、千葉大学とまちの中間領域を提案することができました。経済的な観点や、大学と地域住民との接点について盛んに議論できることも、非常に有意義だったと思います。しかし、ひとつのアイデアを深く掘り下げるための時間が不足していたのでは、とも感じました。イメージを形態として表現する楽しさを、たくさん味わってほしいと思います。

### STAFF



日高 仁  
(東京大学特任助教)  
志村 真紀  
(横浜国立大学講師)

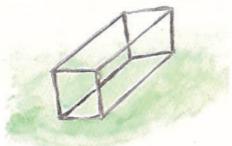


セルフデザイン工房とは、大学や企業が中心となり、そこに住民も参加する、ものづくりを通した学習・交流の施設である。具体的には以下のものからなる。

- \*ユニットをつかった実験施設や工房（大学・企業の研究所、ものづくり、ワークショップのスペース）
- \*大きな展示・イベントのスペース（研究成果や作品の展示、大きなイベントの会場）
- \*商業施設（実験施設・工房で使う資材の販売の販売所）

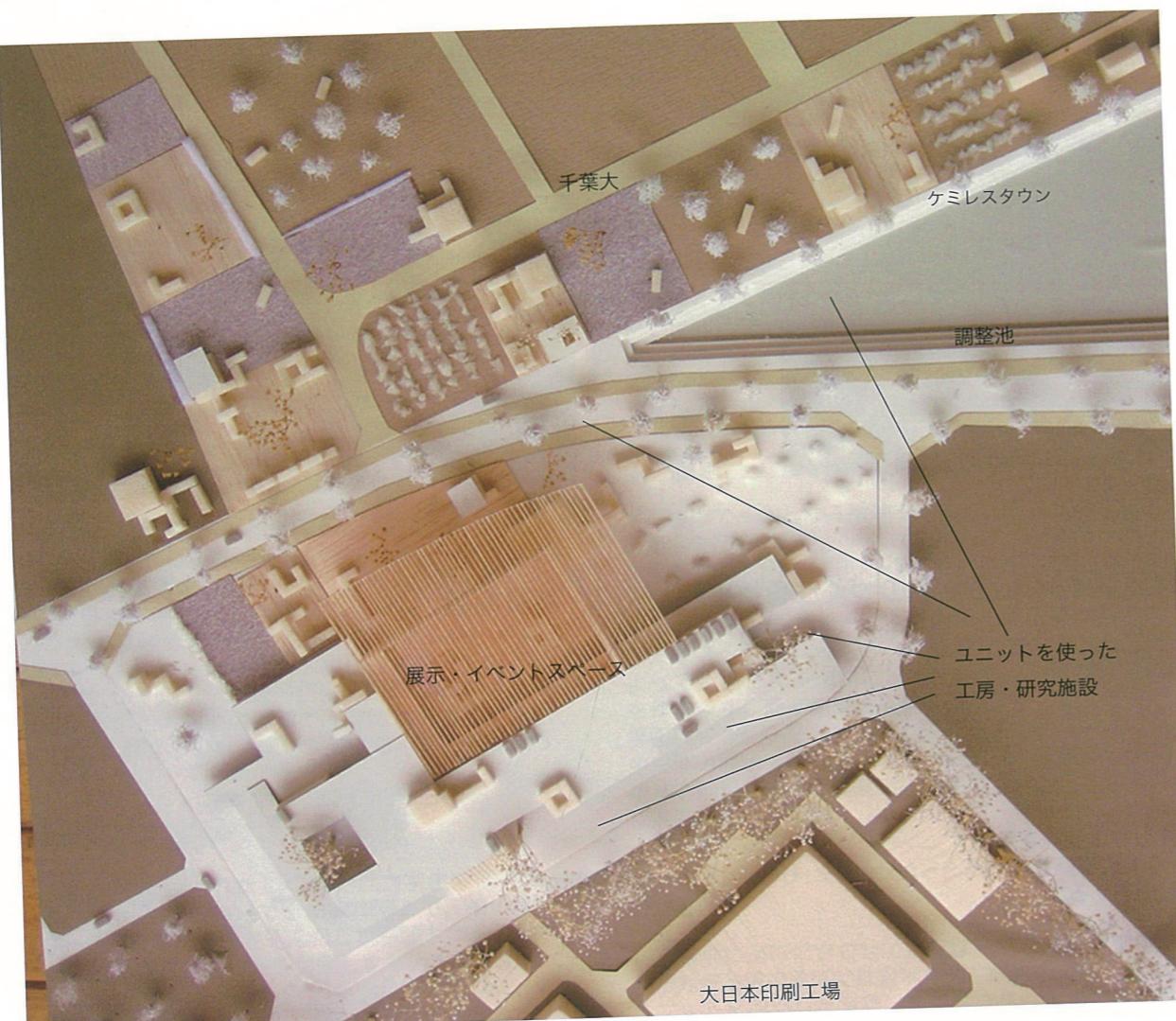
## ユニット

敷地内の様々な場所で、仮設のユニットを利用する。ユニットは単体で、また複数組み合わせて、様々な種類の施設として使うことができる。



## 施設の配置

ユニットは主に千葉大から、敷地中央の展示・イベントスペースにかけて多く配置される。対象敷地内の施設は千葉大に面した方向を表とし、区画整理によって整備される道路に沿ってユニットを配置して沿道を演出する。商業施設は大日本印刷工場側に配置する。



## 時間の経過による変化

敷地は二年後の区画整理にともなって変化する。計画も敷地にあわせて段階を追って進行させる。計画には四つの段階があり、既存の工場の裏からはじまって徐々に千葉大側へ広がっていき、最終的には上の図のような配置になる。

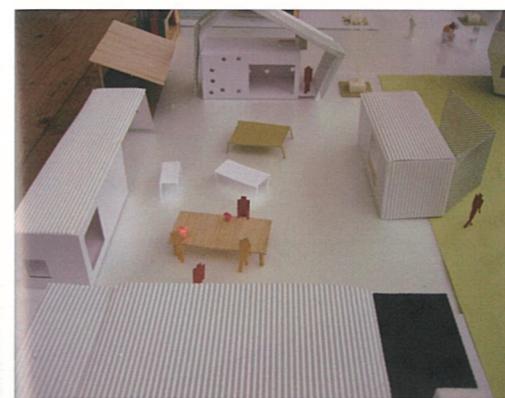
### ①区画整理前



既存の工場を倉庫として利用し、ユニットを使って、企業や大学の研究・実験の場や工房などを作る。そこに企業や大学の研究者たちが常駐し、実験や製作が行われる。



## ユニットを使った研究施設・工房

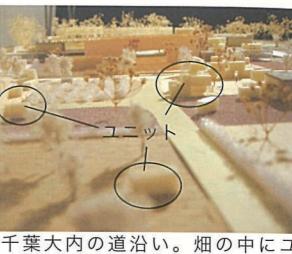


ユニットでできた研究施設の前でワークショップが開かれている。

千葉大の内部に展開するユニットでは千葉大の研究やケミレスタウンに関連して、農・居住をテーマにした研究施設や工房がおかれ、実験やワークショップが行われる。



ユニットは千葉大の中に大きく展開し、ケミレスタウンまでつながる。



千葉大内の道沿い。畑の中にユニットが置かれている。



畑の中にあるユニットは簡易キッチンとしても利用される。



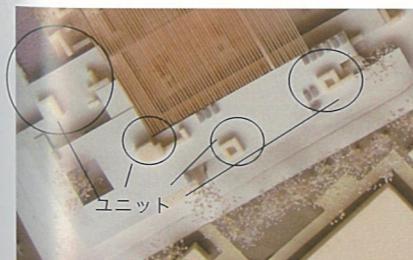
## 展示・イベントスペース



敷地中央にある展示・イベントスペース。屋根の下や壁の内部にもユニットが置かれる。

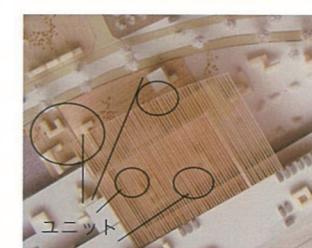


## 商業施設



商業施設にもユニットが併設される。

中央の広いスペースでは、さまざまなイベントや展示会が行われ、千葉大や敷地内のユニットで行われた実験結果や、工房で作られた作品が発表される。イベントスペース内におかれたユニットは、工房などのほかに、店舗やギャラリーとしても利用される。



ユニット



ギャラリーとして利用されるユニット



売り場に併設されたユニット。そばまで車が入ってくる。

### ②工場取り壊し後



区画整理にともなって既存の工場は取り壊され、その場所にユニットが広がっていく。道路に面した広いスペースではイベントやワークショップが行われ、徐々に住民にも開かれた場所になっていく。

### ③区画整理中



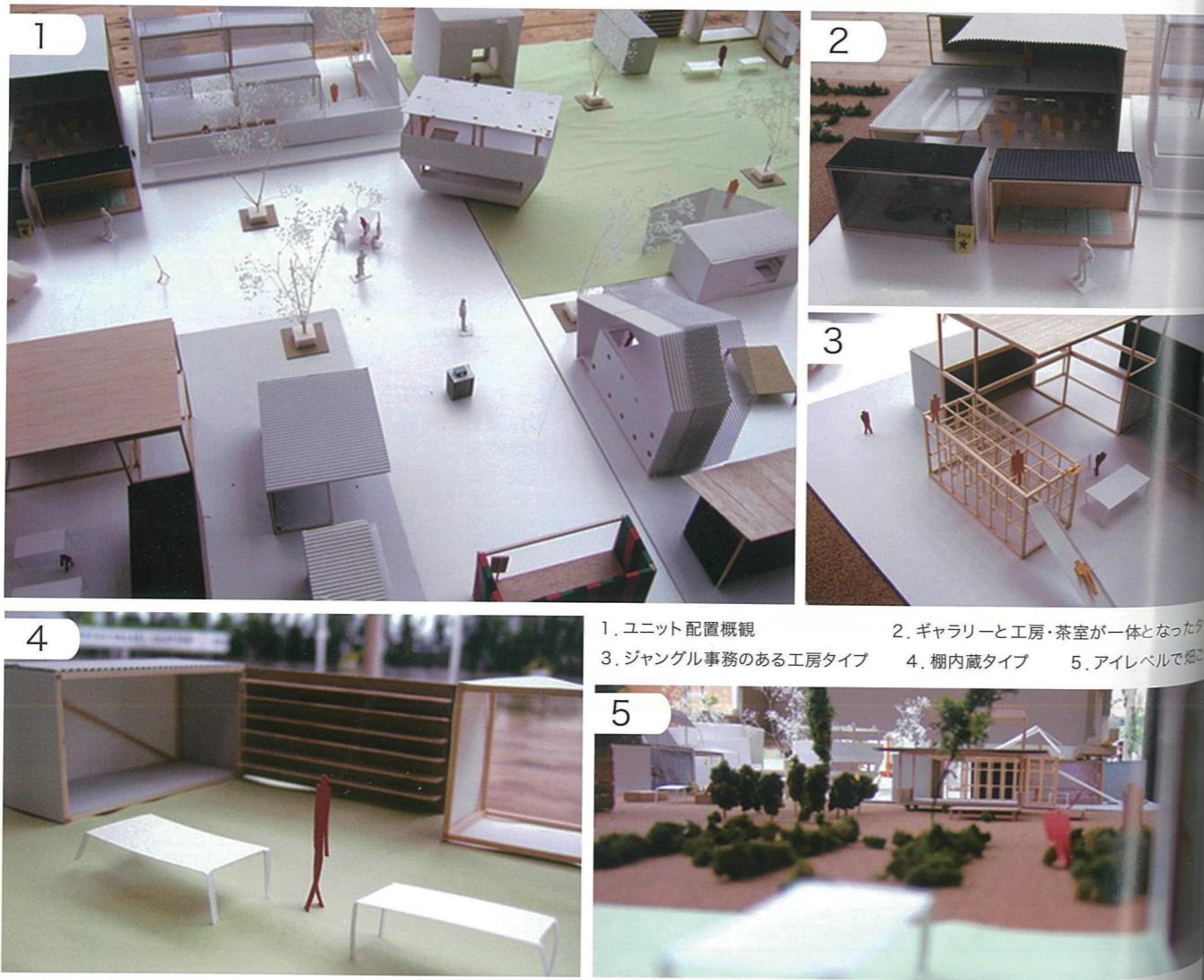
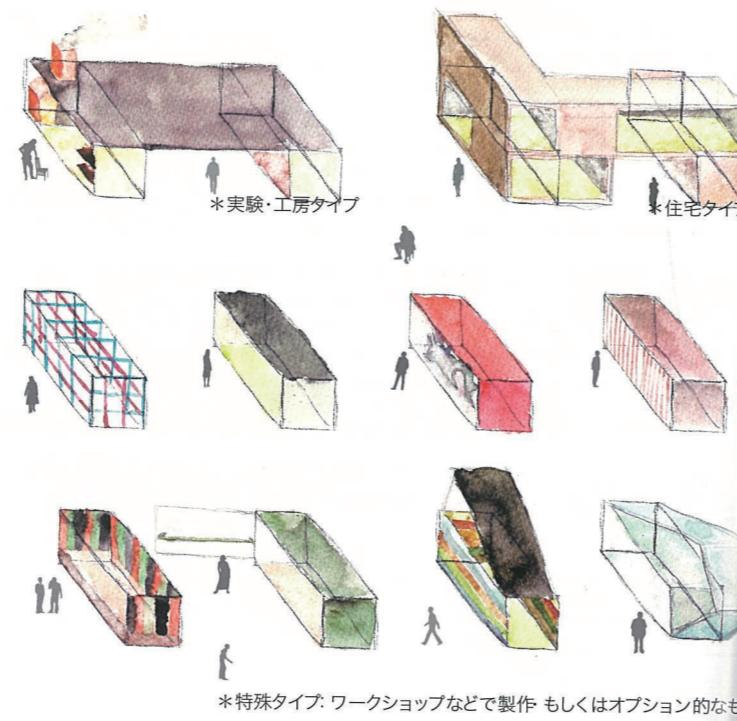
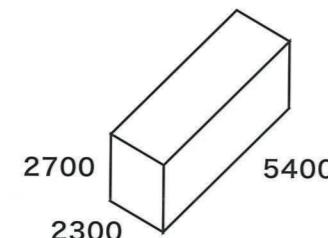
区画整理の進行にあわせて敷地と千葉大のあいだの道路に面した部分を整えていく。最初に作った部分はなくなり、ユニットはだんだんと千葉大の中まで広がっていく。

## ユニットの組み合わせと変化

- \*可動性・可変性に富むということ
- \*安価であること
- \*大手ユニット会社が柏の葉に本社を構えていること

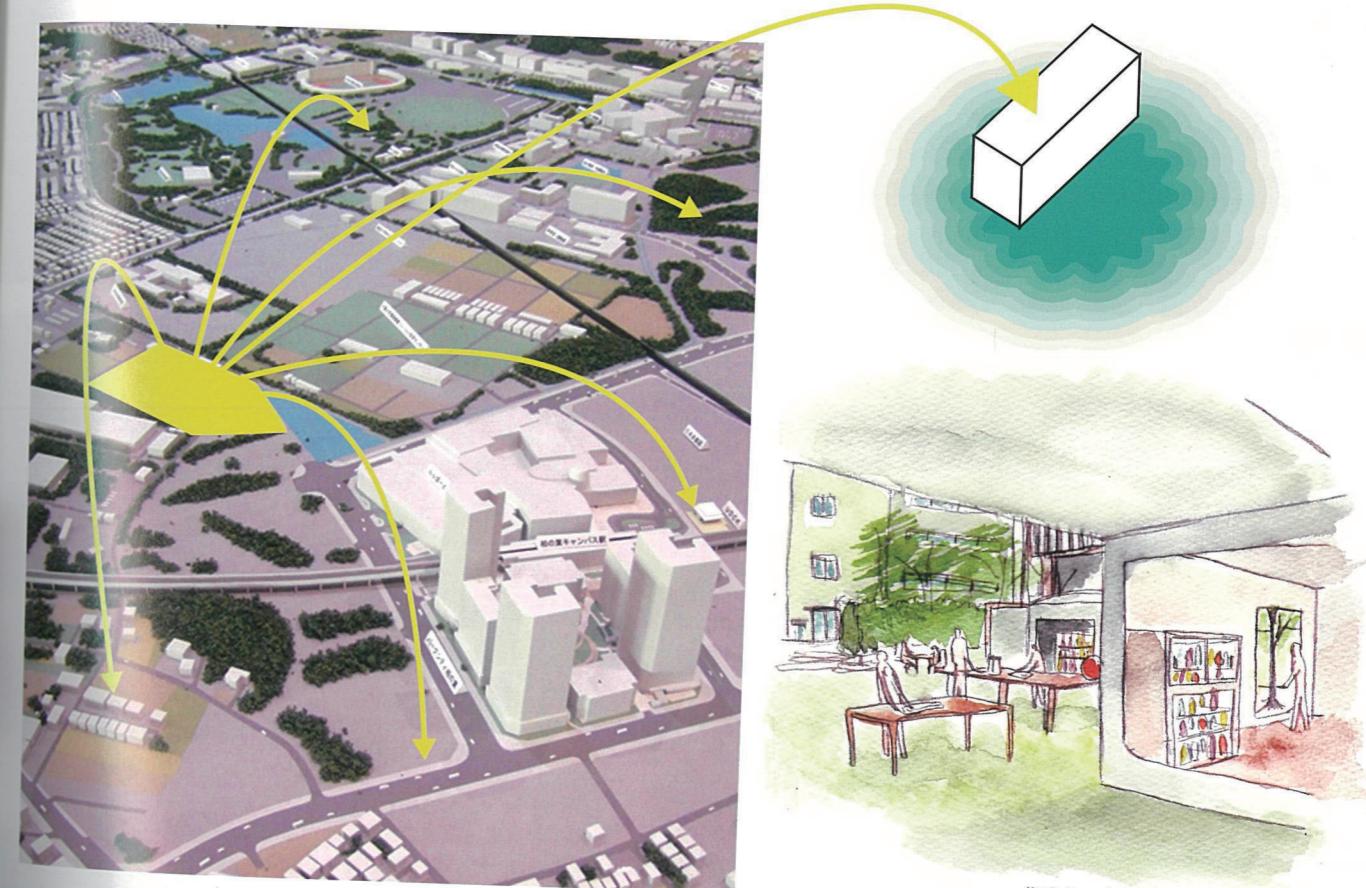
上記を踏まえた上で、ユニットを利用する。  
ユニットは単体での特徴ある機能に加え、複数を組み合わせることで、居住実験用住宅や工房・実験施設となりうる。

プログラムの需要に応えて組み合わせが変化することに加え、柏の葉の遊休地に対しての移動・展開も見込める。



## ユニットの展開

ここで利用されたユニットは、柏の葉の遊休地へと貸し出されることも考えうる。  
「ユニット=プログラムを内包するもの」はそれぞれの場所をその機能で変容させる。  
また、ユニットの存在は、柏の葉の一体的なイメージを形成するのに役立つことだろう。



住宅地の合間に展開する工房・実験施設



こんぶくろ池に置かれたユニット

柏の葉公園の茶屋ユニット

グループCで扱った敷地は、6つの敷地中唯一の民有地であり、土地の所有者の方にも週一回のミーティングに参加して頂き、意見を交換しながら提案を作り上げていった。ここでは3ヶ月間の模型によるスタディと思考の変遷を示す。

**思考の変遷**

**■スタジオ開始～5月11日発表**

**敷地からの着想**

- \*大学・高校・工場などに囲まれた敷地
- 交流を生み出す施設に。
- \*区画整理に合わせ、段階的に変化する敷地の利用方法を考えたい。
- ホームセンターに着目**
- \*ものづくりを交流の核に。
- \*大規模な敷地の利点を活かす大きな商業施設半屋外の空間の利用
- \*屋根の下の半屋外空間を工房等に利用する。

**模型によるスタディ**

**「育ちの工房」(5月11日エスキス)**

\*売り場+工房による交流施設

\*半屋外の空間を使った工房

\*住民の需要とともに成長する施設

**成果物**

**■5月11日発表～5月26日中間講評会**

**車を取り込んだ施設のあり方を考える**

- \*半径20km圏内の住民をターゲットとする商業施設をえたとき、ある程度の駐車台数を確保する必要がある。
- \*駐車場に工夫を施すのではなく、建物の中に車が入っていくけるようなデザインに。

**立体駐車場に着目**

- \*立体駐車場のスラブ床の下の空間を、半屋外空間として工房やマーケットに利用する。

**5月26日中間講評会～6月15日発表**

**プロフェッショナルな機能を追加する**

- \*趣味のものだけでなく、大学やデザイナーなどのプロも巻き込んだものづくりの場。(実験所や研究施設)
- \*それらを発信する場として、大きな(50m×30m程度)展示、イベントスペースを中心に設ける。

**柏の葉スタイルというテーマ**

- \*郊外で豊かに暮らすとはどういうことか、柏の葉ならではのライフスタイルを実験、提案する場

**6月15日発表～最終講評会**

**ユニットハウスの可能性を考える**

- \*敷地の暫定的な利用方法が求められることから、大きな投資をせずに実現できる仮設ユニットに着目する。
- \*ユニット単体でできることだけでなく、組み合わせによってワークショップスペースや居住実験場をつくる。
- \*区画整理で拡幅される道路沿いと、千葉大の敷地の中までユニットが広がる。
- \*敷地内で利用されたユニットが柏の葉の他の場所に移動し、モバイル公共空間として機能することも考える。

**「マーケット・ラボ」(5月26日中間講評会)**

\*売り場+工房+マーケットによる交流施設

\*半屋外の空間を使った工房+マーケット

\*車を取り込んだ交流

**「柏の葉スタイル発信基地」(6月15日エスキス)**

\*大学との連携、実験・研究機能

\*中心に展示・イベントスペース

\*「柏の葉スタイル」を発信する場

**「セルフデザイン工房」(6月30日最終講評会)**

\*居住実験も含めた実験機能

\*中心に展示・イベントスペース

\*ユニットを用いた工房や研究施設が千葉大の中に展開

## グループCの感想

### STUDENT

平岡 惟(東京大学)

対象敷地をはじめて見たときは、ここでなにができるのか、誰がここを使うのか、全く想像できませんでした。それから約二か月。とにかく模型を作ったり、他大学の人たちと共同で作業したり、敷地の持ち主の方とミーティングしたりと、はじめての経験もいっぱい、いろいろと戸惑いながら、たくさん試行錯誤しながらのスタジオでした。最後までやり切れてよかったと思っています。

伊藤 雅人(東京大学)

都市をデザインしていこうとする立場の者として、「設計」に対して臆病になりたくないというのM2ながらスタジオへの参加を決めた理由だった。その目的は達成した。C班は班員も先生方も特に建築色が強く、MTGでは多くの模型を作り、スタディを重ねてきた。しかし、設計のスキルよりも何よりも自分に欠けているものがなんなのか、自分自身のことを考え直すことができたのが今回のスタジオの一番の成果だったと思う。それは自分と違うバックグラウンドを持った人達との会話や共同作業の中でこそ気づいたものだったかもしれません。C班に感謝したい。

尾上 永晃(東京理科大学)

話し合いには毎回模型を携えていき、その都度模型は用無しになるような、手を頭より動かさねばついていけない状況。そして、それ以上の模型や発想を携えてくる先生お二人と同じ班の仲間。嗚呼、皆が恐ろしい、そして時間を無尽蔵に吸い込もうとするこの話し合いが憎い。…でも、なんだか好き…ハッ、これはまさか…恋? 恋なのね? はい。そうです。気づけば僕は先生方、そして班員に恋をしてしまいました。案に対してのソレよりも深い愛情を。そこが今回の反省点もあり、色々気づかされた点もありました。チームで物事を考える、それは皆で作品に対して愛を注ぎ込む作業だったので! 感銘。本当にありがとうございました。

篠田 尚紀(東京理科大学)

今回、他大学の人と何かをやる事というのがとにかく新鮮だった。特に僕たち2人は建築寄りで、東大の2人は都市寄りの考え方をしており、エスキスのたびにアプローチの仕方が違っていたことが面白い部分であった。しばしば自分たちの考えが通じない場面もあって苦労することもあったけれど。このスタジオはそういった今まで知らず知らずのうちに建築的な常識や大学の常識に染まってしまった思考を柔軟にときほぐしてくれるものであつたように思う。

### STAFF

日高 仁(東京大学特任助教)

C班の敷地は駅前大規模商業施設の裏側という立地ではあるが、駅から比較的近く、最大で約5000坪というまとまった区画として区画整理が予定されている。これだけの区画を一体的に計画できる可能 性は、この敷地の最大の特徴といえる。プロジェクトは、中心に大規模な展示場を配置し、その周囲に既成ユニットなどを応用了した実験的な展示場を設置する。また、複数の機能を複合的に実現する複合形態には様々な可能性があり、新しいタイプの公共空間として現実化しうる興味深い提案である。

志村 真紀(横浜国立大学 講師)

グループCの敷地では、敷地の所有者がクライアントとしているため具体的かつ実現性のある提案を行うという点と、約2000坪の広い敷地をさらに隣地へ拡張して空間の利用を考えるという点が課題として付加していました。スタディ過程においては、都市的なスケールから身体的なスケールへのアプローチ、そして時間軸に沿ったデザインの展開を検討しましたが、学生にとって自分自身が持っているスケールを超えることや、経験したことのない事象をイメージすることが難解であったかもしれません。ただし、週に2回のエスキスにおいて毎回スタディ模型を提示し蓄積することで、このようなダイナミックなビジョンを提案できたことは素晴らしい成果だと思います。

学生の皆さんにはこのスタジオで、何を頑張ったのか、どんなことが勉強できたのか、どんな自分になれたのか。今一度思い出してみてください。みんなの経験や反省や成長が、都市をもっと良くしていくと思います。

## かしわのはっぱみち

-新しい境界のデザイン-

D



site-D

### STUDENT

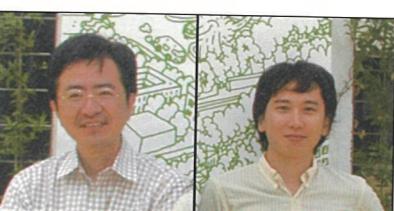


石田 拓己(東京大学) 石野 正規(東京大学) 上野 良子(東京理科大学) 小野寺 史明(東京大学)



柏原 沙織(東京大学) 竹川 征(東京理科大学) 矢原 有理(東京大学)

### STAFF



宮脇 勝(千葉大学) 三牧 浩也(日本都市総合研究所)

# かしわのはっぱみち

-新しい境界デザイン-



## 1. 対象地と課題

私たちグループDの提案は、東大・千葉大・柏の葉高校に挟まれた対象敷地に、従来の「敷地を区切るもの」としての境界ではなく、様々な人々をつなぐ「活動が滲み出す」新しい境界をつくるものです。

## 2. 目標の設定

「キャンパスタウン」を目指す柏の葉。しかし住民にとって大学は遠い存在であり、構想が先走っている感があります。3つの教育機関が隣接するこの敷地で、現在はそれぞれの柵で明確に区切られた境界を融合させ、住民・高校生・大学生が交流する場へと変化させる。それによって、柏の葉に関わる人々がまちを身近に感じ、キャンパスタウンを実感できる核となる場所を作り上げることが、私たちの目標です。

## 3. 企画

この敷地は駅への抜け道となる千葉大構内の場所であり、美しい並木に囲まれた場所でもあります。この場所で様々な新しい動きが交流できるよう、高校生・住民・大学生が共同で作り上げるが設計・運営方法を考えました。設計では①建築されるような設計・施工が簡単で、③向こうとこちらの活動的なものではなく、②施工が簡単で、③向こうとこちらの活動的なものではなく、などのデザインルールを設定し、実際にみんなで作り上げられるものを目指しました。

## 4. 設計

境界を取り扱う=既存の柵を全て取り扱うという解決ではなく、高校側・東大側、それぞれの活動が滲み出す仕掛けとし、柵ではなく活動の起点を納めた「棚」のようなものを設け、棚にはキッチン・本棚など、独立した引き出し可能なユニット、また部屋として使える空間が入っています。活動が外に出ている間、そこは通り抜け可能な空間に、それが終わると閉じられて、「柵」としての機能を果たします。この新しい「棚」によって、通り抜けるだけの空間だったこの場所が、人々が交流する広場的な機能も持つようになります。

## 5. 展開

今後は、「異なる主体をつなぐ境界」というコンセプトを柏の葉地域全体で展開して行きます。例えば東大・千葉大の間の葉地域全体で展開して行きます。例えば東大・千葉大の間に留学生ロッジを中心に両者の交流促進の拠点とに、計画中の留学生ロッジを中心に両者の交流促進の拠点とに、計画中の留学生ロッジを中心とした交流拠点と住民したり、遠くに感じられている緑、こんぶくろ池公園と住民したり、遠くに感じられている緑、こんぶくろ池公園と住民したり、遠くに感じられている緑、こんぶくろ池公園と住民したり、遠くに感じられている緑、こんぶくろ池公園と住民したり、遠くに感じられている緑、こんぶくろ池公園と住民したり、遠くに感じられている緑、こんぶくろ池公園と住民したり、遠くに感じられている緑、こんぶくろ池公園と住民たり、離れた場所にあるものをつなぐことで、柏の葉に住む人がこの地域をひとつのまとめるのをつなぐことで、柏の葉に住む人がこの地域をひとつのまとめるのをつなぐことになる、そんなまちになることつまりとして感じられるようになる、そんなまちになることを期待しています。

## 敷地



千葉県柏市の北西に位置する柏の葉は、近年劇的に変化を遂げようとしている街である。2005年に開通したつくばエクスプレスは柏の葉に新たな顔を生み出し、駅前の開発とともに柏の葉に新たな人、物、情報の流れを生み出した。もうひとつの流れとして東京大学柏キャンパスが本格的に始動したことがあげられる。園芸学部農場として広い敷地を持っていた千葉大学も地域に開いたキャンパスを構想している。近くには東京理科大学や、江戸川大学もあり、知の集積する場所である。しかしその一方で、大学や、高校、住民などが接する機会がほとんどないことがあげられる。それはこのまちがまだ特徴を活かされていないということである。

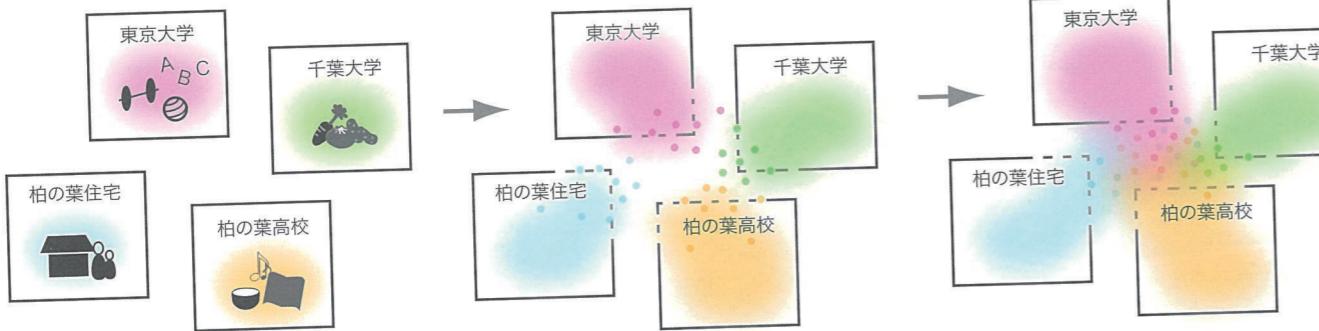


現在この敷地は千葉大の敷地内であり、柏の葉住宅の住民や高校生の駅への抜け道としてだけ使われている。また東大、千葉大、柏の葉高校が隣接しているにもかかわらずそれぞれの交流は薄く、境界において柵で仕切られ完全に分断されている。大学生と住民のつながりも薄く、遠い存在として意識されている。その一方で緑豊かで、とても気持ちのよい道である。

## ヒアリング

私たちは住民、高校生、桜並木協議会、ドッグラン経営者、大学生を対象としたヒアリング、ワークショップを通じて柏の葉とみちに対する意見を聞き出した。(詳しくは最後のページにまとめている)柏の葉に対しては緑豊かできれいなまち、大学や国機関が多く集まるまち、発展目覚ましいまちといったイメージを抱いている。その一方でもっと生活感のあるまち、もっと開かれた大学となつて欲しいといった意見もあった。また道に関しては駅への抜け道としてニーズが高く、開門時間の限定に対して否定的な意見があった。また安全、きれい、快いといったプラスイメージと同時に寂しい、狭いといった意見もあった。またただ通り道としてだけでなく、広場として使えたり、大学や高校、住民が交流できる場となればいいのではといった意見もあった。

## コンセプト 接点をつくり境界をつなぐ

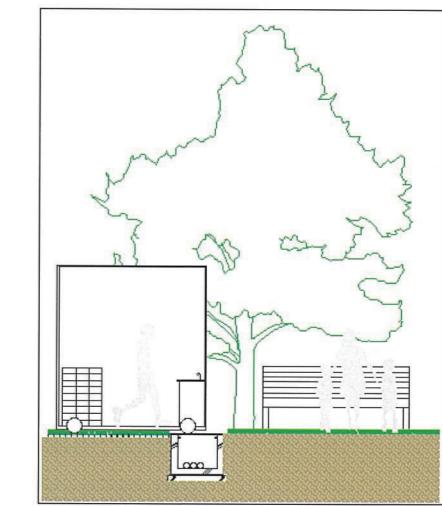
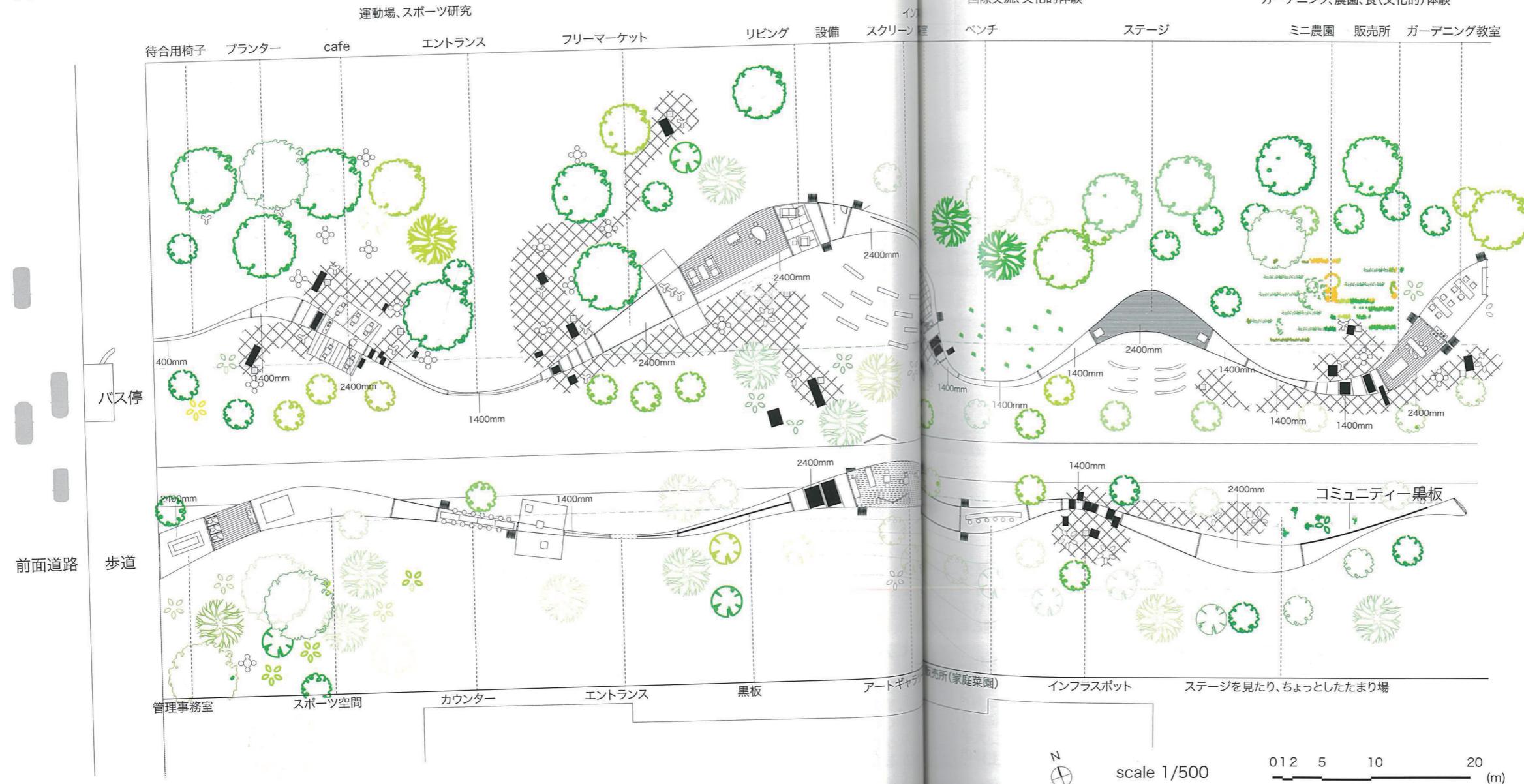


この敷地には、東京大学、千葉大学、柏の葉高校、柏の葉公園住宅といった4つの異なる主体が近接している。

これら4つの主体を緩やかにつないでいくことで、各機能が少しづつ道に溢れてくる。

これにより、完全に柵で囲われていたそれぞれの機能が道の上で混ざり合い、様々な活動や交流が生まれてくる。

## 平面図



Box の車輪を動きやすくし、植生を壊さないように、グレーチングを使用する。  
また、ガス・電気・水道（給水・排水）のインフラが収納されており、接続することで使用可能となる。

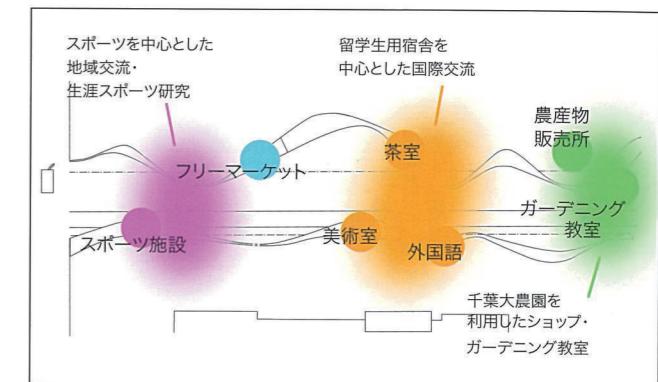
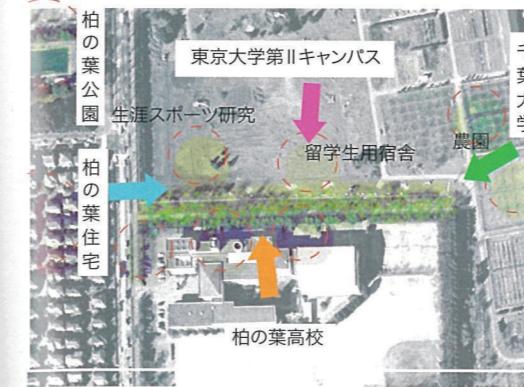
## インフラスポット

敷地内の数ヶ所に設置されており、可動式キッチンを使う為のインフラ系設備。これにより、自由に好きな場所でキッチンを使う事ができ、またキッチンを中心とした活動がいたるところで行われるようになる。

## テクスチャ

この敷地は、ほぼ全面的に土となっているため、可動式キッチンを運びやすくするために、柵からインフラスポット周辺をグレーチングで覆っている。このグレーチングは、自然の草花への影響も考慮している。

## ゾーニング



従来通りとしての機能を保つつも、様々な人、活動をつなぎ交流をもたらす空間に変えていく。それにより抜け道だけの空間に、それぞれの活動が染み出していく。これらの活動が混ざり合うことで、出会い、発見、交流、新たな活動が生じる空間へと変え、柏の葉に新たな表情と活気をもたらす。

## パーク このみちの風景



### 東大側敷地から公園通りを臨む

公園通りに対して施設が開かれている。屋根が低くなっているため、腰をかけてバスを待つことができる。本棚ユニットでは誰もが気軽に本を取り、木陰で読むといったことが行われる。

カフェにおいては、その活動を介して東大側と千葉大側が一体とした使われ方をする。またユニットが引き出された部分は、空間的にみちと東大、高校側がつながり広場的空間となる。

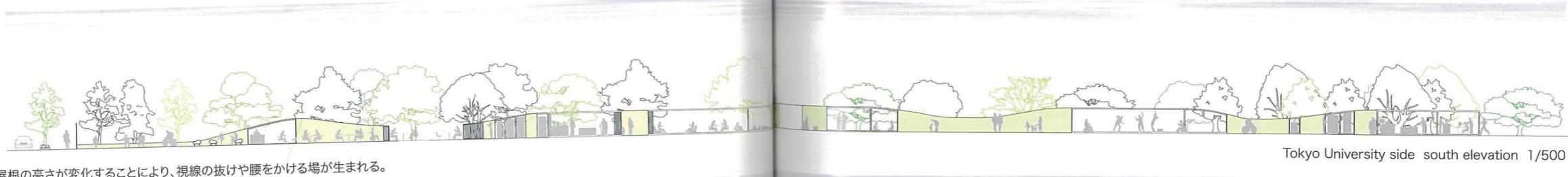


### ステージと千葉大農園を臨む

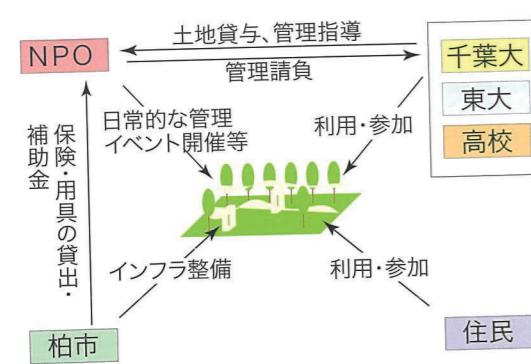
千葉大農園の傍では、農園でとれた作物やジャムだけでなく、住民が育てたものを販売したりできる。また、ガーデニング教室を行うこともでき、千葉大の活動を通して多くの人が様々な活動に触れることが出来る。

ステージでは高校の吹奏楽部が練習したり、地元住民も交えた発表会等を行なう。ここでは高校生の活動が染み出し、そこに大学生や住民が関わるといったことが行われる。

## 立面図



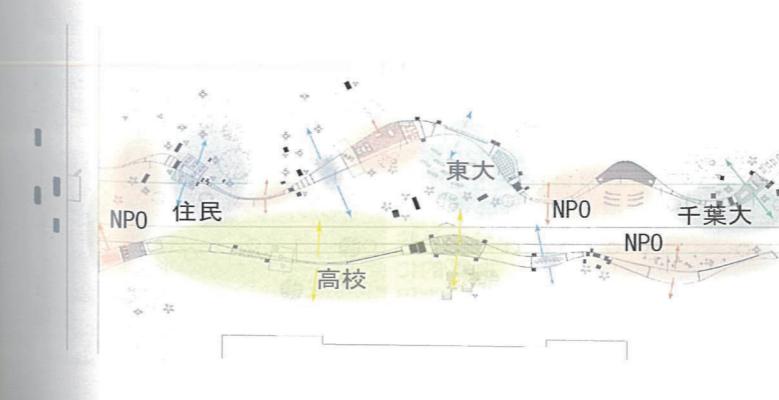
## 運営手法 異なる主体による共同管理



千葉大が門の開閉を管理している現在から、住民やこの敷地に関係する主体からなるNPOを立ち上げ、管理運営を行うことを提案する。その利点は、共同管理における責任の所在をはっきりさせ、既存の関係主体が独自管理に比べ、運営する資金を一括して集めやすいことである。また、NPO立ち上げの過程においてワークショップ等の協議の場を重ねていくことにより、様々な主体間の接点を徐々に作っていく。

敷地周囲の土地を所有する千葉大、東大、高校はNPOに土地を貸与する代わりに、NPOが敷地の清掃やユニットの貸し出し等日常的な管理とその責任を請け負う。また、市はインフラ整備を担うと共に、NPOに対して清掃用具の貸し出しや補助金によって支援する。さらに、NPOはイベント開催の支援などにより、この敷地を活気付けるとともに、大学や高校などこの敷地に関わる主体の接点を生み出す。

## 管理主体によるゾーニング



各ユニットはそれぞれの機能によって維持管理する主体が振り分けられており、それぞれが引き出し可能な家具の片付けなどの管理を請け負う。例えば、主に高校の部室として使用するユニットは高校が管理し、より公共性が高く、利用者が限定されないリビングなどはNPOが管理する。それによって、各ユニットの担当主体がユニットの外に出たアクティビティについても注意を払うこととなり、道全体が各主体によって共同で管理される状態となる。また端部にNPOの管理事務所を設置し、NPOは各ユニットの使用に関するスケジュールや鍵の管理を主に行なう。

## ユニットを使って夏祭り

棚の中には、可動式のキッチンユニットやテーブル、椅子が納められている。これらをみちへ引き出して、屋台のように活用することで、新たな人の集まりを作り出すことができる。使われ方に応じて花が咲くようにアクティビティが咲き誇る。そんな様々な使われ方に対応する。イベント時にはそれは最大限咲き誇ることとなり、みち全体が活動の場となり彩られる。

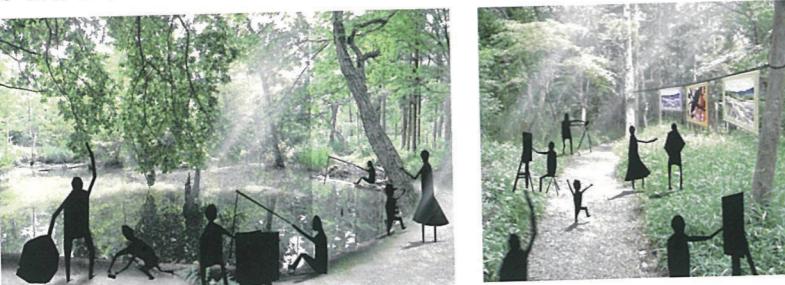


## 夜のステージ演奏会

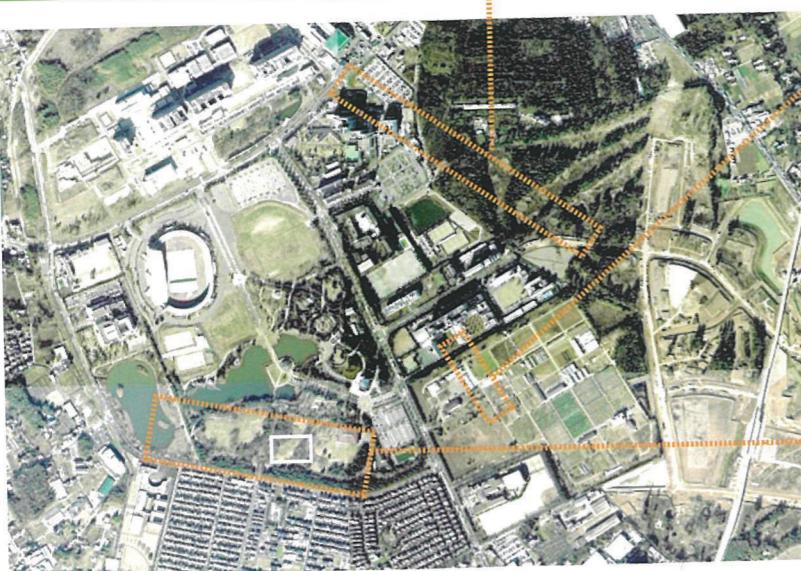
一番大きな広場では、夜になるとスクリーンを利用した映画鑑賞等が行われる。このように、このみちでは、昼と夜では異なった使い方をすることができる。夜の活動はこの道に明かりと人の目をもたらし、安全に通れる道としても機能することになる。また、夜は道に対して全てのユニットを閉じることによりそれは柵としても機能し、安全維持管理の問題も同時に解決することができる。

## 境界デザインの未来 そして、ひろがっていくこと。

### 1. まちとみどりをつなぐ



住民が気軽に訪れることがないこんぶくろ池の森。不法投棄のゴミで汚されたこの場所とまちの人たちをつなげ、自然とふれある機会を造ることで、こんぶくろ池にとっても良い効果があるのではないか。そう考え、この場所では定期的なゴミ拾い活動のためのごみステーションの設置、ささやかな野外アートギャラリーの場を提案する。



### 2. 大学と大学をつなぐ



現在全く使われていない千葉大と東大の境界に、敷地内を通り抜けられる道を通し、それに沿って両大学生の交流の場、外国人研究者が短期滞在できるロッジを設け、交流の拠点とする。敷地Dと共に、キャンパスマウントの核となる。

### 3. 公園とまちをつなぐ

高い植生によって住宅から強く遮られた柏の葉公園。その境界部分に、原っぱでバスを待ったり、子どもたちが楽しくなるような登下校を演出する空間をデザインし、公園と一緒に化した住環境を提案する。



### ワークショップ

### みえていなかつたなにか、みえてきたなにか

この敷地の実際のユーザーである柏の葉高校生(5名)・吉田教頭先生、柏の葉公園住宅の住民(8名)の皆様と共にワークショップを行った。

### vol.1 みんなで かんがえる

6月17日(日)  
13時~15時  
@UDCK

3グループに分かれ  
てディスカッションを行  
い、柏の葉・敷地Dについてのニーズを出し合った。  
①柏の葉地域・みち(敷地D)のイメージ  
②みちへの具体的な意見・提案  
③私たちの案に対する意見・提案

### A group



### B group



### C group



①環境が良い文教地域。敷地は近道で便利。緑豊か、広い道が良い。気軽に休める場所を。夜は暗い。  
②ステージは演劇部・吹奏楽部の発表。夜に屋台。長い時間をかけてみんなで作っていく。祭りで使用。年代を超えて交流できる場所。  
③部活練習に興味のある住民も一緒に参加。英語で茶会。

①柏の未来型都市。生活臭のするまちに。県立高校では柵ではなくても良く、高校・千葉大・東大間なら柵を取り払うのは、比較的容易か。  
②コミュニケーション重視、井戸端会議  
③ユニットの中身が分かりやすく見えない工夫を。視覚的に遮断しないで。一人では使用しづらい。町内にNPOをやりたい人はたくさん居るのでは?

### vol.2 みんなでつくる みんなでつかう

7月13日(金)  
13時~16時  
雨天@UDCK

6グループに分かれ、実際のみちでの使用を考えた家具をそれぞれのグループで製作し、使ってみた。その後、製作したものに込めた思いを発表し合い、実際のみちでどのように使いたいか、アイディアを出し合った。高校生(5名)、柏の葉高校・吉田教頭先生、住民の方(1名)、桜並木協議会会員の方々(3名)と、多様な方々に参加していただいた。



2人掛け椅子(3班)、机(1班)、1人掛け椅子(2班)をそれぞれ製作した。高校生・住民・大学生の共同の可能性は、運営案の中で重要な点である。



子どもから大人までが集う場所、友達と談笑する場所、そんな場所を演出する家具をそれぞれが製作した。



### 4. 各班の家具、最後の発表でイメージしたもの



東大側で、色々な世代が集って高校側の桜を眺める楽しい花見(机班)。



3人でも色々な風に座れるL字型の椅子で談笑(2人掛け椅子班A)。



2人で座ってお話しできる(2人掛け椅子班C)。



(左)  
名づけて「きのこいす」  
その意味は、き(みが)  
の(んびり)こ(ころ休  
まる)椅子!(1人掛け  
椅子班B)。

(右)  
最後に参加者全員が集  
まって、記念撮影。実  
践することで、考  
えるだけでは理解する  
ことのできない貴重経験  
を得ることができました。  
参加してくださった皆  
さん、どうもありがとうございました。



# グループDの感想

## STUDENT

石田 拓己(東京大学)

今回のスタジオの面白さは、都市に対してというよりも、郊外と言える柏の葉が対象敷地とされている事ではないかと思う。始めは都市部のように強いコンテクストが感じられないとか、そもそも問題設定できるほどの状況が存在するのか?といった印象があった。しかし、柏の葉では都市部のように際立ってはいない要素を丹念に読み取っていかなければ問題設定すらできないことにすぐに気づいた。この課題をまとめあげたことで得られた物は想像以上に大きいのかなと思う。

矢原 有理(東京大学)

提案がワークショップを開催できる程現実味を帯び、実際の課題にまで踏み込んで考えることが出来たことや住民や高校生を巻き込むことが出来たことによって期待以上に実り多い演習となった。それは各々が個性を発揮できお互いを高めあえるメンバーと、突っ走りがちな議論に対して冷静な助言を与えて下さった先生方のおかげであり、そのような環境に恵まれて感謝している。個人的には依然課題も残るが自分たちの一連の活動が地域に何らかの布石を投じるものとなればと願いつつ、今後の柏の葉地域の発展に期待したい。

## STAFF

宮脇 勝(千葉大学准教授)

今年の都市スタジオは、より具体的に実効性のあるテーマで進められ、都市系と建築系のコラボレーションが試されました。グループDは、異なる管理者の敷地境界を柔軟にする、ハンドメイドの装置のは、「柵」というのは面白い目の付け所であった。この班は建築系出身の学生が多く、ある意味、建築コンペ的な感は否めないが、逆に、「建築的」に境界のあり方に挑んだ結果、今までありそうでなかった提案になってしまった。中間講評会の後、実際に制作してみたいということで、よりました。中間講評会の後、実際に制作してみたが、幸い千葉大や柏の葉高リアルな管理運営の問題に直面しましたが、幸い千葉大や柏の葉高校の多くの方々の温かい理解があり、2回のワークショップを開催した。参加して頂いた住民の方々も、近くにある高校や大学と話し合った。参加して頂いた住民の方々も、近くにある高校や大学と話し合った。参加して頂いた住民の方々も、近くにある高校や大学と話し合った。こうしたチームによる学生達の積極的な活躍に期待しています。

小野寺 史明(東京大学)

3ヶ月にわたるグループ作業という未知の領域だったので、とても大変なことが多く、何度も挫けそうになりました。でも、最後までなんとか続けられてよかったです。

やっと、最後って言う事ができて心底安心しています。お疲れ様でした♪

石野 正規(東京大学)

良かったことがある反面反省点も多く見つかる授業でした。良かったこととしては、グループとして意見がぶつかり合いながらも、良いものを創りたいというモチベーションの高さからひとつにまとまった作品としてよいものが出たということです。反省点としては、プレゼンテーションの仕方、すなはち伝えるという最も難しいことに全力を注げなかつたことです。支えてくれた先生方、そして仲間に感謝します。

竹川 征(東京理科大学)

私が本演習に参加して感じたことが出来た一番の美德は「仲間の力」である。それを意識せざるを得ない時が突然、我々の前に現れた。メンバー皆、手と頭を模索しながらの暗黙下であったが、共有していました。7人で一つの案を進めていく事は、意見の衝突が大半だったようにも思います。でも、心中では、何度も「このメンバーで良かった。」と思っていました。このメンバーだったので、最後まで続けられました。また、意匠の研究をしている私にとって、都市計画という他分野への参加は、視野が広がる、大変勉強となる場でした。最後に、Dグループ7人を最後まで見捨てずに支えてくださった、宮脇先生、三牧先生。多大なるご迷惑をおかけしました。本当にありがとうございました。

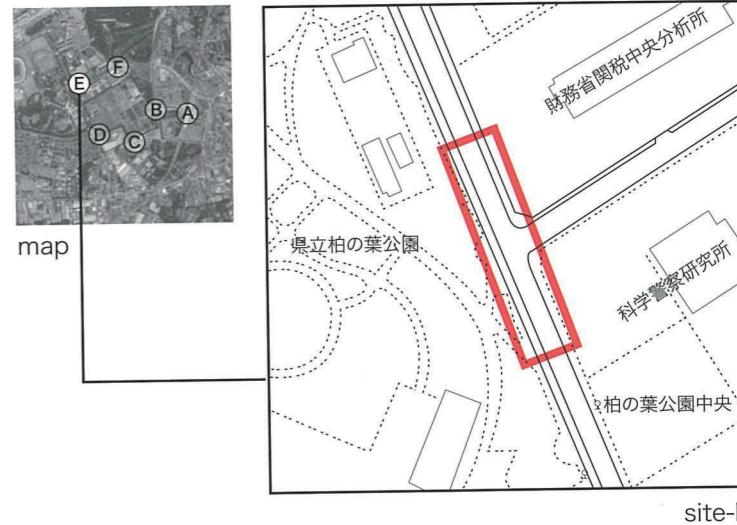
三牧 浩也(日本都市総合研究所)

個性的な提案があふれる今期のスタジオの中でも、特に「公共空間」いうものに真っ向勝負を挑んだのがグループDの提案である。公共空間の提案にあたり、広場や箱モノ施設ではなく、「敷地境界」共空間の提案は、意外と面白い目の付け所であった。この班は建築系出身の「みち」の提案であると言うかもしれないが、これはやはり「境界」の提案である。この提案は様々な可能性を持っている。柏の葉のまちで何となく感じる寂しさの要因とは何か?大規模敷地沿いに連続する長い柵や壁はその一つだろう。阻害する境界から、活動が混ざり合い相互通作用が起こる境界へ。責任を区分ける境界から、コモンスペースとなる境界へ。学生達が持った種が、まさに実りをもたらすことを期待している。

# サイクリングプロジェクト

## -自転車シティ柏の葉-

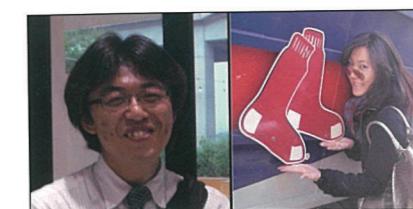
E



## STUDENT



## STAFF

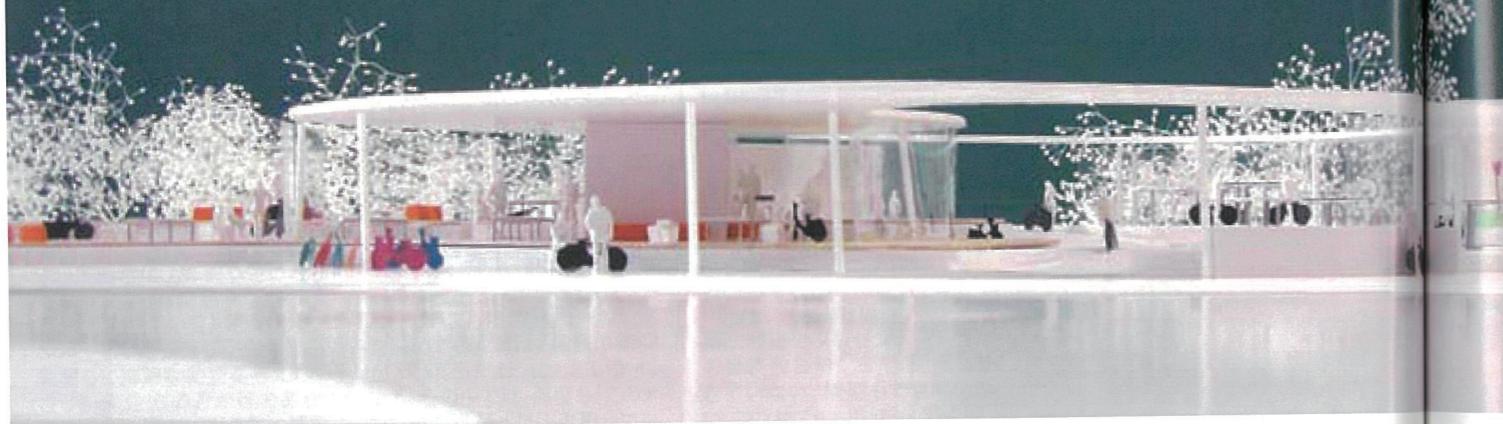


野原 隼(東京大学) 野上 麻(UG都市建築)

# サイくるりプロジェクト

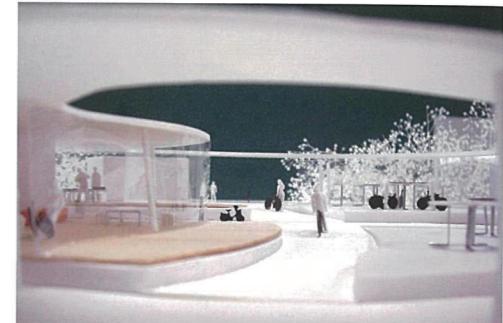
—自転車シティ柏の葉—

「サイくるり」スタイル  
自転車を利用した気軽で快適な新しい柏の葉の都市空間



「サイくるり」とは…

「サイくるり」とは自転車というツールを使って、気軽に楽しくまちを“くるり”と移動できる仕組みのことを指す。その中には自転車に乗ったまま使用できる施設や便利なレンタサイクルシステム、自転車道のネットワークなどが含まれている。私たちはこのサイくるりを柏の葉全体に広げ、展開していく。



エントランス



「公園くるり」模型写真

## 1. 対象地と提案

私たちグループEの提案は、柏の葉を気軽にくるりと回れる楽しい自転車シティにしようというものである。その起点となる施設を対象地である柏の葉公園前のT字路に面した敷地に、自転車でも気軽に立ち寄れる新しい公共空間として提案した。さらに、そこから柏の葉全体へと展開させるために、3種類の施設と自転車専用道路の計画・設計を行った。

## 2. 目標の設定

柏の葉は駅から施設、あるいは施設間の距離が長く、徒歩のみでの移動は困難である。またバスの本数は少なく地形が平坦であることからも、自転車の利用が便利なまちであるといえる。さらに、二酸化炭素を排出せず環境負荷が小さい自転車は、今後のまちの発展を考えた上でも重要な移動手段となるだろう。自転車を利用して気軽に回れるまちを実現させること。それが私たちの目標である。まちの中には自転車利用が楽しくなるような仕掛けをたくさん配置していく。それらは自転車利用者にとって便利になるだけでなく、まちのイメージを統一し、一体感のあるまちを実現させる。

## 3. 企画

自転車利用を便利で楽しくするために、道から自転車で気軽に立ち寄ることができ、自転車と共に楽しい時間を過ごせる3種類（大くるり、中くるり、小くるり）の施設をまち全体に配置していくと同時に自転車専用道を計画し、より快適で便利な自転車利用ができる仕組みを整えていく。また自転車専用道だけでなく、自転車小路（少し遠回りになるが気持ちはよく走れる穴場的な自転車みち）や自転車マイルート（より生活に近いところで各人の意識の中に好き好きに現れる自転車みち）も考慮し、この三者が敷地に合わせて絡み合うことで自転車ルートがネットワーク化されていく。これらは楽しさだけでなく、自転車利用のための機能性も実現していく。

## 4. 設計

柏の葉公園前のT字路に面した敷地に建ち、柏の葉に暮らす人々が自転車と共に時を過ごす施設として「公園くるり」を設計した。対象地の課題としては、駅からやや距離があること、駅からの動線が突き当たる重要な場所であるにも関わらず人気がなく、特に夜は暗くて人気もなく危険であるということ。公園前に広々とした歩道空間があるが公園と歩道とは完全に分断されていることが挙げられた。

この施設の特徴は、公園と道を繋ぎ、道から自転車

のまま入れる施設であること、公園の新たな入り口となること、そして、自転車を楽しめること（住民の趣味の場としての利用）である。施設は自転車スケールで設計され、地形に沿って内部を自転車道が縦横に抜けているため入りやすく、機能はその自転車道で分けられている。具体的には修理工房、レンタサイクル場、キオスク、スタジオ（自転車工房）、自転車展示場、サイクルカフェ、サイクルパーク（ユニークな自転車が借りられる）などで構成され、サイクルパークからは柏の葉公園内へと展開していく仕組みになっている。キオスクやカフェは自転車に乗ったままの利用が可能で、これらは新しい自転車スタイルの提案である。また、趣味の場としてのスタジオを夜も使用することで、この場所に人の気配を持たせるなど、防犯性にも考慮している。

## 5. 展開

公園くるりだけではまだ、柏の葉全体が自転車で気軽に楽しく利用できるまちにはなっているとは言えない。そこで、柏の葉全体に施設を展開させることを考えた。具体的に大くるり、中くるり、小くるりの3つのくるり（自転車施設）と自転車専用道を提案する。



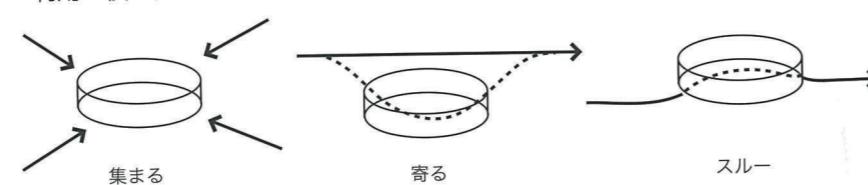
グループEの敷地

## サイくるり施設

### ・サイくるり施設の特徴

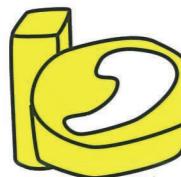
サイくるり施設は、人が目的を持って集まれ、ちょっと立ち寄ることもでき、通り抜けもできるような、より多くの人を取り込む施設である。(右図)

利用の模式図



### ・3つのくるり

サイくるり施設には場所や規模によって次の3つのタイプがある。



大くるり

(1) 大くるり：大くるりは多くの人々が利用する場所、もしくは、人が集まつくる場所に設置される規模の大きな施設である。駐輪場やレンタサイクルのための施設、インフォメーションセンターだけでなく、自転車を利用しながら気軽に憩えるサイクルカフェや、自転車の修理やカスタマイズのできる工房などが集まっている。今回は公園前くるりと駅前くるりを設計した。



中くるり

(2) 中くるり：中くるりは柏の葉の主要施設や、魅力的な地域資源のある場所に設置される規模の小さい施設である。地域内で自由に乗り捨てのできるレンタサイクル施設（レンタサイくるり）、気軽に休んだりできる自転車キオスクなどが自転車ネットワークの中に設置される。今回はレンタサイくるりを設計した。

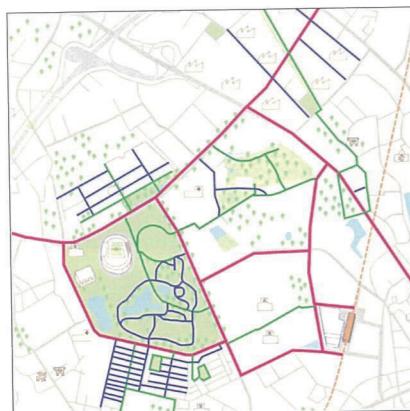


小くるり

(3) 小くるり：小くるりはどこでも気軽に乗り降り、駐輪できるための装置である。具体的にはベンチなどにも使用できる駐輪スタンドのこと、簡易な駐輪場となる。駐輪スタンドはみち上に自由に増殖していく。置く場所は特に限定せず、小さなみちや畦道上にも配置されることで、より気軽に自転車を利用できる柏の葉のまちが展開していく。

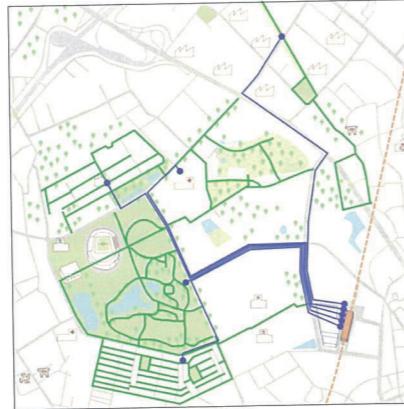
## サイくるリンク

サイくるリンクは自転車みちのネットワークのことを指す。自転車みちは①自転車専用道（専用レーンが整備され主要施設間を機能的に結ぶ自転車みち）②自転車小路（少し遠回りになるが気持ちよく走れる穴場的な自転車みち）③自転車マイルート（より生活に近いところで各人の意識の中に好き好きに現れる自転車みち）の三つの種類がある。この三者が敷地に合わせて絡み合うことで自転車ルートがネットワーク化される。



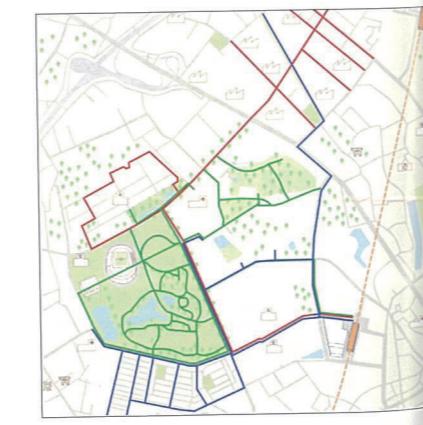
自転車利用者の動線の分類

自転車利用者は住民（青線）、在学在勤者（赤線）、来街者（緑線）の三者に分類できる。



みちの性質の分類

施設間を最短距離で結ぶ機能的なみち（青線）と、走って心地よい楽しいみち（緑線）を選んだ。



サイくるリンク

左図元に自転車専用道（赤線）、自転車小路（緑線）、自転車マイルート（青線）を配置した。

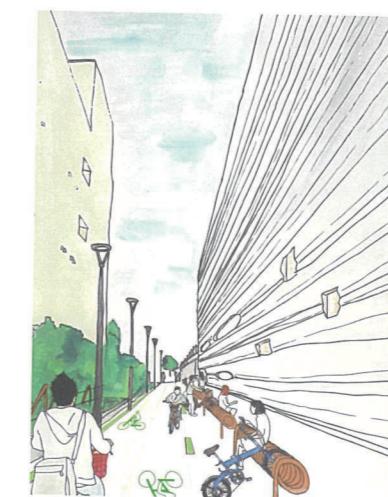
## サイくるりMAP

### ・自転車専用道

自転車専用道は、十分な道路幅員を前提に、自転車利用者（通学・通勤者など）の導線を考慮して整備していく。また、専用道は大・中・小くるりを繋ぐ役割もある。自転車と他交通との棲み分けは、歩行者及び自転車利用者の安全を確保するもので、こうして柏の葉の自転車移動がより気軽なものとなっていく。



1



2



3



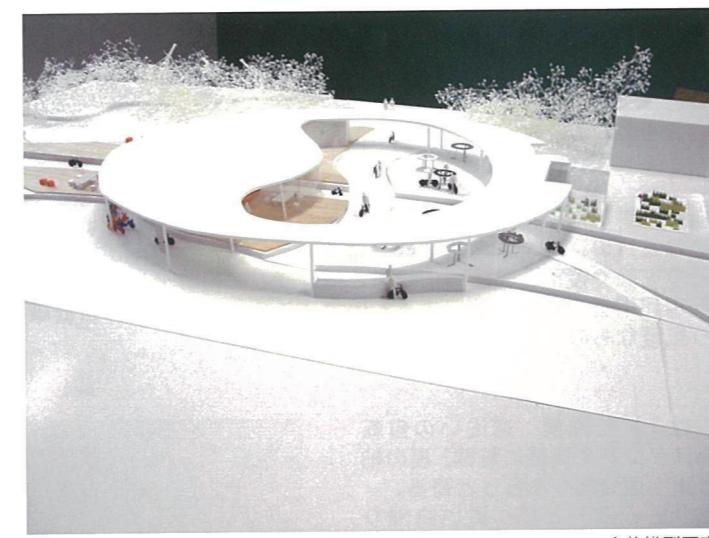
自転車専用道（赤線）とサイくるり施設



## 公園くるり

### E地点（公園前敷地）の分析・問題点

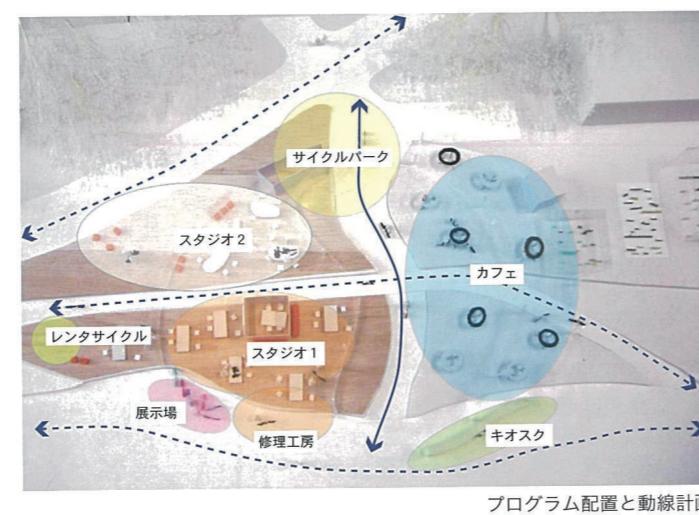
- 駅からの動線が突き当たる重要な場所であるにも関わらず人気がなく、特に夜は暗くて人気もなく、危険である。
- 公園前に広々とした歩道空間があるが、公園と歩道とは完全に分断されている。
- 自転車利用が相対的に多い（右下グラフ）



全体模型写真

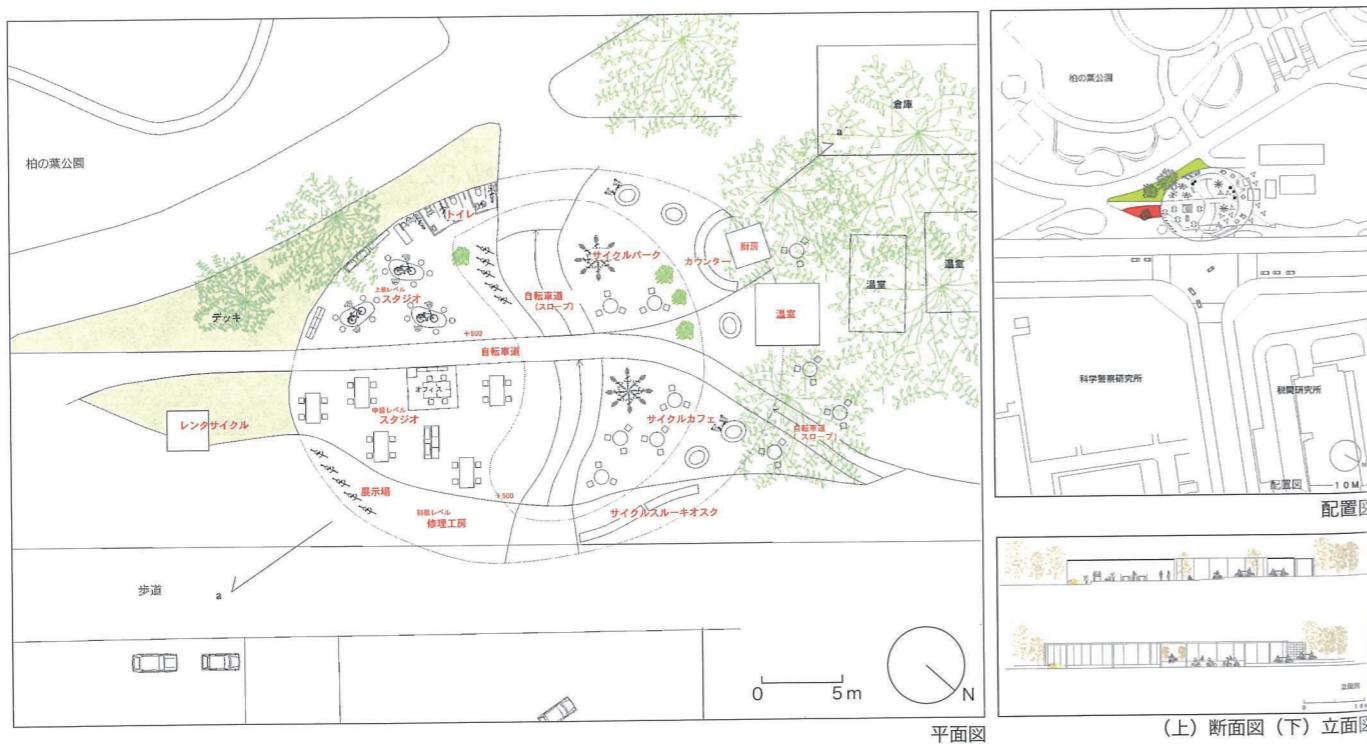
これらを考慮して、設計にあたっては3つのキーワードを用意した。

- ①公園との関係性…公園の敷地と道路との境界を無くし、新たな公園の玄関口に。動線の追加。
- ②にぎわい…人のいる、夜も安全な場所に。
- ③自転車…自転車への愛着を育む場に。



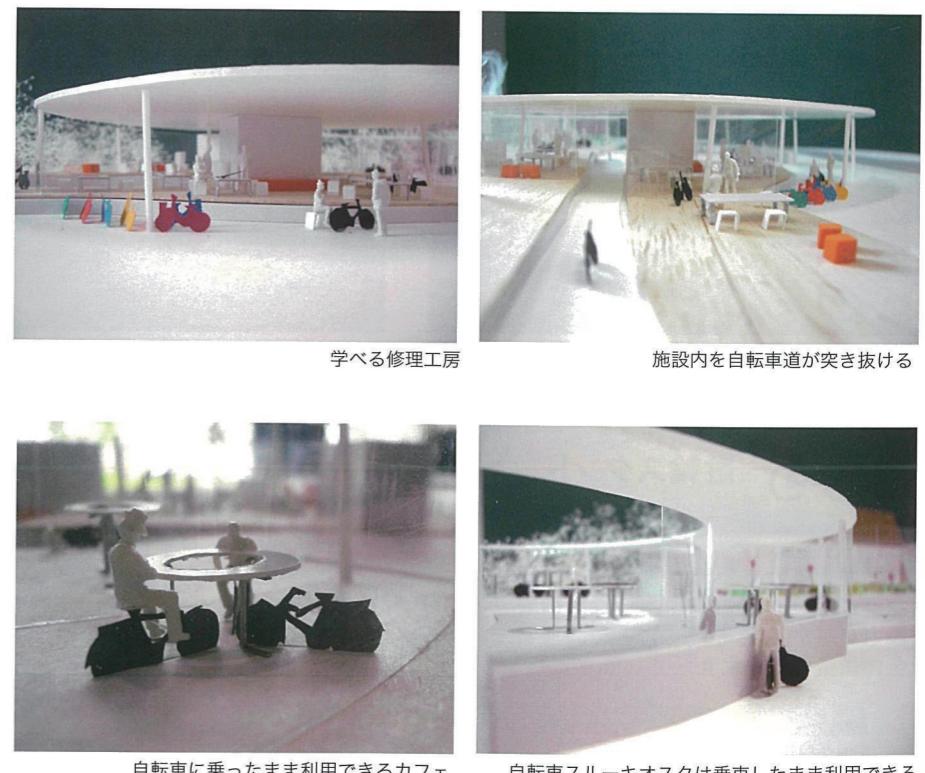
### 動線計画（右図）

①柏の葉公園への通り抜け動線（実線）②自転車道（歩道）に水平な通り抜け動線（破線）。(①、②はいずれも施設内移動の動線ともなっている) 新たな柏の葉公園のエントランスになるとともに、通り抜けの自転車を取り込むことで、この公園くるりを目的として来ていない人々をも巻き込む。



### プログラム

柏の葉の自転車利用者にとって、自転車ライフが楽しくなるような仕掛けとして、趣味の場として自転車のカスタマイズなどができるスタジオ（自転車工房）など長時間滞在でき、自転車利用の可能性を広げる仕組みを考えた。また、趣味の場としてのスタジオを夜も使用することで、この場所に人の気配を持たせるなど、防犯性にも考慮した。さらに、公園という場所性を生かしサイクルパークから公園内へと展開していく仕組みになっている。





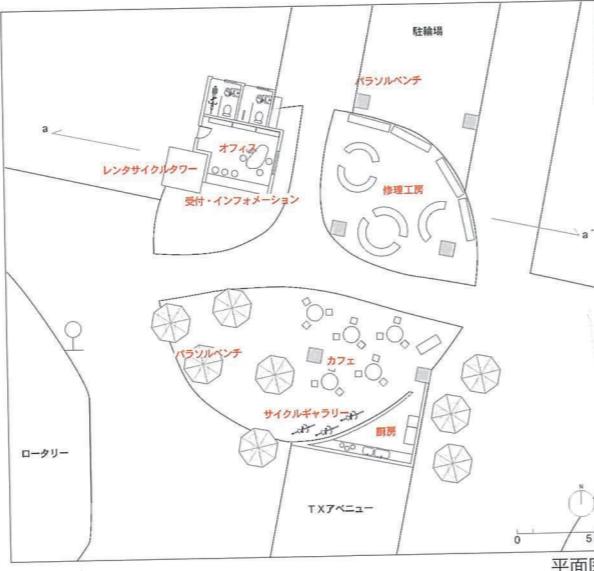
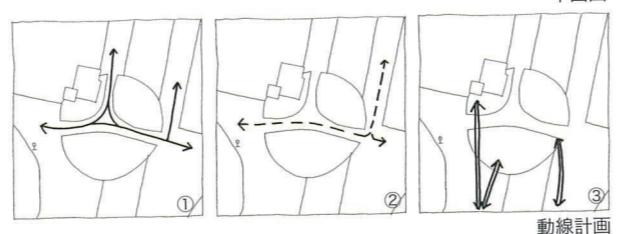
## 駅前くるり

駅前くるりは、敷地が駅前（柏の葉キャンパス）にある点と鉄道の高架下（駐輪場の一部）を利用している点に特徴がある。利用者と必要なものを考え、駅前くるりには以下の機能を選んだ。

- ①修理場・・・（柏の葉キャンパス駅を利用する）住民、在学在勤者
- ②レンタサイクル・・・在学・在勤者、来街者（観光など）
- ③情報・・・来街者（観光など）
- ④カフェ・・・①～③を利用する全ての人、駅利用者

### 動線計画

①駐輪のための自転車動線、②通り抜けの動線、③歩行者（駅から）の動線を考えた。様々な動線を重ねて直接取り込むことで、より多くの人々を巻き込む空間になる。自転車のままスルーできる施設はサイくるり全体のコンセプトでもある。



駅前のシンボル「レンタサイクルタワー」では好きな自転車を選べる



修理工房とサイクルギャラリー（奥）



西側ロータリーからの様子。



## 駐輪スタンド

ベンチにもなる駐輪スタンド。簡単な駐輪場となる。同じようなものをみちに連続させて置くことで、まち全体に統一感をもたらす。



## レンタサイくるり

まちを通る人の自転車に対する意識を高めることができる。レンタサイくるりは中程度の規模を持つつまちに点在する施設である。

自転車シティに分布させる機能として以下の3つを選んだ。

- ①レンタサイクル・・・乗り捨て可能レンタサイクルシステム。ステーションがまちに点在しているので思いついで近くのレンタサイくるりから容易にレンタサイクルを利用できる。
- ②サイクルスルーキオスク・・・通常のキオスクで売っている飲食物や雑誌などの他に自転車グッズを豊富に取り揃えている。
- ③ベンチ・・・自転車に乗って疲れたときは気軽にいっぷくできる。



全体模型写真

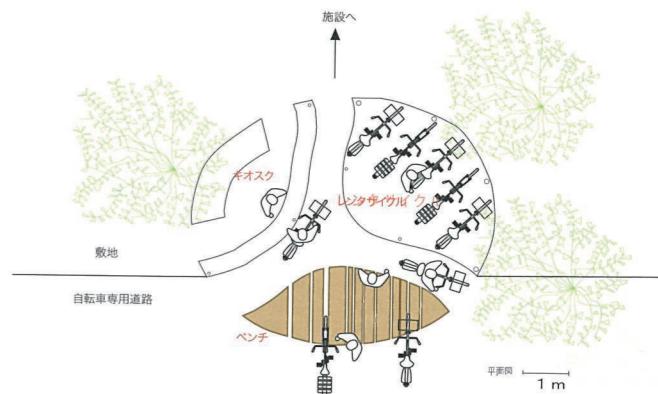
### 動線計画

主に以下の2つの動きを考えた

- ①自転車道からピットインしそのまま自転車道に戻る動線
- ②施設に入り出す際にレンタサイくるりを横切る動線

### 配置計画

レンタサイくるりは柏の葉の重要施設（工業団地、東京大学、柏の葉公園など）の近くに位置し、レンタサイクルユーザーにとって利用しやすいよう配置する。重要施設を利用する人がみなレンタサイくるりを横切る仕掛けである。また、レンタサイくるりは自転車専用道路沿いに点在する施設であり、車でいうところのサービスエリアに相当する。



平面図



## 自転車の魅力を見つけよう

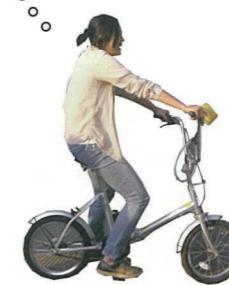
～簡単カスタマイズで楽しい自転車ライフ～



自転車を利用してまちをまわる。それだけではなく、自分の自転車をカッコよくカスタマイズしてみよう。自分の自転車を他の人もカッコいいと思ってくれたら、最高！



ただし本格的にカスタマイズするのはとても大変。それでも自転車は楽しみたい。そんなあなたのため、自転車グッズも用意。自分が身につけるものがあれば、自転車につけるものも。どれか一つ選ぶのだけではなく、全部つけるのもありかも！？



カフェでの自転車展示



駅前の様子

# グループEの感想

## STUDENT

上田 恵莉(東京大学)

これまで都市に対しての提案には取り組んだことがなかったので、まずイメージや構想を頭に描くことが難しかったですが、建築単体に逃げずに最後のネットワーク(システム?)までなんとか形になり良かったと思います。7人で(しかも違う分野の人たちの集まりで)1つの課題に取り組むというのは、集まるところから大変でしたが、1晩徹夜するごとに一体感のようなものが生まれ、育まれていったのが印象的でした。

上猶 優美(東京大学)

スチボ、プラ版、55、77、三iske、りやんて…スタジオが始まった時はさっぱりだった言葉を今では私も使っている。野原さん対策と称して毎木曜に繰り返された恐怖の徹夜。カッターの刃の代え方から模型の作り方、イラレの使い方と何から何まで教えてくれた個性派ぞろいのE班の皆。自転車に乗ったままお菓子を食べる実験をした日や、30分サイクル話し合いを繰りひろげた日が懐かしい。柏の葉公園を見る度にこのスタジオのことを思い出すだろう。

亀長 尚尋(東京大学)

公園前の歩道沿いの小さな空間から、柏の葉という「まち」全体に視点を広げての大きな提案。柏の葉という街と、かれこれ数年の付き合いをしているかのような錯覚に襲われた時、なんだか心地良い気分がしました。改めて都市を大局的に見る難しさを知りましたが、不完全ながらも一つの形になったことには、一定の満足をしています。最後に、北沢先生、野原さん、野上さんをはじめとする先生方の熱意ある指導に感謝申し上げます。

平川 聰(東京理科大学)

このスタジオの期間は、グループワークの楽しさや都市に対して提案することの喜びを学ぶとともに、それらの難しさに苦悩する日々でした。そして生まれた「サイくるり」案は、自分たちが自信を持って送り出す提案です。また、まだまだ考える余地のたくさんある提案ですので、これからも考えていきたい提案です。最後に、大変だけれども後輩たちもこのスタジオは是非とってください。大きな糧になると思います。

松田 耕(東京大学)

まとめることの難しさが分かりました。ひとつは7人の人間をひとつの提案にまとめる難しさです。各人の微妙な好みのずれを味わうのは楽しいことでしたが、そのずれを調整するのは容易ではありませんでした。もうひとつはプレゼンテーションをまとめる難しさです。膨大な敷地条件や細かいアイデアの数々。それらの取捨選択は複雑困難を極めました。前者はうまくいきましたが、後者に関しては多くの課題を残したと思っています。

山室 裕之(千葉大学)

「都市スタジオ」という名前から、都市・建築の学生が集まり、専門的な知識を磨き、まちを活性化させる提案をする、というのが先入観としてありました。様々なバックグラウンドを持つ学生が集まり、フレキシブルに提案を出せたことが、自分にとっての財産になりました。今後もこのスタジオが、様々な視点から考えられたまちづくりの提案を発信することが出来たら、それはなんて素晴らしいことなんだろう、と思います。

米谷 法子(東京大学)

今回のスタジオは、今まであまり関わることのなかった分野の人たちと一緒にやることができ、楽しかったです。最初は、使う資材の用語とかも分からなくてパカーンとしてたけど、最後の方は、イラレも微妙に?使えるようになつたし、模型作りにはまったく。。。まあ、野原さん対策をやったり、みんなで徹夜した後の、団結力みたいなものが一番印象的でしたwww

## STAFF

野原 順(東京大学助教)

とにかくDynamic(ダイナミック)な課題でした。当初は、課題の最終的なゴールも明確には示されず、少なからずとまどった受講者もいるでしょう。講師としても、教えるというよりはともに考えるというスタンスで望み、その場のアイデアからゴールを構築してゆく過程はスリリングでした。しかし、これこそ、現実の都市へのアプローチそのものだと思います。複雑で捉えどころのない都市に対して、ダイナミズムの中に隠された本質・構造・ビジョンを読み込みながらも、現在から次の展開を戦略的に編みこんでゆく。そういう意味で、今回のスタジオは、単にアイデア的に面白いだけの提案に終わらず、サイトの問題だけを解くのではなく、かといって成果の見えにくいシステム提案だけでもない、非常に実践的であり、かつレベルの高いスタジオであったと思います。柏の葉のまちにこれから必要となるのは、新しい都市空間形成のアイデアを埋め込みながらも、これらを統合的にデザインし、どこか一体的なまちの空気を感じられる空間とすること、そのための「起点」として各提案が現実に向かうことを期待しています。

野上 麻(UG都市建築)

まだ発展途上の街を舞台に、「何を」「誰のために」「どんな風に」「どうして」を考えてデザインするのは、楽しい反面、決して容易ではありません。そんな中、皆さんの提案は既存のコンテンツと、発展の可能性が上手に融合されていたと思います。人数が多くだったので、大変なこともあったでしょうが、多くのアイディアの中から取捨選択し、質の高さを求めてデザインが出来たのではないか?許されるのであれば、もっと時間をかけて仕上げ、ぜひ実現したい作品です。現在の柏の葉への問題提起などをしていくと、実現性と説得力はぐっと高まります。今後は、利権や法律などの現実に囚われる事なく、大人達が忘れかけている「若さゆえのとんでもない提案!」をしていってください。何年後に、「サイくるり」で、子供達が無邪気に自転車をいじる姿が見られる事を願っています。お疲れ様でした。

# F

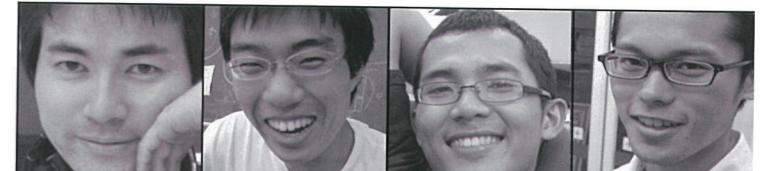
## まちなか小学校

-街にとけこむ分散型小学校-



site-F

## STUDENT



平林 直(東京大学) 鎌形 敬人(東京大学) パンノイ・ナッタポン(東京大学) 田村 康一郎(東京大学)

## STAFF



伊藤 香織  
(東京理科大学)

中島 直人(東京大学)

# まちなか小学校

-街にとけこむ分散型小学校-



## 1. 対象地と課題

対象地は、柏の葉キャンパス駅から北西約500mの更地の一角に位置します。ここを含む周囲一体には区画整理が進行中で、F地の北200mには小学校も計画されています。我々グループFの提案は、対象地を含む区画整理地域内に、地域のみんなが利用できる小学校を作る、というものです。

## 2. 目標の設定

次の二つの問題意識を持って、新しい小学校の提案を行いました。一つ目は、近年の小学校が安全確保のために街に対して閉じている点。二つ目は、区画整理によって出来た新しい住宅地は小綺麗ですが画一的で人の気配が感じられない点です。これらの問題意識のもとに我々は、小学校を分散させて住宅地に挿入していくことで、街とつながった小学校を実現し、さらには多様性のある住宅地を形成することを目指します。

## 3. 企画

「まちに開かれる小学校」だけではなく、「まちと溶け込む小学校」を提案します。小学校と住宅地が混ざり合う空間を実現するために「分散型小学校」という形を選びました。「分散型小学校」とは小学校の教室や図書室などの学校施設が小さく分散し、まちの中に配置される小学校のことです。4つのコアに分かれて、各コアにはそれぞれの土地の特徴や柏の葉のライフスタイルをテーマとして計画します。「まち」の中に「小学校」が混在する様子から、「まちなか小学校」と名づけました。

## 4. 設計

分散型小学校の4つのコアはインターナショナル、アート、エコ、スポーツという特色を持ち、それぞれのコアでコアのテーマに関連する授業が展開されます。小学生は各コアを移動し、自分が学びたいことに合う場所で学べます。自然科学は自然に囲まれる森の中の教室で、芸術は市民のアトリエが集合している場所で、本物と触れ合いながら学習することができます。また、小学校の施設を住民が使える公共空間に開放することで、小学校と地域の交流を図ると同時に、柏の葉のライフスタイルをサポートします。例えば、インターナショナルコアでは市民に開かれる国際図書室や国際交流ができる広場を提供します。またスポーツコアでは市民が自由に使えるグラウンドや体育館を提供します。これによって、インターナショナルコアの周りには外国人がたくさん住む国際的な住宅地、スポーツコアの周りには健康や運動を楽しむ住宅地が形成されるというようになります。

## 5. 展開

全体配置図  
分散型小学校は住宅地開発に合わせて作って行きます。まず、147街区と148街区が完成した後、F地を含む駅の北西地域が開発されると、それに合わせて、インターナショナルコアを作成します。このとき小学校に必要な施設、たとえば調理室や音楽室などをF地に作ります。しかし、対象地の北側の開発が進んで、それに合わせて分散型小学校の各コアが作られると、F地にある施設の機能を各コアのテーマに沿って再配します。すべてのコアが出来上がると分散型小学校は完成しますが、最終的にF地は住宅地として開発します。



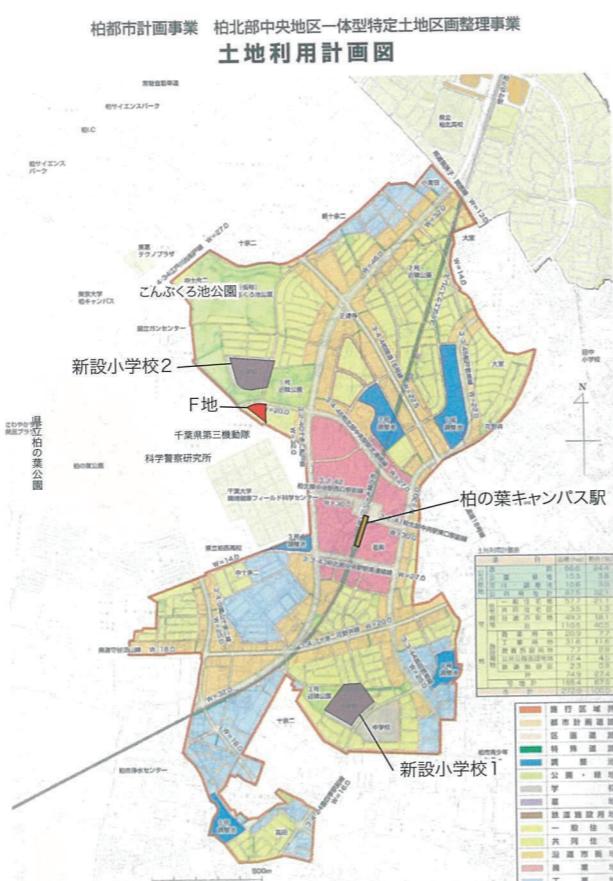
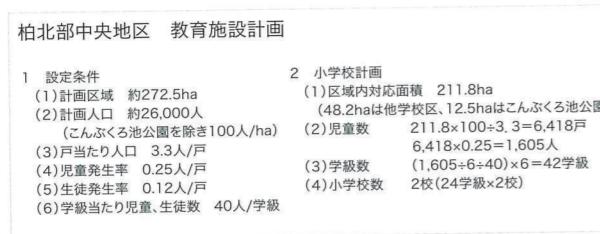
## F地の現況

F地は柏の葉キャンパス駅から北西へ約500mに位置する土地である。F地から道路を挟んだ北側にはこんぶくろ池公園の森が広がる。東側はF地とは別の民間会社が所有する開発予定地で造成が進んでいる。西側には、千葉県警第三機動隊、科学警察研究所などがあり、さらに西側には県立柏の葉公園が広がる。柏の葉地域では区画整理が進行中である。F地とその東側の街区では集合住宅、北側の地域では戸建住宅による住宅地が形成されると考えられる。

## 小学校計画について

柏の葉地域には、右図のように2校の小学校計画がある。ともに柏の葉の新規開発に対応するものであるが、南側の小学校予定地周辺は現状すでに小学校不便地域となっているため、南側の小学校が先に開校する予定である。北側の小学校はF地の北約200mに位置し、こんぶくろ池公園と接するように位置する。このため、その境界部はこんぶくろ池公園の森を取り込んだようなものとすることが考えられている。

小学校計画の具体的な数値は下表の通りであるが、以下我々の提案において、学級数24・小学校面積2.5haについてはこれをそのまま用いた。



## こんぶくろ池公園について

こんぶくろ池公園の整備計画は、左図の通りである。北西および南東地域を大きく保全し、さらにそれらをつなぐように南北側を帯状に保全する計画である。保全レベルについては、一部を除いてもともと保全レベルの高いレベル3が設定されている。レベル3とは、「湿生環境や貴重種の保全・育成に影響のない適正な人数の立ち入りを認め、決められた出入口で入園者の管理を行う。夜間は完全閉鎖とする(出入口を閉鎖する。)」というものである。

道路により分断される所はトンネルや橋によって立体的につなげることが計画されており、動物の移動のためのトンネルなどを設け生態系にも配慮する予定である。

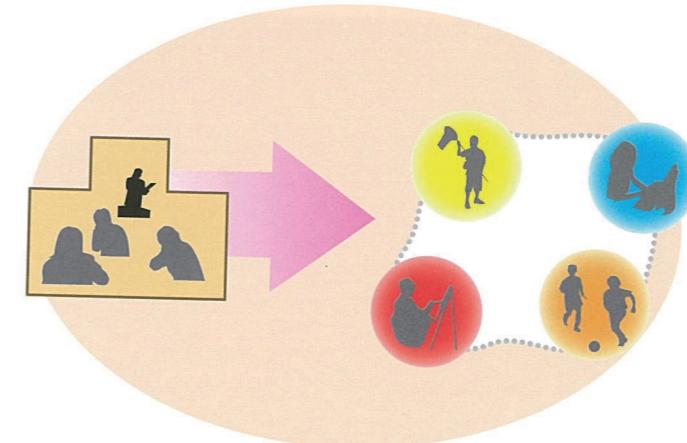
## 現況への問題意識

- ① 小奇麗だが単調な住宅地  
区画整理により形成された住宅地は、きれいに整形され、デザインの揃った戸建て住宅が並ぶ。このような住宅地は、小奇麗である反面、住宅地としてとても静かで閉じており、生活が外に染み出してこない。
  - ② 街に対して閉じた小学校  
近年の小学校は、まちに対して閉じることで安全を確保しており、周囲はフェンスで覆われ門は閉じられ、街とのつながりが全くない。また、街に小学校があることを実感できる住民も小学校周辺の一部の住民に限られており、小学校から離れた住民は小学校を全く意識しない生活となる。
- 以上をもとに我々は、小学校を分散させて住宅地に挿入していくことで、まちとつながった実現し、住宅地を面白くしていくことを考えていく。

## 柏の葉に「まちなか小学校」をつくろう

### コンセプト

#### コンセプト1 「教わる」⇒「学ぶ」



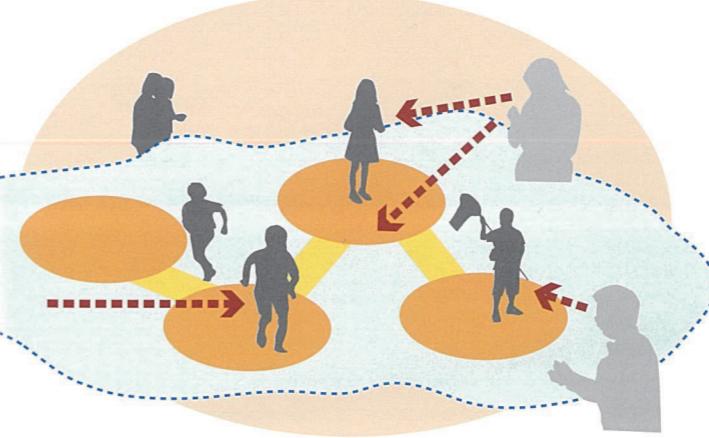
まちなか小学校は、子どもたちが単に勉強を「教わる」のではなく、主体的に「学ぶ」場を提供する。従来型の小学校は、教科を教わるだけの閉じた場であったが、地域に開いた分散型小学校では、外の社会で得られる学びが積極的に取り込まれている。

#### コンセプト2 Class Room ⇒ Civic Room



まちなか小学校では、教室は小学生だけでなく、地域住民も利用できる開かれた空間である。授業のない時間は活用されていなかった教室を、地域住民による活動の場として開くことで、周辺の住宅地に活気と潤いを与える。分散型小学校は、新しい地域のライフスタイル発信の場となる。

#### コンセプト3 地域の子は地域で見守る

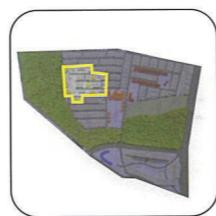


まちなか小学校は、安全を学校任せにせず、「地域の子は地域で見守る」として小学生の安全を確保する。一箇所に閉じていた小学校を地域に開くことで、地域住民の目が子どもたちに行き届くようにする。相互の触れ合いが増え、地域住民も教育に参加するようになる。

## エココア

理科室  
家庭科室 ➔ 自然観察  
オーブンキッチン

このコアは緑地保全地区となり合っているため、子供たちの「自然を学ぶ場」として設計される一方住民にも利用できる森を提供する。ここでは森の中の教室以外に、自然観察塔や実験室も設置する。メインパスは住宅の前に通すことで、安全性を確保する。



## インターナショナル コア

英語教室 ➔ インターナショナル・スクール

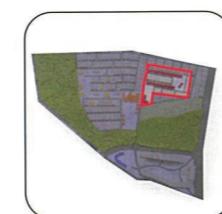
「国際」をコンセプトとして外国人との交流をテーマにしたコアである。ここでは「インターナショナルスクール」と「小学校」は囲み型集合住宅の中庭に併設されている。国際図書室や国際交流広場を設置するとともに夕方や休日に学校は国際カルチャースクールと化する。



## アートコア

芸術教室 ➔ アトリエ  
スタジオ

ここでは住民が利用できる「個人アトリエ」と子供の学ぶ場所が混合していることによって、子供たちが実際の製作活動に直接関わるカリキュラムができる。メインパスは教室の前の廊下に通るように設計しているが、緑化された屋上もこどもたちの移動ルートにもなる。混合していることで、子供たちは実際の製作活動を身近で体験できる。



## スポーツコア

運動場  
体育館 ➔ スポーツ広場  
青空文庫

市民が自由に使えるのはグラウンドだけではなく、壁で仕切らない体育館や屋上空間も地域に開いている。小学校のグラウンドが市民のアクティビティの場にもなる。また市民の視線が行き届くことでコア全体やメインパスの安全性が確保される。



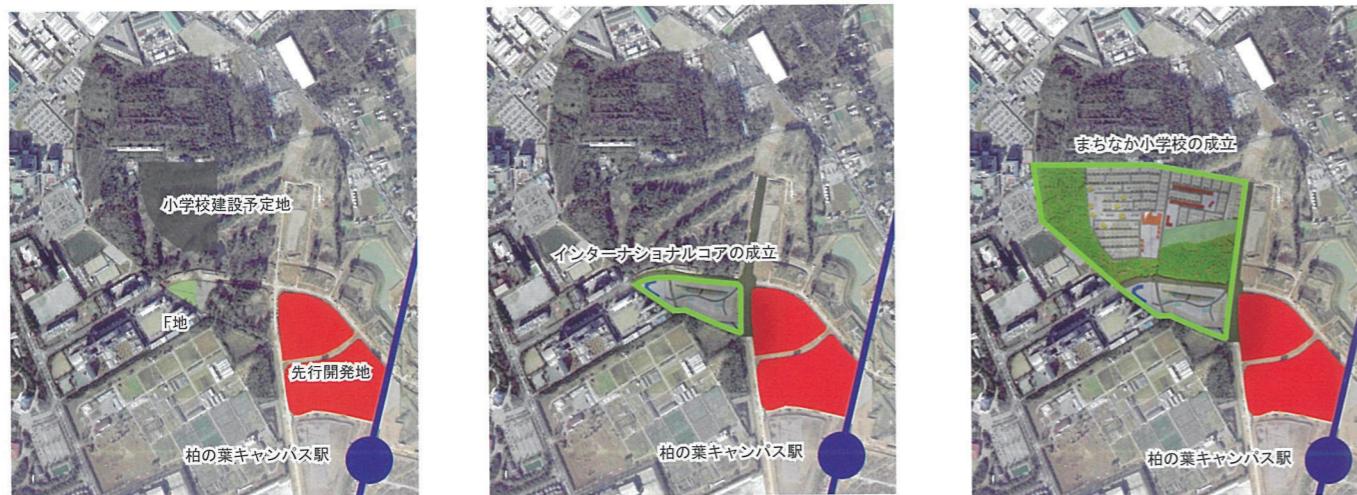
## フロンティアコア(F-コア)



フロンティアコア(以下F-コア)はインターナショナルコアの小学校と同時に作り、分散型小学校が完成するまでの小学校に必要な施設や機能、たとえば音楽室、図工室などの特別教科室、または体育の授業に使うグラウンドなどを補う場所として設計される。それに加えて、住民に分散型小学校を知って議論してもらう場や市民が寛げられるカフェ広場も設ける。分散型小学校の成立過程とともに、F-コアにあった小学校の機能は各コアのテーマに沿って再配置される。たとえば、図工室はアートコアに、グランドはスポーツコアに配置されるなど。最終的にF-コアにあった施設は市民が使える施設に変わり、F-地自体は住宅地として開発する。

## 分散型小学校の成立過程

分散型小学校は、敷地周辺の開発にあわせて段階的に整備される。これによって、それぞれの時点での地域の児童数に見合った数の教室が提供される。そして開発が進むに連れて、まちに開いている教室が分散しながら順次できあがっていく。



① 現在の計画

F地の北側に、一箇所にまとまった小学校建設予定地が計画されている。また、駅の南側500m先にも小学校の建設が予定されている。

② 3~5年後

まずF地に、分散型小学校の6教室(各学年1クラスずつ)とインターナショナルスクールが開校する。それと同時に、F地の東側の住宅地が開発される。

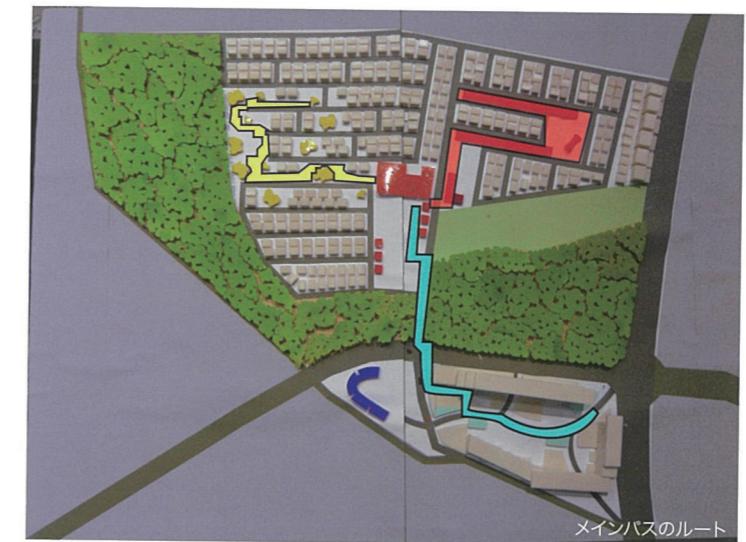
③ 将来

北側の住宅地の開発が進行するのとともに、分散型小学校の各教室も住宅地の中につくられていく。すべての住宅地開発が終わるときに、分散型小学校も完成する。

## カリキュラム



## メインパス



各コアには1~6年生の一クラスずつを設置し、基本的に授業はそれぞれのコアのクラスルームで行われる。授業の内容に応じて各コアに配置されている施設に移動して学習ができる。また週に2~3回の特別授業時間(新たにカリキュラムに取り入れる学習時間)で、小学生たちは自分が学びたいことが実施されるコアまで移動し、そこで学ぶ。

年に2回クラス(コア)替えを行うことで、6年間の小学校生活の中ですべてのコアが体験できる仕組みとする。このように分散型小学校の教育は子供たちに様々な環境でいろいろなことを体験してもらうことを目指す。



小学生の教室移動は、「メインパス」と呼ばれる通路上で行われる。メインパスには職員室等が配置される。また、地域住民も移動が可能である。そのため教員や住民の目が行き届き、「まちなか小学校」の安全が確保される設計となっている。交通量の多い道路ではメインパスは高架となっており、小学生は安心して移動ができる。

## 分散型小学校がある生活

分散型小学校は地域の教育、いわば「子供のライフスタイル」を考えるとともに、「大人のライフスタイル」までもサポートしようと考えている。

自主的に自分の好きなことに取り組み、本物の環境で学ぶ子供たちは創造的な発想を持つ人に育っていくであろう。また地域に見守られて育てられ、地域のいろいろな場所で貴重な経験を積む子供たちは「柏の葉」を理解し、そして地域のために行動する「大人」に成長していくと思われる。私たちが最終的に期待しているのは、分散型小学校の「小学校」と「まち」のインタラクティブな交流によって、柏の葉のライフスタイルがより豊かなものになることである。

「小学校」と「まち」の壁を超えて、「子供だけの空間」から「みんなの空間」に変換することで、より豊かな生活が営まれる地域を創造する。「分散型小学校」はそんな「公共空間」である。



## Fグループの感想

### STUDENT

平林 直(東京大学)

この3ヶ月を振り返ると充実感とともに、もっとやれたんじゃないかという後悔の念が去来する。私たちの提案は実際に手を動かし形を作り上げ、それを元に議論し、これを壊して再構築することで徐々に理想に近づいていった。この根気と熱意の必要な作業に私自身もっと勇敢に立ち向かえたのではないかと感じる。その反省を込めつつ他の3人のメンバー、また素晴らしい助言を下さった先生方や関係者の方々、そして私がスタジオに学生として参加することを認めてくれた同じTAの砂川さんに感謝!

田村 康一郎(東京大学)

いったいなぜ、こんな作業量の多いスタジオをやることにしたのか。振り返ってみると、そんな迷いも消えてしまうほどの経験を積むことができたような気がする。さまざまな工夫がなされた視覚的な表現は、素人同然の自分にとって勉強になったし、それぞれの独創性あふれるアイディアに触れ、実現に向けての議論を重ねることはたいへん刺激的だった。何日も陽が昇るまでともに作業したチームのメンバー、貴重なアドバイスをくれた指導陣の皆さま、成果を見に来てくれた関係者の皆さんにこの場を借りて感謝したい。

鎌形 敬人(東京大学)

議論に終始したトシコウ色全開の中間発表と、そのあたりから模型だけ作り続けたケンチク祭の最終発表と。バランスをとつてうまく整理できなかったのが反省点であるけれど、議論にしても模型にしても無駄なくらいやりこんだことは大きな経験になったし、なにより単純に楽しかった。手が動かないことにもがき続けた3ヶ月だったけれど、少しあはれくなってしまった。設計することはこれだけハードだったはずなのに、でもまたやりたくなってしまうのは何故だろう。

パンノイ・ナッタポン(東京大学)

「ものすごく早い3ヶ月間だった」というのは、今の正直な気持ちです。この文書を書き終えるときが僕の「柏の葉デザインスタジオ」の最後の瞬間になると思うと、とても寂しく思います。残念ながら僕らが夢見ていた「分散型小学校」のすべてを皆さんに伝えることはできなかつたが、少子高齢化やライフスタイルの変化が進む中、「教育機関」と「都市」の関係性について改めて考えなければならないこれから時代に「分散型小学校」のようなものが実現されることを、僕は期待しています。

### STAFF

伊藤 香織(東京理科大学専任講師)

【全体について】

2年目になる今回のスタジオでは、具体的に敷地が設定され「公共空間」という具体的なテーマが与えられたことから、どの班も空間レベルにまで落とし込まれた提案となつたことは、成果だと思います。このスタジオのおもしろさの一つは、様々な分野・大学の学生が集まり、地域に関わる多様な人たちが見守ってくれていることです。もっともっといろいろな視点がぶつかり合い、化学反応を起こして新しいものを生成させられたのではないかと、感じています。

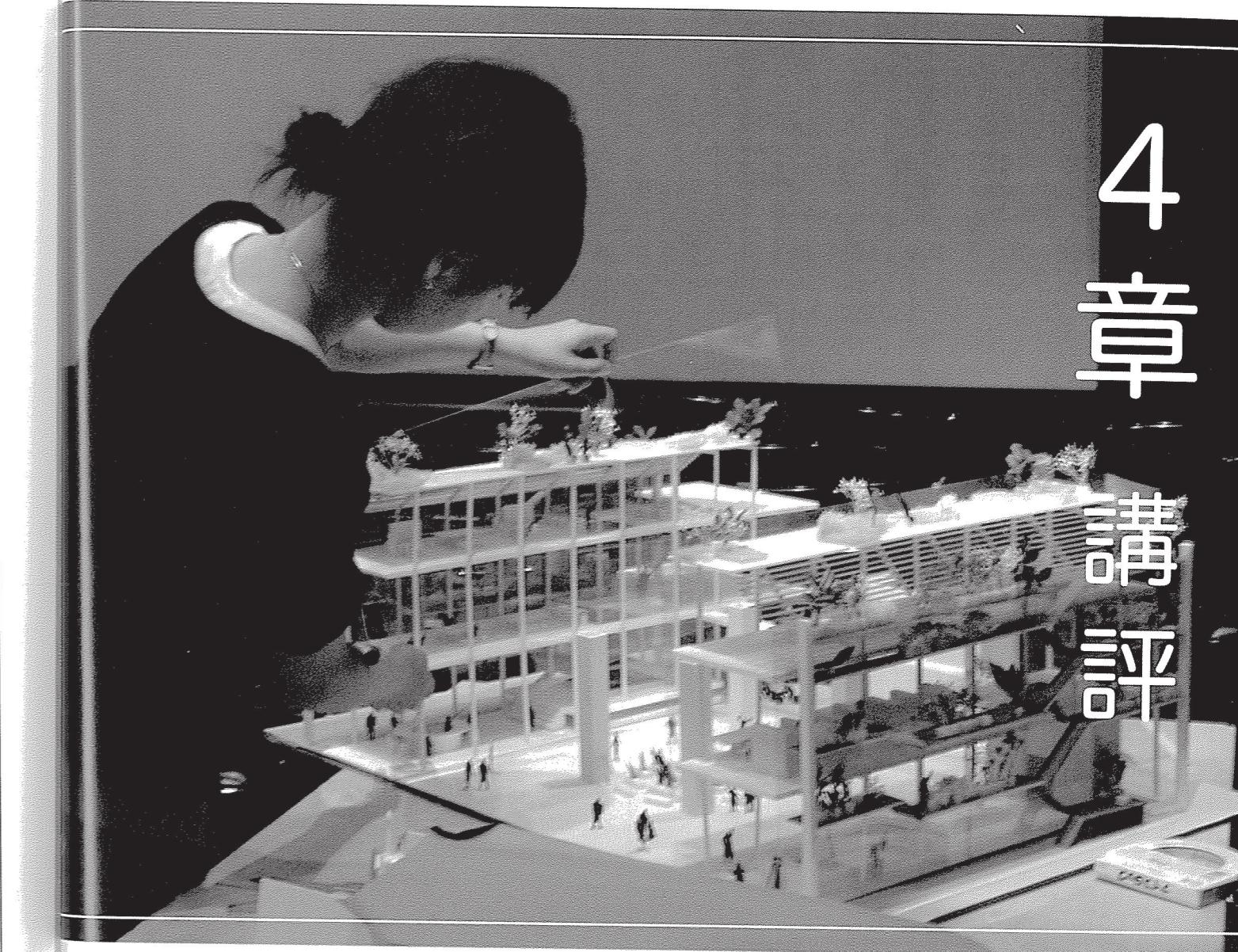
【F班について】

分散型小学校によって、小学校教育を豊かなものにすると同時に住宅地開発にコンテクストを付与する、というアイディアから入り、与えられた課題とは少し異なるアプローチになりました。地域の誕生と成長、教育のあり方、それらに応じた空間の可能性など、ディスカッションの中から出てきたものの最終的に形に落とせなかつた要素は山ほどあります。1/100スケールで空間スタディをしたことがなかつた彼らが、最終講評会には1/100模型を5つも作り上げたことは、ちょっとした驚きでした。

中島 直人(東京大学助教)

~未完のプロジェクト~

発想としては、広大な住宅開発予定地において、開発時点から分散型の新しい公共空間を導き役として埋めこむことで、今までにない住宅地を自成させようというもので、良い意味で時流にも演習課題の設定にも沿わない骨太な提案となるはずだった。しかし、小学校という既存のシステムの改良に手間取り過ぎた。最後に何やらの可能性を込めて「シビックルーム」と意味づけてみたが、そこに、あるいはそこから展開すべき住宅地の像はぼんやりしたままで、公共空間ではなく、公有地に建つ公共施設のデザインに終始した。公有地が住宅地の共的な部分と通じし、更にそれが私的な部分のデザインとも手を組んで、生活がトータルに浮かび上がる、ことはなかった。また、F地を中心とする地区での提案が、柏の葉全体の都市構造を変えていく、例えばこの分散的な公共空間の考え方が他の開発予定地や既成市街地、農村地帯にも広がることで、幹線街路で区切られた没個性的な近代的ゾーニングを顔のあるミクロコスモスたちの有機的な集りへと変相させていくことも可能かと思われたが、そのような提案には至らなかつた。しかし、こうしたいかにも高見の感想は連ねても空しいばかり。皆の議論から非常に刺激を受けた私も含めて、是非、各自のこれから取り組みの中でこの未完のプロジェクトの続きを着手していくべきと思う。思考の持続こそが世の中を、そして自分自身を成長させるのだから。

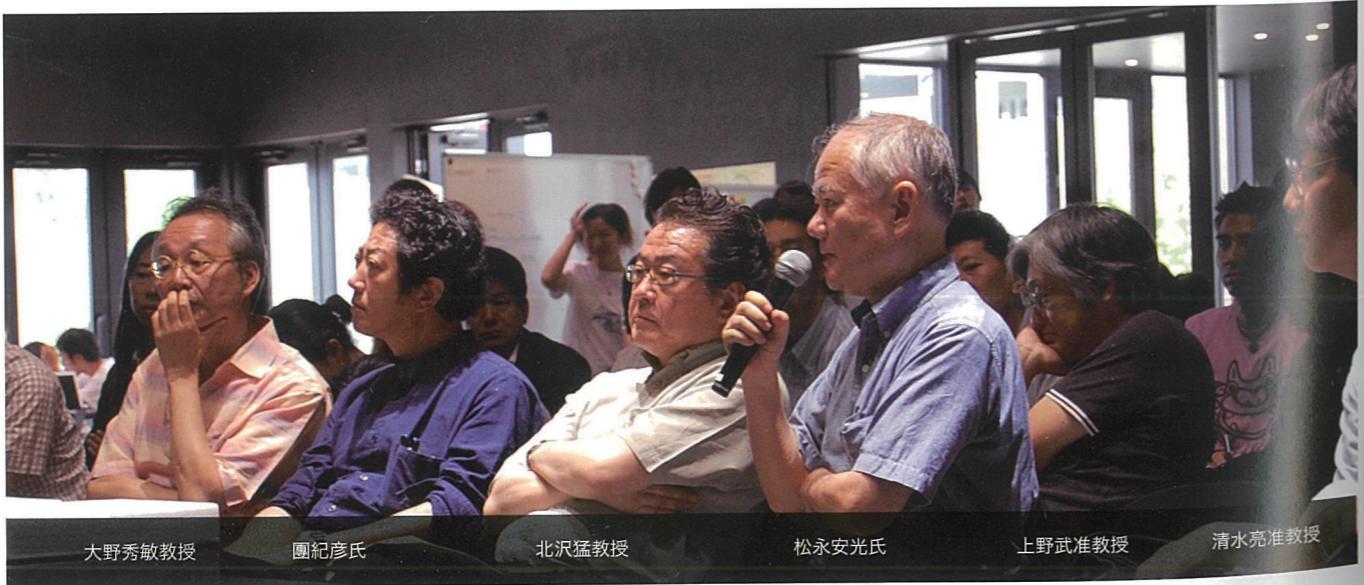


# 最 終 講 評 会

0630 @UDCK

梅雨の雨が心配され蒸し暑い土曜日、お昼を過ぎた頃から観覧者がどこからともなくUDCKに集まりだし、館内がざわつき始めた。しかし発表当人の学生達は妙に静かだった。ここぞとばかりに集中力が高まっているからであろう。直前までパソコンに向かいプレゼンの流れを入念に打ち合わせしている円、模型の細部を直したり、PPTに使う写真を撮ったりと各自が真剣な表情で出番に向けて体制を整えていた。当の私もぎりぎりまで毎回講評会ごとに発行している"スタジオジャーナル"の編集に大わらわだった。今回も講評会前の講演会が行われた。毎回東京大学工学部都市工学科から多彩な教授陣をお呼びし、柏の葉地区のまちのキーワードとなるテーマで40分程レクチャーしていただくコトが恒例となっている。今回は昨年度まで鹿児島大学で教鞭を振るわれていた松永安光氏だ。松永氏は2005年に著された『まちづくりの新潮流』がベストセラーとなっている現代欧州コンパクトシティ論を日本に紹介している第一人者である。

その後行われた講評会は約3時間半にも及ぶ長丁場であった。最初から最後までグループワークとなり、マンパワー



大野秀敏教授

團紀彦氏

北沢猛教授

松永安光氏

上野武准教授

清水亮准教授

がある分、半年前のスタジオと比べどの提案もはっきりとした形となり、ハードからソフト面まで詳細設計されている印象を受けることが特徴のひとつだろう。提案のプレゼンテーションが8分、講評22分だった。この時間配分は初の試みだが、これにより以下の利点が生まれた。

- 1)学生の提案に対し講師陣がきめ細かく講評できる。
- 2)ヒアリング先や対象地関係者からも意見が頂ける。
- 3)学生も8分では伝えきれない設計意図も発信できる
- 4)学生の提案のどの部分が評価に値するのか、観覧者にもその場で分かる。

講評側の講師陣も今まで一番多く集まっていた。常任の講師陣13人に加え、松永氏はもちろんのこと、建築スタジオを担当されている大野秀敏東大教授と千葉大の建築学科・上野武准教授も駆けつけ、授業にも参加協力頂いていた行政の方々を含めると20人はゆうに超えていただろう。数ページにも及ぶプレゼンブックレットを持参し、熱のこもった提案をする学生と講師の厳しくかつ的確な講評の掛け合いが非常に興味深い盛り上がりを見せた。また、グループB/Cのヒアリングに協力して頂いた三協フロンティア(株)の社長も来場された。それは提案内容が講評会をゴールとするのではなく、将来的に実現性を感じさせるものだったからであろう。

全体講評では「『小さな公共空間』の展開が敷地内の複合または同類の分散にとどまり、地域空間のデザインに至らなかったのは残念。即地的な提案が異なる条件で汎用できるか、小さな公共空間が周囲や相互間にどう波及するか考察してほしかった」などあった。

続いて各グループに対する講評を紹介する。

## ぷらっとフォーム

### -TX高架下を活用したまちづくり施設-

**宮脇** 当初はガラスの箱だったが、広場に面して壁面緑化や植栽ポットを置くなど環境意識を表現した。階段や屋上テラスなどデザインも向上している。緑の世話に住民が参加することも大事だろう。全面ガラスでなくても部分的に抜いて通風を確保するのもいいだろう。



**團** 駅前147及び148街区の計画に関わる者として、実現性の高い提案だと評価できる。広場に面して高さ12mの基準線が人間的スケールの創出とファサードの統合に効くだろう。構造計画は不明確だが、階段室にはなんらか構造が表現されるべきだろう。段階的整備の中期には、高架下の商業施設を別街区に収容して、公共空間として整備することも考えられる。

**大野** 既成市街地に挿入するようなデザインに見える。積極的に駅広のあり方を問うなど、現状追認ではなく、大胆な提案がほしい。環境指向とはいいながら、建築規模が過大だし、ガラス壁面のエネルギーコストも大きいだろう。公共施設とするならば、税金が投入されることを考えると、営利施設や民間で可能な計画はもったいない。この街に必要な空間は何か、21世紀のライフデザインはどうあるべきか、考察がほしかった。

**学生** これからの公共空間は民間や個人が関わっていくべきであり、地域貢献の責任がある。そうした自発的な公共性がまちづくりに展開すると考えた。

**松永** 大変スマートで、紳士的な回答だ。まちのプロデュースをする施設や空間に位置づけているのが面白い。しかし、建築自体のプログラムやプランはもう一工夫必要だ。優等生の模範解答や単なる理知的な整理に留まってほしくない。東大のサテライトキャンパスには、学生が活動する生産的な現場をつくるべきではないか。ワークスペースの平面図に机がありたりに配置されているのは残念。建築的な想像力が求められる。

**北沢** プラットフォームが何か伝わっていない。プログラムは改良する必要がある。広場との関係も考えていくべき。

**上野** 建物のファサードに緑を積極的に取り入れたのは、好感が持てる。桜並木協議会で駅の内部まで緑を拡げていこうという意見があつたように、もっと駅全体に緑を浸透させることも考えられる。



## 大学門前町

### -千葉大学とまちの中間領域-

**大野** 門の周りに小さい建物を作った空間形態は良い。しかし、プログラム上、大学がこのような形で市民と接点をもつことには疑問が残る。教育研究が社会貢献だと思う。

**学生** 産学連携が叫ばれているが、日常的な連携は達成しておらず、イベント的なものしかない。地域貢献には日常的な場が必要だ。大学のあり方を考え直したかった。

**松永** 大学が市民と接点を持つのは良い。しかし、千葉大は全国水準の大学である。その価値を明らかにする意味で、ショーケースとして価値がある。区間形態は面白いけれど、環境を配慮すれば、詳細の意匠は変わらはず。

**團** 提案のスケールが小さい。説明は分かりやすいが、それが魅力的かどうかは分からない。もっと、オリジナリティとクリエイティビティを高め、掘り下げる必要がある。

**上野** 千葉大としては、地域と一緒に考えていくことは既に述べてあるし、将来像も既に提示している。これらの計画をどのように考えたか言及されたい。

**学生** 千葉大の計画は収集したし、インタビューにも何度も行ったが、千葉大側の計画に対して何か疑問をもつことはなかった。

**大野** 全体の配置計画図がないため、提案の位置づけが伝わらない。建築を開けば市民にオープンである、ガラス張りにすれば地域と接点を持てるというのは安直である。

**上田さん** 一般市民からみると、千葉大や東大は敷居が高い。提案のように接点がほしい。こういう施設や空間を市民がどう利用するか考えてほしい。

**北沢先生** 建築の形はコンセプトの表現と考えれば、成功している。しかし、大学の活動と街の活動の繋がりが伝わっていない。運営主体を社会的企業(NPO)としたのは、安直である。大学の研究成果を直接社会化するのは難しいので、それをどうやって社会化するか提案がほしかった。



## セルフデザイン工房

-柏の葉ライフスタイルの実験所-



上野 工房が点在している初期段階、材料をどう調達するのか？そうした成長の仕組みを提案すべきだった。一気に整備するショッピングセンターの発想とは、そもそも異なる提案だったのだ。

松永 提案の作業場付きDIYは、既に最新店にはある。発想がお粗末な気がする。日曜大工のアトリエ単体では商業ベースに乗らない。柏の葉のように国家的な施設が立地する地域に、このような集落的な土地利用が成立するか疑問である。

團 経済的には無理があるが、あらゆるパターンの模型をつくり、いろいろと考えている。こうした先を走るエネルギーは評価したい。ただし、建築学生が陥る空間形態への偏重に陥らないように気をつけて欲しい。

学生 日曜大工の雰囲気になったが、あくまでも実験的な施設と考えていた。市民との接点を持つことが大事であり、出発点としてDIYを取り上げた。

三協フロンティア 感動した。柏は城下町のような歴史や独自の特徴がない。柏発のデザインを考える必要を感じた。ユニットをインキュベーションとして事業発展したら、すばらしい。20世紀は大企業による企業城下町が形成されたのに対し、21世紀は小さくても技術のある企業が多数集積する企業城下町が十分実現可能である、柏を目指すべきヒントを頂いた。

学生 評価していただき、ありがとうございます。ユニットの可能性を模索する中で、公園など地域の様々な場所にあれば面白いと思った。頂いたご意見をプラスアップするよう努力したい。



## かしわのはっぱみち

-新しい境界のデザイン-

團 どうして直線でなく、曲線にしたのか？

学生 通り道として気持ち良い空間であると同時に、いろいろな使われ方を想定して溜まりをつくった。また、直線で明確すぎる隣地境界を緩やかにぼかして見せたかった。隣地境界をまたぐ曲線間で、面積は相殺している。

大野 考え方は面白いが、高校や大学など隣接の既存施設をどう活用するか伝わらない。グレーチングやキッチンを説明する前に、教室の種類と位置、大学留学生寮への提案など、全体の配置計画図が必要だ。それがアーバンデザイン。千葉大門前町提案についても同じことがいえる。

学生 高校の吹奏楽部や茶道部がクラブ活動したり、それを留学生が体験するなど、高校生と留学生の交流する利用形態を考えた。

團 このような魅力的な形態を提示するには、通常の10倍くらい、この形態を採用する理由を丁寧に説明しなければならない。まだ出発点にすぎない。たとえば、地面に半分埋めるなどランドスケープ的な造形とするなど、展開の余地は大いにある。

松永 一番評価したいのはプロセスである。高校生にヒアリングしたり、先生と話しているのは高く評価できる。形態ではないアーバンデザインの示し方をもっと大事してほしい。

清水 空間を設計することで社会関係を創出しようとしているのが非常に良い。ただし、その運営主体として安直にNPOを出すのはまずい。千葉大、高校、住民がどう関われるか、掘り下げてほしい。



北沢 目から鱗のアイデアである。冒頭で、境界にどういう意味をもたせるか、境界をどう変えるとどのような効果があるか、概念をダイアグラムで整理したほうがいい。

上野 今日言われた点を整理したものを、千葉大学のキャンパス計画会議で議題にあげようと思う。

大野 投資額に対して効果・影響は大きいのがアーバンデザインの醍醐味。したがって、配置図は投資すなわち施設だけでなく、その影響範囲を図化するべきである。

学生 7月13日、住民と一緒にこの道で家具をつくる企画がある。

宮脇 ワークショップや住民や高校生を巻き込んだ点は効果が大きく、評価したい。

## サイクリングプロジェクト

-自転車シティ柏の葉-



大野 ヨーロッパでも乗り捨て自転車は普及してきている。大事なのは駅のステーション。公園のステーションに比べ、デザイン不足の感あり。公園の中は自転車よりも歩行者を重視すべき。直接問題になる駐輪場を検討されたい。

團 形の力は充分發揮できている。空間デザインはレベルが高い。

松永 駐輪場の設計に留まらず、それらをどう結ぶか大事である。自転車道や道路計画に踏み込み、自転車を中心としたまちづくりの提案にしてほしい。また、排出ガス抑制を目的とした環境配慮にも言及が必要である。

学生 自転車レーンを打ち出すかどうかで随分議論した。



伊藤 ステーション自体のデザインは面白くてよかった。これを使うシステムをどう展開するか、それによって街がどう変わるのが分からぬ。自転車で移動するスケールは街の構造を変えうるのだと思う。ステ

ーションの位置は学生の生活範囲のようだ。「なんとなく置いてみた」ではなく「ここに置くからまちが変わるんだ」という説明や意欲が欲しかった。

北沢 こういった施設を提案する話と、自転車専用道路の話は別の話である。自由に自転車を使うということにするならば、もっと別の設定もあってもいい。全体のストラクチャーの話と、ここの施設の話、両方大事。

## まちなか小学校

-街に溶け込む分散型小学校-

大野 想定内の質問だが、小学校をここまで分散型にして、移動の問題に比べて、開くことによって得られる利益は、いかほどと捉えているか？

学生 安全や保安を考えると、分散型のシステムは成り立たないとも思うが、回避できるよう配置計画は十分考慮した。道路との関係を表現できていないが、検討はした。たとえば、メインパスという主動線を設け、そこに職員室などを配置して、「見守る」構成をとった。

松永 施設を小規模にして分散させることは、既成市街地で可能性があるが、柏の葉のような広大な新開発地で妥当性や意味はあるのか？

宮脇 各々の施設は模型までしっかりと作成されているが、アーバンデザインとして全体のデザイン調整がなされているか。

北沢 このアイデアは、空店舗や商店街に小学校を挿入する提案をある街にしたことがある。既定の施設を時間別に使い方を捉えて設定してほしかった。5年、10年たったときの中期的展望をほしかった。

大野 集合化している価値もある。必ずしも分散型が良いわけではない。モデルとして分散型がありえても、柏の葉で適用する論理が希薄だ。



## 講演『パーキングアブルなまちづくり』

最終講評会では元鹿児島大学教授で建築家の松永安光氏の講演会「パーキングアブルなまちづくり」を開催しました。建物と空地の一体で公共空間を形成する意義を説かれた後、御自身のプロジェクトを例に、建築と外部空間がモザイク状に複合した、コンパクトシティの日本型モデルが示されました。

松永安光氏  
(近代建築研究所所長)

## 編集後記 Editor's postscript

ブックレットの編集に最も貢献してくれたのは、平林君 (TA)、砂川さん (TA)、そして竹川君です。平林君は、各班の隊長と電話やメールを重ね、編集部の窓口として活躍してくれました。ブックレットでは、「柏の葉」のページを作成してくれました。砂川さんは、スタジオブログの立ち上げから更新、スタジオジャーナルを企画・発行してくれました。ブックレットでは「プロセス」と「最終講評会」のページを作成してくれました。そして竹川君には、全体を通してレイアウトを協力して頂きました。みなさんの努力のおかげで、価値のある内容に仕上がっていると思います。心から感謝しています。ありがとうございます。お疲れ様!

丹羽由佳理 Yukari NIWA (Chief Editor)

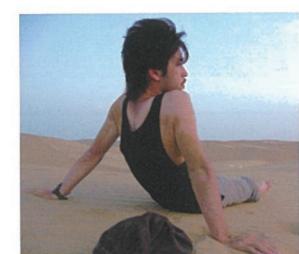


学生として参加したスタジオの最終発表が終わってすぐにこのブックレットの編集が始まりました。休む暇なく取り掛かった編集は3週間という短い期間で出来上りました。編集に熱心に取り組んだ学生の協力なくしては実現できませんでした。ありがとうございました。  
編集側の段取りに手間取り、それぞれの班の最善のものが表現できているかわかりません。しかしこの本に表現されているのは編集者と学生の3週間の葛藤の結果です。3ヶ月間のスタジオの熱気をこの本から感じとってもらえたなら、とてもうれしいです。

平林直 Tadashi HIRABAYASHI (TA,Editor)

これは『毎日をより楽しく!』するための都市デザイン本です。大学院生の柏の葉への愛と希望が詰まっています。数年後には実現している可能性も高いです。実はスタジオジャーナルも前回スタジオで私が提案したソフトのアーバンデザイン案だったりします。ジャーナルとこのブックレットは『都市を考える面白さ』を感じてもらえる様に工夫されています。これを片手に、まちへの想いを色々な人が語り合う街角やUDCKの風景、かっこいいですね。連日の徹夜を笑顔で支えてくれた編集隊の皆様や、赤ペンできめ細やかな添削をしてくださった北沢先生のおかげで、デザインを伝える楽しさと大切さを学びました。

砂川亞里沙 Arisa SUNAGAWA (TA,Editor)



竹川征 Tadashi TAKEKAWA (Layout)

最近、慢性的な頭痛に苛まれています。偏頭痛や肩凝り、ストレスが主原因でないことは理解しているのですが、何とも言えない日々を送っています。凝り固まった左脳をどうこうするのではなく、右脳を解放させてあげて脳バランスを保つことが、脳科学的に大切だと思うのです。

東京大学大学院新領域創成科学研究科環境学研究系共通科目  
環境デザイン統合教育プログラム IEDP:Integrated Environmental Design Program  
都市デザインスタジオ2007

東京大学・千葉大学・東京理科大学共同研究演習

## 柏の葉アーバンデザイン アイディア・ブック -2

2007年 7月発行

編集 丹羽由佳理、平林直、砂川亞里沙  
松尾真子、長澤怜、平岡惟、柏原沙織、上田恵莉、パンノイナッタポン  
レイアウト協力 竹川征  
監修 北沢猛、前田英寿、日高仁

表紙イラスト 白崎信雅  
発行 東京大学COE『都市空間の持続的再生学の創出』  
東京大学大学院新領域創成科学研究科環境学研究系

協力 UDCK柏の葉アーバンデザインセンター  
〒277-8518 千葉県柏市若柴字元堂178-3柏の葉キャンパス駅前148街区3画地 UDS係



都市デザインスタジオ2007 ブログ Urban space Design Studio blog

<http://udstudio07.exblog.jp/>

ALL 3210view, Week ave. 240 view, Day ave. 34 view (4/3 ~ 7/22)

スタジオ最終講評会の打ち上げで、6月後半生まれの3人へサプライズバースデイパーティをしました。すごく盛り上がって思い出深いものになったのは、この3ヶ月苦楽を共にした仲間達の間に築かれた、絆の賜物なんだろうな実感しました。(砂川)